

水洗遺跡

菊川市

平成29・30年度 一級河川稲荷部川豪雨災害等緊急対策事業及び
平成31年度 一級河川稲荷部川緊急自然災害防止対策事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

静岡県埋蔵文化財センター

序

水洗遺跡は静岡県西部の菊川市の西側に存在し、菊川の支流である稻荷部川が開析した谷の中央部に位置しています。

今回の調査面積は小さく、検出された遺構は1条の溝と4本の自然流路跡だけですが、弥生時代後期から古墳時代前期の土器がコンテナで86箱と大量に出土したほか、石器・木製品・動物の骨・種実など様々な種類の遺物が出土しました。このことは、調査区周辺に当時の人々が暮らした集落が存在したことを証明するものであり、その集落での生活の様相をうかがうには十分な成果がありました。

注目すべき成果に、溝から出土した高壙をはじめ祭祀の様子を示す土器群があげられます。また、ト骨やモモの核も出土していて、遺跡周辺で人々が祈りをささげていた姿を想像することが出来ます。

水洗遺跡の近隣では、平成2年度に平尾野添横穴群の発掘調査を当センターの前身である、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行っています。今回の調査成果との直接的な関連は見いだせませんが、一つ一つの調査の積み重ねが、地域の歴史を明らかにするためには必要であり、着実な一歩を記すことが出来たと考えております。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、袋井土木事務所掛川支所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

2020年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長
酒井敏明

例　　言

- 1 本書は、静岡県菊川市中内田に所在する水洗遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、一級河川稲荷部川の河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所掛川支所の依頼を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本調査の期間及び面積は、以下のとおりである。
現地調査 平成 29 年 12 月～平成 30 年 2 月 調査対象面積 248 m²
資料調査 平成 30 年 7 月～平成 31 年 3 月、令和元年 8 月～令和 2 年 3 月
- 4 調査体制は以下のとおりである。
平成 29 年度
所長 酒井敏明 次長兼総務課長 山本広子 調査課長 中鉢賢治 総務班長 土戸美樹
普及班長 蔭本俊明（調査担当）
平成 30 年度
所長 酒井敏明 次長兼総務課長 山本広子 調査課長 中鉢賢治 総務班長 土戸美樹
普及班長 蔭本俊明（調査担当） 主査 大森信宏（保存処理担当）
令和元年度
所長 酒井敏明 次長兼総務課長 中野克彦 調査課長 中鉢賢治 総務班長 土戸美樹
普及班長 蔭本俊明（調査担当） 主査 大森信宏（保存処理担当）
- 5 本書の執筆は、第 5 章以外を蔭本俊明が、第 5 章第 1 節は鈴木三男が、第 2 ～ 4 節はパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
- 6 本書の編集は、静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 発掘調査における業務委託は以下のとおりである。
掘削・遺跡測量等業務委託 株式会社沖開発
整理作業・保存処理業務委託 株式会社パソナ（平成 30 年度）、株式会社イビソク（令和元年度）
木製品樹種同定調査業務委託 鈴木三男（平成 30 年度）
種実等同定調査業務委託 パリノ・サーヴェイ株式会社（平成 30 年度）
- 8 発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
青木 修、北原 勤、小泉祐紀、後藤和風、鈴木敏則、高木 淳、田村隆太郎、中嶋郁夫、松下徳男、渡井英吾（五十音順・敬称略）
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第VII系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
(X = -141040, Y = -39770) = (0, A)
- 3 出土遺物は、通し番号を付して取り上げた（遺跡略号：TMA）。本書中の番号とは同一でない。
- 4 遺構図、遺物実測図の縮尺は、それぞれにスケールを付した。
- 5 色彩の用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修 1992）を使用した。
- 7 第2章第2節の周辺地形図（第2図）と周辺遺跡分布図（第3図）は菊川市役所発行1:25,000「菊川市全図」を、第3章第2節の本調査範囲図（第4図）は菊川市役所発行1:2,500「菊川市都市計画図」を複写し加工・加筆した。
- 8 遺構番号については、以下のように表記した。なお、通し番号は原則として現地調査において付けたものを用いたが、種別の表記は一部変更したものがある。
遺構番号=種別+番号 例) SD01, SR02
種別…SD:溝状遺構 SR:自然流路跡
- 9 遺構図、遺物実測図のトーンは、以下の表現として用いた。その他の表現は図中に注記した。
須恵器断面：K 100% 灰釉陶器の施釉：一点破線

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の概要	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の方法と経過	
第1節 現地調査	7
第2節 資料調査	8
第4章 調査の成果	
第1節 概 要	11
1 土 層	
2 遺構と遺物	
第2節 遺 構	13
第3節 遺 物	19
1 遺構内出土遺物	
2 遺構外出土遺物	
第5章 自然科学分析	
第1節 水洗遺跡出土木製品の樹種	45
第2節 水洗遺跡の種実同定	49
第3節 水洗遺跡出土石器の岩石肉眼鑑定	53
第4節 水洗遺跡出土動物骨の同定	56
第6章 まとめ	59
参考・引用文献	
写真図版	
抄録	

挿図目次

第1図 道跡位置図	1	第15図 SR02出土遺物実測図1	23
第2図 周辺地形図	3	第16図 SR02出土遺物実測図2	24
第3図 周辺遺跡分布図	4	第17図 SR03出土遺物実測図	25
第4図 本調査範囲図	9	第18図 SR04出土遺物実測図	26
第5図 調査区とグリッド配置図	10	第19図 SR05出土遺物実測図1	28
第6図 調査区全体図・土層図	12	第20図 SR05出土遺物実測図2	29
第7図 SD01実測図	14	第21図 SR05出土遺物実測図3	31
第8図 SR02実測図	15	第22図 SR05出土遺物実測図4	32
第9図 SR03実測図	16	第23図 SR05出土遺物実測図5	33
第10図 SR04実測図	17	第24図 SR05出土遺物実測図6	34
第11図 SR05実測図	18	第25図 SR05出土遺物実測図7	35
第12図 SD01出土遺物実測図1	20	第26図 SR05出土遺物実測図8	36
第13図 SD01出土遺物実測図2	21	第27図 道構外出土遺物実測図1	38
第14図 SD01出土遺物実測図3	22	第28図 道構外出土遺物実測図2	39

挿表目次

第1表 周辺遺跡分布図掲載遺跡一覧表	5	第7表 種実同定結果一覧表	50
第2表 出土土器観察表	40	第8表 岩石肉眼鑑定結果一覧表	53
第3表 出土石器観察表	44	第9表 器種別石質組成一覧表	54
第4表 出土土製品観察表	44	第10表 骨同定結果一覧表	56
第5表 出土木製品観察表	44		
第6表 水洗遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧表	45		

挿写真目次

写真1 現地調査状況	8	写真5 種実遺体	52
写真2 資料整理状況	8	写真6 石材	55
写真3 出土品木材顕微鏡写真1	47	写真7 出土骨	58
写真4 出土品木材顕微鏡写真2	48		

写真図版目次

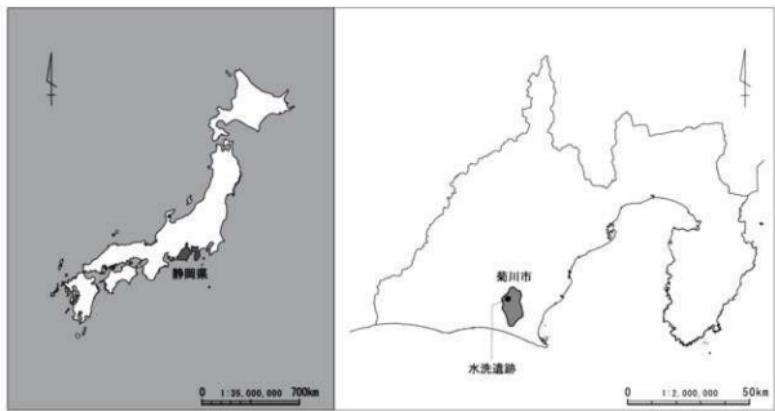
- | | | | |
|------|--------------------|------|----------------|
| 図版 1 | 1 調査区遠景（北西から） | 図版 9 | SR04・SR05出土土器 |
| | 2 調査区全景 | 図版10 | SR05出土土器 |
| 図版 2 | 1 調査区完掘状況（北西から） | 図版11 | SR05出土土器 |
| | 2 SD01完掘状況（西から） | 図版12 | SR05出土土器 |
| 図版 3 | 1 SD01遺物出土状況（東から） | 図版13 | SR05出土土器 |
| | 2 SR02本製品出土状況（南から） | 図版14 | SR05出土土器 |
| | 3 SR02完掘状況（南から） | 図版15 | SR05・遺構外出土土器 |
| 図版 4 | 1 SR03完掘状況（南から） | 図版16 | 遺構外出土土器 |
| | 2 SR04完掘状況（北西から） | 図版17 | 出土土製品・石器・ガラス製品 |
| 図版 5 | 1 SR05完掘状況（北西から） | 図版18 | 出土木製品 |
| | 2 SR05遺物出土状況（西から） | 図版19 | 出土木製品・卜骨・動物骨 |
| 図版 6 | SD01出土土器 | | |
| 図版 7 | SD01・SR02出土土器 | | |
| 図版 8 | SR03・SR04出土土器 | | |

第1章 調査に至る経緯

菊川流域は常に洪水に悩まされてきた地域であり、現在でも豪雨の際には冠水する地区がある。そのため、支流も含めた流域では河川改修工事が行われ続けている。これまでにも静岡県埋蔵文化財センターの前身である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所によって、菊川市内では白岩遺跡・白岩下遺跡・御領所遺跡において菊川の支流での河川改修工事に伴う発掘調査を行い、発掘調査報告書を刊行してきている。

今回調査することとなった稻荷部川は菊川に北西から合流する支流の一つであるが、この川においても下流側から順次河川改修工事が行われてきていた。その工事が中内田地区に進むと、工事箇所が東平尾遺跡・水洗遺跡・平尾遺跡と周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内にあたることが判明し、平成28年度に静岡県教育委員会文化財保護課により確認調査が行われた。その結果、東平尾遺跡と平尾遺跡の範囲からは、わずかに遺物が出土した地点があったが、明確な遺構は検出されなかった。一方、水洗遺跡では、一部テストピットから大量の土器が出土した。この確認調査の結果を元に、静岡県教育委員会文化財保護課と袋井土木事務所掛川支所との協議により、水洗遺跡で遺構が存在すると考えられる範囲を静岡県埋蔵文化財センターが本発掘調査を行うことが取り決められた。

なお、調査の時期としては、調査範囲が現在も耕作されている水田の一部であることから、稲の収穫が終了した後、平成29年度の10月以降に行うこととした。



第1図 遺跡位置図

第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

菊川市は静岡県西部、旧国名でいう遠江の東寄りに位置し、南北に細長い形をしている。東側は牧之原台地とそこから派生する丘陵が連なり、北から島田市・牧之原市・御前崎市と台地、丘陵上で接している。西側は小笠山山麓からの丘陵が発達し、菊川下流部など一部を除き丘陵上で掛川市と接している。市の北に位置する掛川市栗ヶ岳山麓に源を持つ菊川は市名の由来になっており、東からは牛渕川が、西からは西方川が合流するなど、多くの支流と合流しながら、南へと流れ掛川市を経て遠州灘へ注いでいる。菊川市の中心地域は菊川の中流域にあたり、菊川が形成した沖積地及び周囲の丘陵部から形成された盆地のような地形となっている。

水洗遺跡は菊川市中内田に位置し、JR菊川駅からは南南西に約4km、東名高速道路菊川ICからは南西へ約3kmと、市域でも西端近くに位置している。内田地区は菊川の一支部である上小笠川が北西から南東に向かって開いた沖積地を中心とする。この谷をさかのぼれば掛川市の中心部へと抜けることができ、近世以降の主要な交通路であった。遺跡はこの谷から尾根を一つはさみ、同じく菊川の支流の一つである稻荷部川が開削した細い谷底に存在する。菊川との合流地点から上流に約3kmの地点にあり、さらに上流約1.5kmで谷頭となる。谷の最奥部には灌漑用のため池である七曲池が作られている。

遺跡付近の谷は幅約100m、丘陵との比高差は約30mである。現在、周辺は主に水田として利用されており、田園風景が広がっている。

現在の稻荷部川は直線的に谷の中央部を流れ、水洗遺跡の中央を貫いた水路のようになっているが、このような状況は、のちに触れるように昭和の時代に行われた改修工事によるものである。

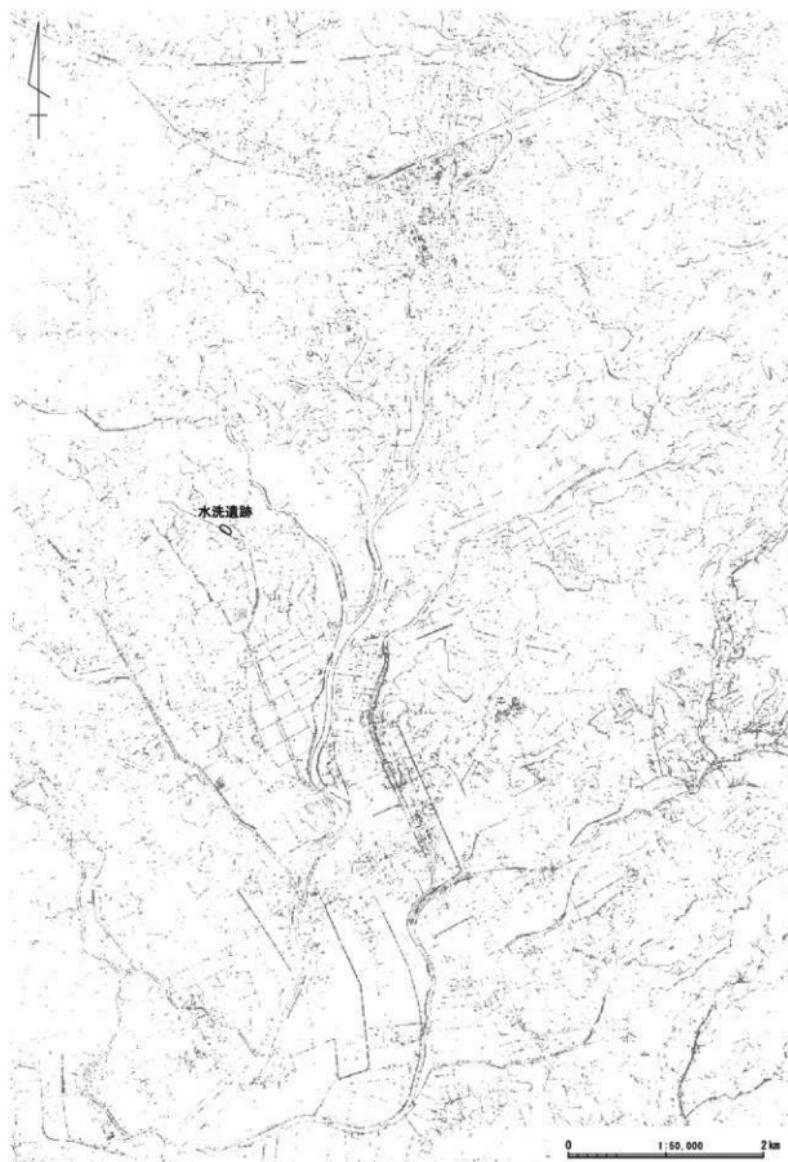
第2節 歴史的環境

菊川市内では、第3図に示したように埋蔵文化財包蔵地として、多くの遺跡が登録されているものの、発掘調査により遺跡の内容が判明している例はあまり多くはない。ここでは、発掘調査例を中心に時代ごとに追ってみる。なお、遺跡名に付している番号は菊川市教育委員会で登録している埋蔵文化財包蔵地カードの番号である。

旧石器・縄文時代では、牛渕川左岸の丘陵上に位置する三沢西原遺跡(179)で旧石器時代の石器群がブロックで検出されている。また、同遺跡では縄文時代早期と中期に、隣接する久保ノ谷遺跡(177)でも中期に集落が形成されている。

西方川右岸では、白岩下遺跡(109)から縄文時代中期の土器片が出土しているが、集落域はより西の丘陵部と推測される。また、白岩下遺跡から約1km下流の丘陵上に位置する長池遺跡(119)では早期末から前期の集落地が確認されている。

稻荷部川流域を見ると、昭和の初めころまでに打製石斧、磨製石斧、石錐が発見された矢多神社付近では、段平尾Ⅰ遺跡(167)が縄文時代の散布地として登録されるなど、丘陵上に縄文時代の集落が知られている。



第2図 周辺地形図



第3図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡分布図掲載遺跡一覧表

番号	種別	遺跡名	番号	種別	遺跡名	番号	種別	遺跡名
45	散布地	仲島遺跡	128	散布地	月見I遺跡	177	集落跡	久保ノ谷遺跡
47	その他（縄錆）	鳥居原遺跡	129	散布地	鶴室遺跡	178	散布地	段畠敷道跡
48	散布地	樺南門遺跡	130	散布地	辻ノ所遺跡	179	集落跡	三沢西原遺跡
64	散布地	豆沢遺跡	131	龜崎跡	御川門遺跡	180	散布地	山王遺跡
65	散布地	斐林遺跡	132	龜崎跡	木舟遺跡	181	散布地	御嶽寺原遺跡
66	散布地	八幡遺跡	133	散布地	御円道跡	183	散布地	堂山遺跡
67	古墳	八幡古墳	134	散布地	森綱ヶ谷遺跡	189	古墳	法然塚古墳
68	散布地	西路・打上遺跡	135	散布地	竹ノ谷遺跡	200	集落跡	西福寺西原跡
71	古墳	鹿島古墳	136	その他（糸垂）	下ノ所遺跡	204	散布地	若宮遺跡
82	散布地	井成山（大宿）遺跡	137	その他（糸垂）	森柳川遺跡	205	散布地	宮ノ西遺跡
83	集落跡	白岩遺跡	138	横穴墓	奥原横穴群	215	散布地	東側道跡
84	散布地	高瀬遺跡	139	龜崎跡	森前遺跡	216	散布地	山本道路
85	横穴墓	下本所A横穴群	140	横穴墓	森前横穴遺跡	217	城越跡	八ヶ谷遺跡
86	横穴墓	下本所B横穴群	141	龜崎跡	森前御前敷遺跡	218	散布地	長池塙道跡
93	横穴墓	古田横穴群	142	散布地	正願寺原遺跡	220	散布地	八所遺跡
94	散布地	新井遺跡	143	横穴墓	政所横穴A群	221	集落跡	林光寺遺跡
95	龜崎跡	四ツ谷遺跡	144	横穴墓	政所横穴A群	223	散布地	寺尾遺跡
96	龜崎跡	下三道跡	145	龜崎跡	前坂所東敷道跡	224	散布地	米山尾敷遺跡
97	横穴墓	下田横穴群	146	横穴墓	靈巖山1号墳	227	散布地	方吹遺跡
98	散布地	小出遺跡	147	散布地	政所遺跡	228	散布地	西軒道路
99	城跡跡	上ノ城皆守塗	148	横穴墓	東平尾横穴群	229	散布地	政所山本道路
100	散布地	樺下遺跡	149	古墳	木手1号墳	231	散布地	長池塙道跡
101	横穴墓	御前横穴群	150	散布地	平尾遺跡	237	散布地	三沢摩ノ谷遺跡
102	その他（糸垂）	一ノ坪遺跡	151	散布地	水洗遺跡	240	散布地	集落跡
103	横穴墓	小出横穴群	152	散布地	東平尾遺跡	241	横穴墓	大堀森横穴群
104	古墳	藤谷古墳群	153	横穴墓	政所横穴群	242	散布地	城向遺跡
105	横穴墓	藤谷横穴群	154	散布地	美濃川遺跡	243	城跡跡	御前跡
106	龜崎跡	御前川遺跡	155	散布地	耳川遺跡	244	散布地	堤跡
107	散布地	加茂神社遺跡	156	古墳	平尾八幡山古墳	245	横穴墓	志麻堂横穴群
108	集落跡	小川端遺跡	157	横穴墓	平尾足跡横穴群	247	散布地	森道跡
109	散布地	白石I遺跡	158	散布地	松山遺跡	248	古墳	上平尾大塚1号墳
110	散布地	白岩東側開道跡	159	散布地	段平尾IV遺跡	249	古墳	上平尾大塚2号墳
111	散布地	白岩西側開道跡	160	散布地	段平尾II遺跡	250	散布地	上平川政府遺跡
112	散布地	白岩段II遺跡	161	その他（縄錆）	矢掛經屋遺跡	251	古墳	瑞穂寺2号墳
113	散布地	白雲段I遺跡	162	散布地	段平尾I遺跡	252	横穴墓	八幡ヶ谷横穴群
114	散布地	西脇遺跡	163	散布地	吉川遺跡	253	散布地	下平川八幡谷遺跡
115	散布地	広原遺跡	164	龜崎跡	高田八幡敷道跡	254	散布地	下平川八幡神社西道路
116	横穴墓	山田横穴群	165	散布地	段平尾遺跡	255	横穴墓	大堀森横穴群
117	散布地	市ヶ原遺跡	166	散布地	段平尾II遺跡	256	古墳	好運寺山古墳
118	散布地	長池北遺跡	167	散布地	段平尾I遺跡	257	横穴墓	東面横穴群
119	龜崎跡	長池遺跡	168	横穴墓	稻荷山山横穴群	259	横穴墓	樟原横穴群
120	横穴墓	長池横穴群	169	横穴墓	枝木・谷横穴群	278	散布地	下平川六反塙遺跡
121	古墳	松森古墳群	170	横穴墓	稻荷山遺跡横穴群	330	古墳	八幡ヶ谷I遺跡
122	横穴墓	松森横穴群	171	龜崎跡	土塹遺跡	331	古墳	志麻堂古墳群
123	古墳	長池古墳群	172	散布地	椎ヶ谷遺跡	333	古墳	瑞穂寺1号墳
124	散布地	長池遺跡	173	龜崎跡	東横穴寺原遺跡	334	古墳	人蔵古墳群
125	散布地	原山遺跡	174	龜崎跡	御原敷設道跡	338	横穴墓	好運寺山横穴
126	散布地	防丸郡遺跡	175	古墳	段横古墳			
127	散布地	月見II遺跡	176	集落跡	西山遺跡			

昭和50年に発行された『一郷土誌一内田のさと』に「東平尾水洗遺跡」は「昭和二十六年一月、土地改良工事により、東平尾を貫流する用排水の開さくの際、地下一米から繩文土器が出土して判った遺跡である。」と記されている。また、加曾利E式土器のほか「磨製及び打製石斧、錐石、石鏃、くるみ、焼石等」が出土したが、住居跡は確認できなかったことから、「当時は山寄りの小高いところに住居は営まれていたであろう。」としている。同書には「東平尾水洗遺跡」の出土地点を示す図などは記載されておらず不明であるが、遺跡名からは今回の発掘調査地点に近く、「東平尾を貫流する用排水」は稻荷部川のことと想像される。平尾遺跡(150)は繩文時代の散布地、水洗遺跡(151)は弥生時代の散布地、東平尾遺跡(152)は繩文時代の散布地としてそれぞれ登録されているのは、その記録が元となっている

と思われる。

平成 28 年度に行われた静岡県教育委員会文化財保護課の確認調査では、東平尾遺跡内のテストピットにおいて、1.2 ~ 2 m の深さから、縄文土器片が計 3 点出土している。いずれも小破片で、遺構を伴わないが、昭和 26 年に発見された「東平尾水洗遺跡」との共通点を見いだせる。

弥生時代になると沖積地への進出が見られるようになる。弥生時代中期中葉の標識遺跡である嶺田遺跡、中期後葉の標識遺跡である白岩遺跡（83）が代表格ではあるが、ともに遺跡の具体的な様相はほとんどわかっていない。そんな中、菊川と西方川の間の微高地に立地する宮ノ西遺跡（205）は土地区画整理事業によってまとまった面積の調査が行われ、嶺田式期から菊川式の堅穴式住居跡とともに方形周溝墓群も検出され、墓域を伴う中心的な集落であったと考えられる。また、条痕文系の土器棺も検出されており、沖積地への進出が弥生時代前期に始まることが知られる。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては御領所遺跡（106）、林光寺遺跡（221）、土橋遺跡（171）、西軒遺跡（228）といった遺跡が沖積地に展開するとともに、三沢西原遺跡など丘陵上の集落も多く知られている。

古墳時代で特筆されるのは、菊川左岸の沖積地に築かれた古墳時代前期の前方後円墳である上平川大塚 1 号墳（248）である。大正時代に三角縁神獸鏡が出土しているが、京都府椿井大塚山古墳出土鏡と同范であることから、菊川地域と近畿とのつながりを示している。その後、中期になると丘陵上の古墳が増加している。調査された例としては、長池古墳群（4 号墳）（123）、八幡ヶ谷古墳（330）、瑞泉寺 1 号墳（333）、志味堂古墳群（331）などがあげられ、古墳時代の様相が明らかになってきている。

東遠江は、後期になると横穴墓が爆発的に築かれる地域である。水洗遺跡の位置する谷を挟む丘陵上には東平尾横穴群（148）、平尾野添横穴群（157）が存在している。平尾野添横穴群は 2 群 17 基の横穴墓が調査され、6 世紀末ないし 7 世紀初頭から 8 世紀前葉にかけて営まれたことが分かった。東平尾横穴群は『遠江の横穴群』において概要は知られ、3 群 37 基の横穴墓が確認されている。

古墳時代の集落では、古墳時代後期から段丘上に形成されはじめ、古代へと継続していることが判明した久保ノ谷遺跡と宇藤遺跡が貴重な調査例である。

古代の当地域は遠江国城飼郡に属するのであるが、城飼郡衙と推定される遺跡はまだ見つかっていない。そこで、再び宮ノ西遺跡の調査が注目される。約 70 棟もの倉庫と思われる掘立柱建物が検出され、「郡符」木簡、墨書き土器なども出土したことから郡衙関連遺跡と認められる。ただし、墨書きの内容、硯の出土がないなど、郡衙中心とは考えられず、郡衙の機能を分掌した遺跡であると思われる。加茂神社遺跡（107）では、古代の瓦が採集されており、寺院の存在が想定されている。西側に位置する宮ノ西遺跡とともに、菊川流域でも核となる地域であると認められよう。

また、郡衙の分掌の機能を持った遺跡としては、宇藤遺跡もあげられ、古代の様相も徐々に解明が進んでいるといえよう。

中世では、多くの集落遺跡が調査されているが、宮ノ西遺跡、御領所遺跡、林光寺遺跡、土橋遺跡、西軒遺跡といった、弥生時代の沖積地の自然堤防上遺跡で、中世にも再び集落が営まれるようになる。

中世の内田の様相は文献資料によってもうかがえる。13 世紀～14 世紀にかけての文献によって、内田庄と呼ばれた荘園が存在し、鎌倉時代の御家人内田氏が地頭職をつとめていたと認められており、高田大屋敷遺跡（164）との関係が注目されている。

第3章 調査の方法と経過

第1節 現地調査

調査区の設定（第4図）発掘調査対象範囲は、稻荷部川の改修工事が水洗遺跡の埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲とし、長さ45m、幅5.5mの細長い範囲である。しかし、安全の確保のため、調査区北東側の稻荷部川との間に非掘削帯を設けることとしたため、実際に調査できた範囲は、遺構検出面で幅約2mとさらに細長い範囲となってしまった。

調査の実施方法 現地調査では、調査担当者は調査全体の計画と調整、現地の遺跡状況等の評価と判断を行い、掘削作業や基礎整理作業、仮設工などの掘削等業務と、水準等測量や遺構実測、空中写真測量、空中写真撮影を合わせて、掘削・遺跡測量等業務として委託した。

調査経過 平成29年12月1日に現地作業を開始した。調査前状況、調査区の遠景写真の撮影などの後、表土等除去を12月7日に開始した。12日に表土除去を完了し、グリッド杭を設置した。翌13日からは土留などの安全対策を施したのちに、包含層掘削を開始した。包含層掘削は平成30年1月4日に終了し、5日に遺構検出を行った。遺構掘削は10日から開始し、2月1日に終了した。1日にはラジコンヘリコプターによる景観写真の撮影を行い、7日の写真撮影、実測作業をもって、現地の調査を終了した。埋め戻しは9日から開始し、16日に完了した。

基礎整理作業は12月22日から開始し、平成30年3月1日まで行った。

掘削作業の方法 表土等除去は、バックホウの掘削とダンプの土砂等運搬により実施した。掘削にあたって調査区法面の安全勾配を確保できるように配慮した。

遺物包含層の掘削（包含層掘削）、遺構面の検出（遺構検出）、遺構の掘削・解体（遺構掘削）は人力により行い、調査区外への排土運搬にベルトコンベアを用いた。調査区の法面と下面には、不要な乾燥や汚れ、崩壊に対する養生としてブルーシートを用い、法面の崩落しやすい箇所には防護柵も設けた。また、調査区は周囲からの湧水があることから、調査区下面の周縁に排水溝を設け、水中ポンプによる排水を行いながら作業を進めた。

出土遺物は、包含層の場合はグリッドごと、遺構の場合は出土遺構ごとに取上げた。また、廃棄状況を示す可能性がある場合や、集中して出土した部分は、出土状況図を作成して対応番号を付して取上げた。

記録作業の方法 この調査にあたっては、凡例に記したとおり国土座標を基準とし、X・Y両軸を10mごとに区切るグリッドを設定した（第5図）。調査座標原点（X=-141030, Y=-39770）を基点として、X軸に沿って10mごとに南から北へ1・2…5、Y軸に沿って10mごとに東から西へA・B・C…Fを付し、それぞれ南東隅のアルファベットとアラビア数字の組み合わせをグリッド名とした。現地作業においては、河川改修工事に際して設置されていた基準点・水準点を利用して、調査区付近に基準点・水準点を設置し、グリッド杭を打設した。

遺構掘削最終段階の遺構平面図と土層断面図はトータルステーションを用いた機械測量、遺物出土状況図は手測りの実測により作成した。精度は遺構図では1/20、遺物出土状況図では1/10とした。

写真撮影は、記録保存用として6×7判モノクロと6×7判リバーサルを用いた。全景写真撮影にはローリングタワーを利用した。また、ラジコンヘリコプターを利用した空中写真撮影を実施した。空中写真撮影には6×6版のモノクロとリバーサルを用いた。

基礎整理作業 遺物は出土位置等を記したラベルとともに取上げた後に番号を付し、番号とラベル記載内容を記した遺物台帳を作成した。土器や石器などは、洗浄して「TMA-番号」の注記をした。発掘調査前の想定に対し、大量の土器が出土したため、全点を完了することができなかった。

また、木製品の応急保存処理、写真整理（アルバム収納と台帳作成等）、図面整理（注記と台帳作成等）を実施した。

第2節 資料調査

調査の実施方法 資料調査は、各年度の水洗遺跡埋蔵文化財発掘調査事業により進めた。調査担当者は調査全体の計画と調整、現地の遺跡状況等の評価と判断、報告書の原稿執筆などを行い、資料整理作業や報告書刊行作業および保存処理に係る各作業（報告書の原稿執筆、印刷、配布を除く）は整理作業・保存処理業務として委託し、また、樹種同定、種実同定、動物遺体同定、石材鑑定も委託した。各年度に実施した業務委託と受注者は例言に記した。

資料調査の経過 平成30年度は現地での出土品基礎整理で完了できなかった洗浄・注記作業から開始し、土器・土製品の接合までを完了させ、復原も完了に近いところまで行うことができた。続けて、出土品の実測、写真撮影、トレースや版組（図）も進めた。記録類は図面編集、版組（図）、トレースの一部を実施し、版組（写真）を完了した。

木製品は実測と写真撮影を行った後、安定化処理までの保存処理を行った。なお、保存処理より前にサンプル木片を採取し、樹種同定を委託で行った。種実や動物遺体の同定、石器石材の鑑定も委託で行った。

令和元年度は、出土品の実測、トレース、図や写真の版組を完了させ、観察表の作成を進めた。また、記録類の図面編集、版組（図）、トレースを完了させるとともに、原稿執筆などを進めた。保存処理は木製品の修復などを行って完了し、報告書を作成した。

各作業に係る方法 報告書に掲載する遺物は、土器と石器は遺構出土を優先的に、残存状況等により抽出し、その他はほぼ全点とした。

遺物の実測は手測りにより行い、実測図や遺構図のトレースや版組などはイラストレーターを用いて行った。遺物の写真撮影には 6×7 判リバーサルを用いて撮影した。

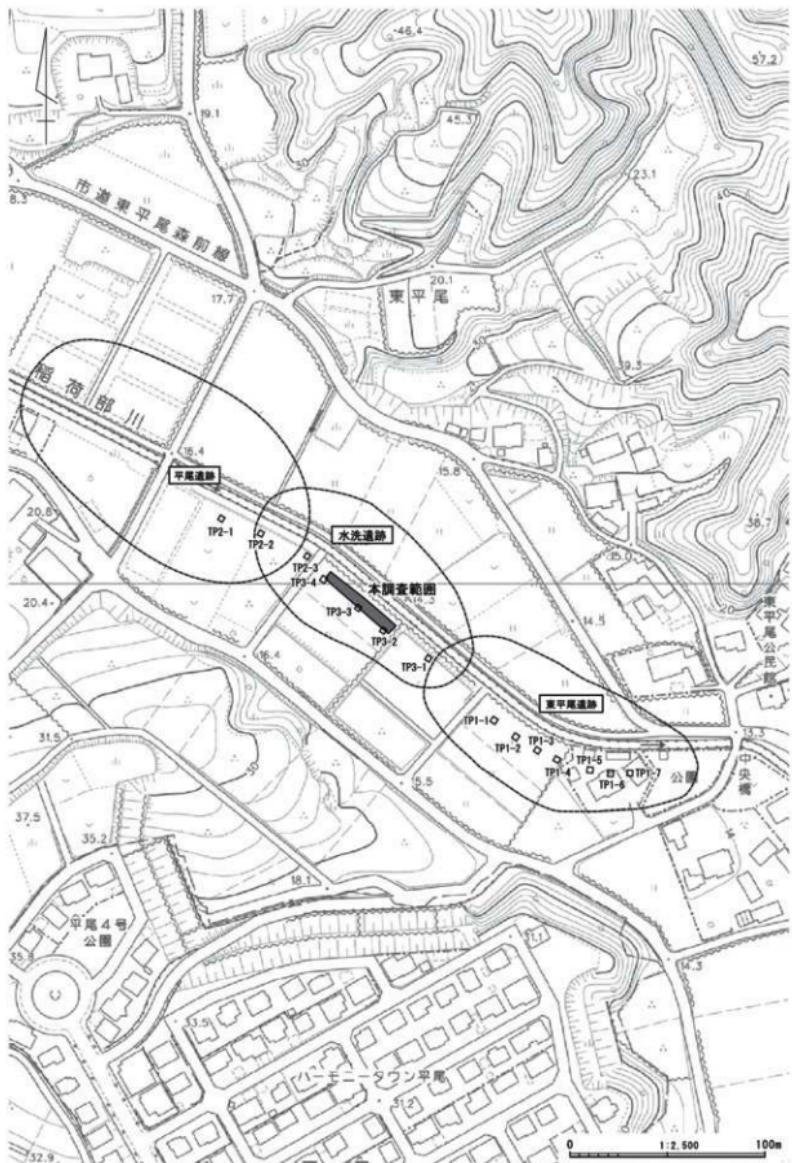
遺構番号について、「種別記号（SD、SR）+通し番号」を付した。



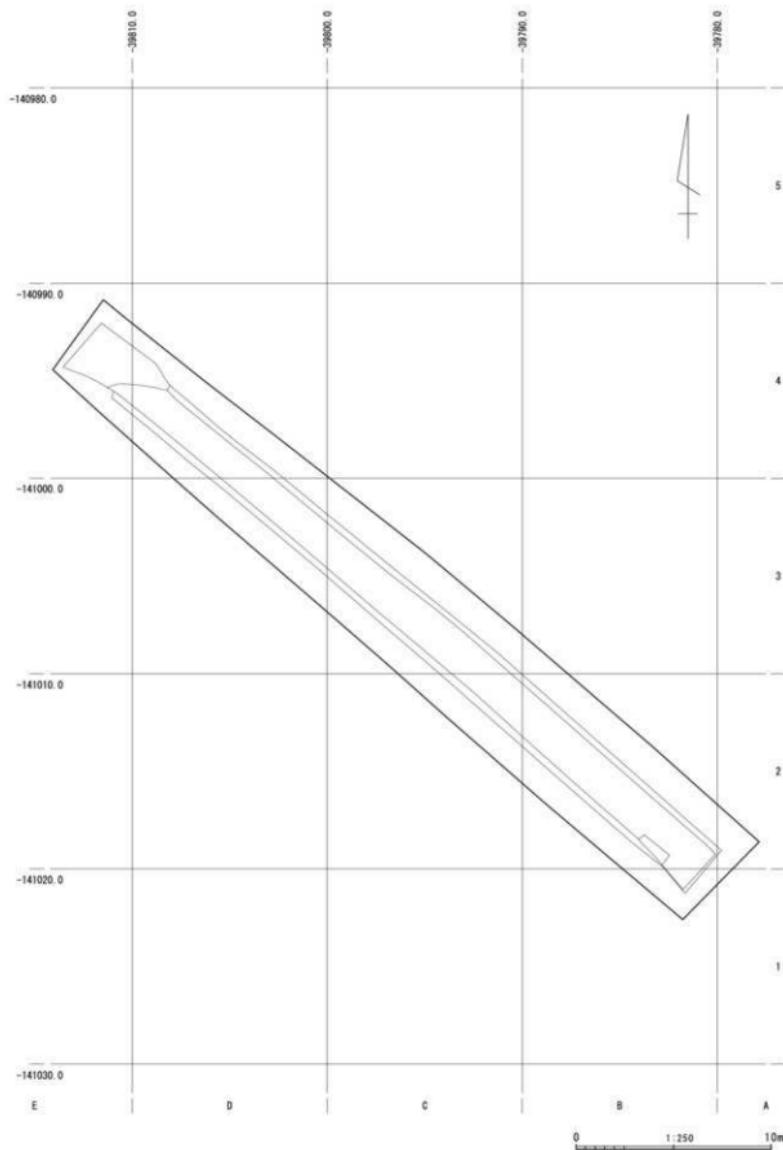
写真1 現地調査状況



写真2 資料整理状況



第4図 本調査範囲図



第5図 調査区とグリッド配置図

第4章 調査の成果

第1節 概要

1 土層

調査区南西面の土層断面図を第6図に示した。

調査地点は現代まで水田として利用されていた。1層耕作土層の下、2層と6～15層は水田利用に伴う土層であり、遺物をほとんど含まない。排水のための暗渠として2層に塗化ビニル製の管、7層に陶製の管が埋設されていた。3～5層は人工物を含まず時代を特定できないが、自然木が多く、その状態からはごく新しい時代の流路の埋土と推測できる。現在の稻荷部川が改修される前の流路であるかも知れない。11層に少し遺物を含むのは、遺物包含層である20層を掘りぬいた溝であるためであろう。

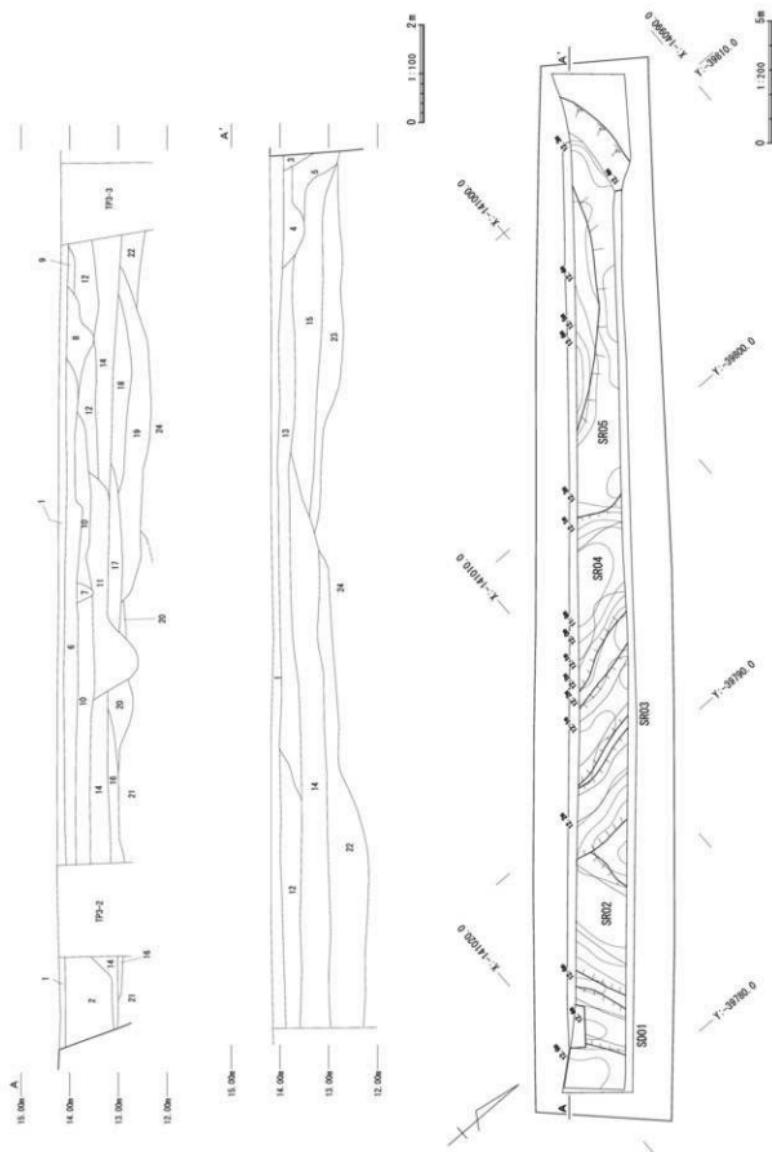
耕作土の直下、13層からは弥生時代後期～古墳時代前期のやや大きめの破片の土器が出土したが、下層からはより新しい時代の遺物が出土しており、後世に運ばれてきたものと考えられる。

16～23層が構造に伴う層で、16層はSD01覆土である。17・20・21層はSR02の覆土であるが、遺物を包含するのは20層のみであり、この層をSR02としている。下層である21層は遺物を含まず、また、南側の立ち上がりが調査区内では確認できなかったため掘削調査をしていない。また上層である17層は遺物を含まず、薄かったために構造として検出できなかった。SR03が19層、SR04が22層、SR05が23層である。19～23層はいずれも炭化物や植物質が多い、砂や粘土などが互層となるなど河川内での堆積を示している。

SR02～05の自然流路は切りあっていたが、平面では構造の切り合い関係を確認できなかった。そこで、遺物を含まない21層が基盤層である24層が現れる高さまで掘り下げて検出した。

土層説明

1 耕作土	
2 撥乱	
3 暗オーブー灰 (2.5GY 4/1)	自然木・炭化物多 新しい流路
4 灰色シルト (10Y 5/1)	灰オーブー粘土 (7.5Y 5/3) をブロック状に含む しまりあり 遺物ごくわずかあり
5 暗オーブー灰 (2.5GY 4/1)	しまりなし 自然木・炭化物多
6 灰オーブーシルト (5Y 4/2)	管鉄多 暗褐色粘土少し含む しまりあり 墓物なし 炭ほとんどなし
7 撥乱	
8 灰色粘土 (5Y 4/1)	ややシルト質 管鉄多 暗褐色粘土・灰白色砂を含む ややしまりなし 炭ごくわずかに含む
9 灰オーブーシルト (7.5Y 5/2)	管鉄多 暗褐色粘土をブロック状にやや多く含む 炭なし 遺物なし しまりあり
10 灰オーブー粘質土 (5Y 4/2)	管鉄多 暗褐色粘土少し含む 炭ごくわずか 遺物なし しまりややなし
11 灰色シルト (7.5Y 4/1)	粘性強い 管鉄含む 植物質あり 遺物少あり しまりあまりなし
12 灰オーブーシルト (7.5Y 5/2)	管鉄多 炭遺物なし しまりややあり
13 灰色シルト (10Y 5/1)	管鉄多 粘性あり 遺物有り 炭わずかにあり しまりあり
14 暗緑灰色シルト (5G 4/1)	上部は管鉄多 炭・遺物なし しまりあり
15 暗緑灰色シルト (10G 3/1)	管鉄少し含む 炭化物少 しまりあり 遺物なし
16 オリーブー黒色シルト (10Y 3/2)	炭・泥木多、 遺物有り しまりなし SD01
17 灰色粘土 (7.5Y 4/1)	黒色粘土を多く含む 流木多 遺物なし しまりなし (SR02上層)
18 灰色シルト (7.5Y 4/1)	管鉄、炭ごくわずかに含む 遺物なし しまりなし
19 灰色シルト (7.5Y 4/1)	炭化物植物質を多量に含む 遺物あり しまりあまりなし SR03
20 灰色シルト (7.5Y 5/1)	炭・植物多 遺物あり しまりややあり SR02
21 灰色シルト (7.5Y 5/1)	20よりやや砂質が強い 遺物なし (SR02下層)
22 青灰色粘土 (10BG 5/1)	黒色粘土 (2/1) 主とした互層 砂・遺物・流木・炭多 しまりややあり SR04
23 灰色シルト (10Y 4/1)	暗緑灰色粘土 (10G 4/1)との互層 しまりややなし 遺物多 炭化物多 砂礫も混じる SR05
24 基盤層 青灰色粘土 (10BG 5/1)	しまりややあり 遺物なし 炭・砂礫ほとんどなし



第6図 調査区全体図・土層図

2 遺構と遺物

検出した遺構は溝状遺構1条、自然流路4条のみである。調査は南東側から始めたため、遺構の番号も南東側からついている。

溝状遺構SD01は発掘調査時には流路としてSR01としていたが、他の自然流路と比較して、直線的であること、出土遺物が古墳時代前期で比較的まとまっていることなどから、溝状遺構と認定した。

自然流路4条は自然流路同士が切りあっているため、平面では切り合い関係を把握できなかった。土層からはSR02よりSD01とSR03は新しい、SR04よりSR03が新しいと認められる。

出土遺物では土器がコンテナで68箱分と多量に出土した。ほとんどが5条の遺構からの出土であり、第3節で出土した遺構ごとに記載する。ただし、前項で記述したように、SR02からSR05の自然流路では無遺物層が現れ、各遺構の平面形が明確になってから遺構として掘削したため、上層部分では遺構外の包含層出土遺物として取り上げている。したがって、遺構外出土遺物には、包含層（自然流路上層部分）、土層図の13層、そして確認調査時に出土した遺物の3種がある。

土器では須恵器が3点、灰釉陶器が1点以外は弥生土器と土師器である。流路内で出土したものは、磨滅した小破片も多かったが、完形に近い個体も多く、集落または、廃棄された場所は調査区からほど離れていないと考えられる。

弥生土器と土師器についての境界が問題となるのだが、高坏では弥生時代の弥生土器と古墳時代の土師器とで、区分できていると思われる。しかし、壺や甕では、古墳時代前期においても、弥生時代の特徴を持った土器が使われ続けているようである。特に破片など全体像がわからない個体では、分類は困難である。本報告書ではその様な場合は、胎土などの様子から判断した。弥生土器としたものには、弥生土器の特徴を持つが古墳時代前期に属する土器が含まれていると思われる。

大量に出土した弥生土器、土師器の中から、図化するものを抽出する際には、口縁部や文様帶など、特徴が明確なもの、ある程度の器形がわかるものを優先して抽出した。その結果、壺や甕などは、口縁部の破片が多く、高坏では比較的残りやすい脚部が多く抽出される結果となってしまった。これらを上記のように分類にしたため、壺・甕は弥生土器が多く、高坏は土師器が多い傾向が生まれてしまったようである。本来の器種の比率として、弥生時代後期には高坏が少ない傾向はあろうが、古墳時代前期では報告内容よりも、壺・甕はそれほど低くなかったはずである。

土器以外では、土製品の土錐が2点、石器・石製品が15点、木製品が7点、ガラス小玉1点が出土し、ほぼ全点を図化、掲載した。

自然遺物では、種実が88点、動物の骨が7点出土し、木製品の樹種、石器の石材とともに委託により同定している。結果は第5章に報告する。

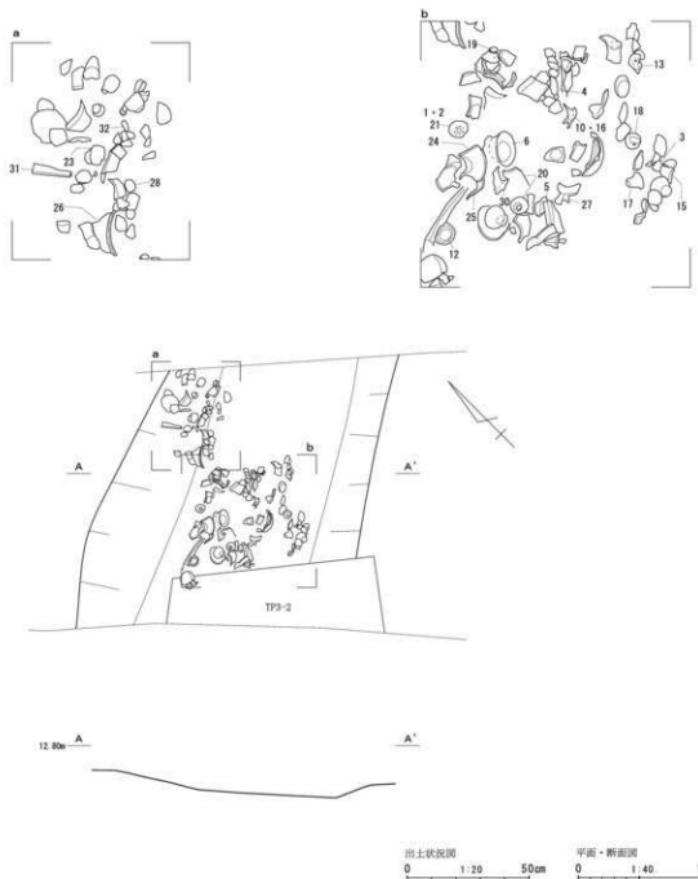
第2節 遺構

(1) 溝状遺構

SD01 (第7図、図版2・3)

SD01はB2グリッドにおいて、長さ約2.2m分を検出し、幅は約2mである。南側の調査区境付近は、確認調査時のテストピットTP3-2と重なっている。南西から北東に、ほぼ直線的な溝である。検出した深さは約20cmで、土層の観察から、SR02より新しいと認められる。

覆土の下層、底付近と傾斜部分からは比較的大きめな土器の破片が密集して検出された。木製品2点(31・32)も土器片の中に混ざって出土している。自然遺物では、モモの核とエゴノキの種子が検出さ



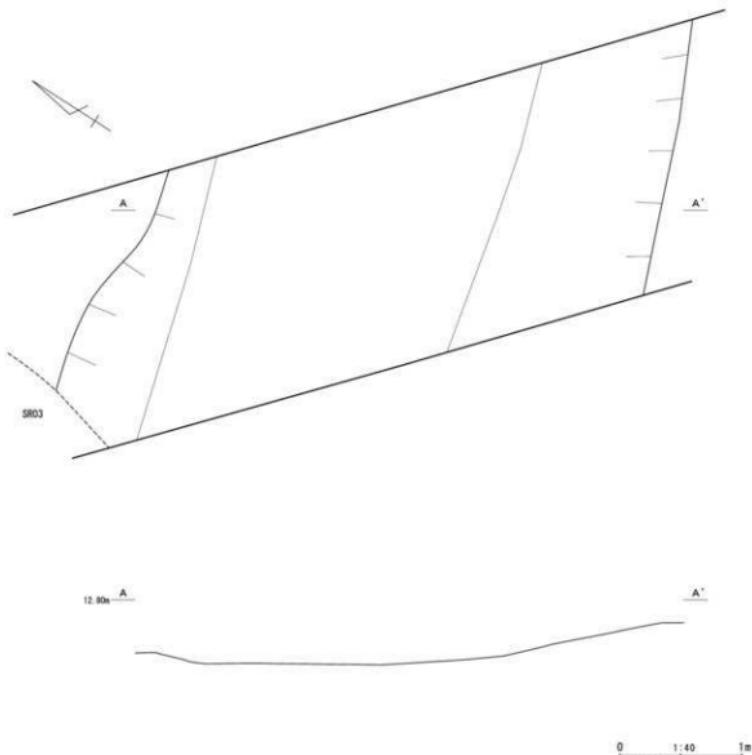
第7図 SD01 実測図

れた。古墳時代前期の土器が主であり、高坏が目立つことから、その時期の祭祀に伴う遺物が廃棄されたものと想像できる。

(2) 自然流路跡

SR02 (第8図、図版3)

SR02はB2グリッドで、長さ2.4m分を検出した。幅約4mで、ほぼ東西方向の自然流路である。遺物が含まれ、調査により掘削したのは中層（17層）であり、上層（20層）と下層（21層）には遺物は全く含まれなかった。土層断面での深さは約50cmだが、検出された深さは約30cmである。土層の堆積状況からSD01、SR03より古いことがわかる。



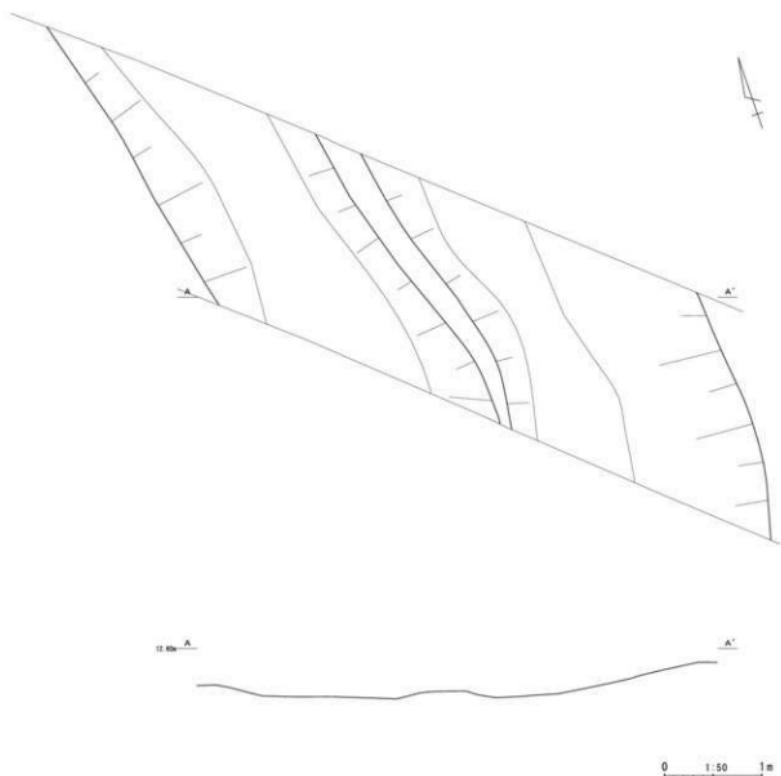
第8図 SR02 実測図

出土遺物は土器以外に、曲柄鋤、一木鋤、不明木製品2点と木製品が4点ある。土器はSR03とは同様だが、他の3条の遺構よりは破片が小さかった。図化できた土器のうち古墳時代前期と考えられるものは3点のみで、弥生時代後期のものが主体となっている。自然遺物では、モモの核とオニグルミの核が検出された。

SR03（第9図、図版4）

SR03はB2からC3グリッドで検出した北から南へと向かう自然流路である。調査区に対し斜めに向いていて、推定の幅は3.6m、長さは延べ6mほどを検出した。土層断面での深さは約50cmだが、検出された深さは約30cmである。底の中央が高くなっている、2本の流路とも考えられるが、土層を観察しても分離することはできなかった。土層の堆積状況からSR02より新しく、SR04より古いと認められる。

出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。出土した位置としては、覆土のうち中位から多く出土している。SR02と同様、他の3条の遺構よりは破片は小さいものであった。自然遺物では、モモの核とオニグルミの核が検出された。



第9図 SR03 実測図

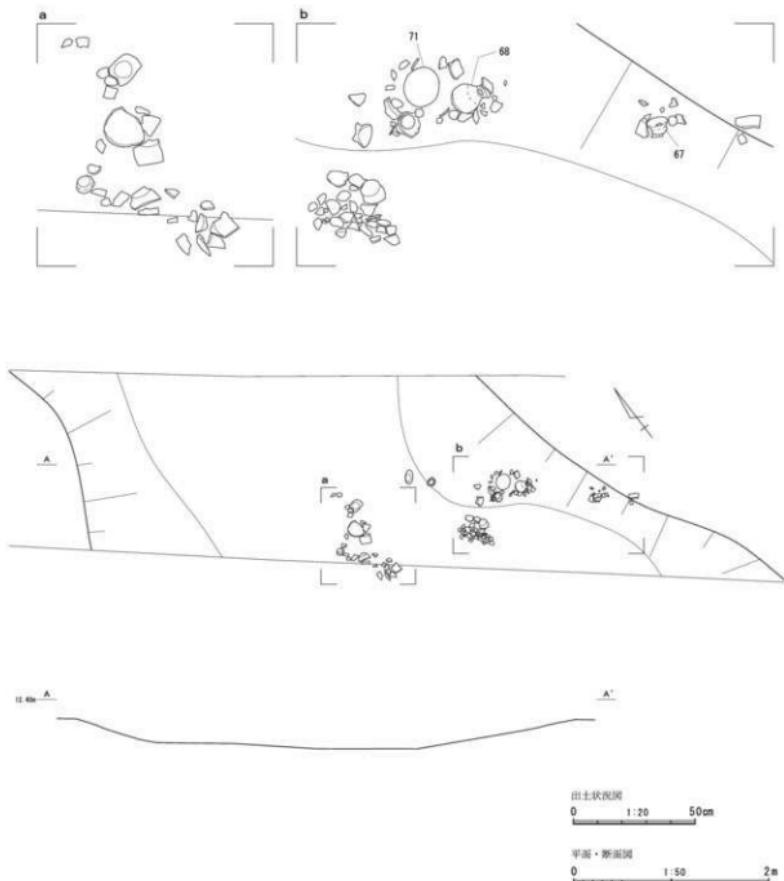
SR04（第10図、図版4）

SR04はC 3 グリッドで検出した、北から南へと向かう自然流路である。調査区内で検出された部分では直線的ではなく、幅は3 mほどと推定され、長さは約6 m分を検出した。土層断面での深さは約80cmだが、検出された深さは約30cmである。土層の堆積状況からSR03より新しいと認められる。

出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器と土錐が1点である。出土状況としては、底から中位にかけて完形に近いような大きな破片が出土している。埋没過程において、上流側から土砂とともに遺物が流されてきたことが想像される。自然遺物では、オニグルミの核とアカガシ亜属の幼果が検出された。

SR05（第11図、図版5）

SR05はD 3 からD 4 グリッドで、長さ約13mを検出した。北西から南へと弧を描くようであるが、東側の岸も検出されておらず、形状、幅ともに不明である。深さもはつきりと計測しにくく、検出された

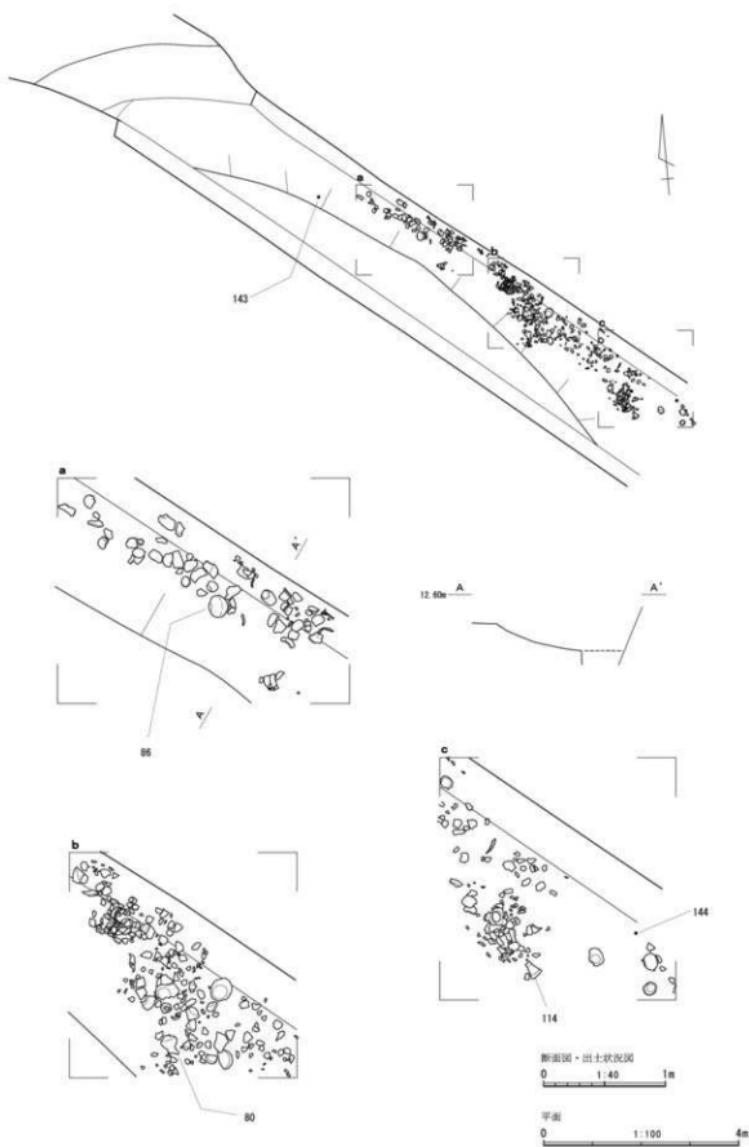


第10図 SR04 実測図

深度は20～30cmほどである。

出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器が大量に出土している。上層からは7世紀前半ごろと考えられる須恵器が3点出土している。そのほかに、土錐1点、石錐1点、敲石8点、扁平片刃石斧、有孔の石製品の破片、ガラス玉、横槌、ト骨が1点ずつ出土している。底付近の下層から完形に近い土器のほか、磨滅した小破片が多く出土しているが、上位においても土器片は多く含んでいた。自然遺物では、モモ・オニグルミ・ヤマモモの核、クスノキ・エゴノキの種子、イノシシ属の歯、哺乳類の肋骨などが検出された。

上層から出土した須恵器によって最終的に埋没したのは7世紀前半以降であることが認められる。



第11図 SR05 実測図

第3節 遺物

1 遺構内出土遺物

(1) SD01出土遺物 (第12 ~ 14図)

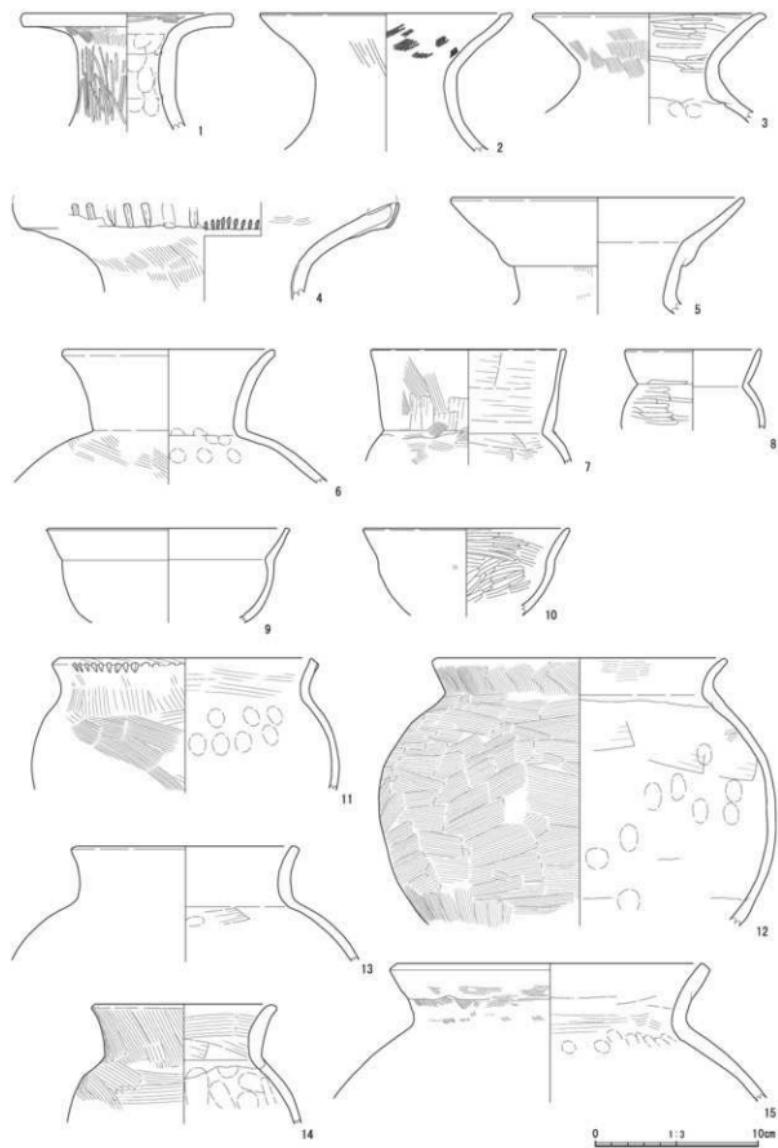
土器は1 ~ 30で、その内1 ~ 8が壺類である。1は細頸の直立部がやや長く、口縁は大きく開く。頸部の外面は縦方向のミガキ、口縁外面はハケメ調整である。口縁内面はミガキのようであるがはつきりしない。2は口縁部がやや内湾し、端部は面取りしている。剥離が激しいが、外面にハケメ、口縁内面には斜繩文がわずかに残る。3は口縁端部がわずかに外反し、丸く仕上げている。全体的に剥離、磨滅が激しく、口縁外面に見えるハケメは最終調整の前段階と思われる。口縁内面はミガキである。4は複合口縁であろう。口縁部外面に棒状の浮文が7本分残存している。浮文がない部分には下半に櫛状工具による刺突文が施され、9本分残存している。5は複合口縁である。磨滅が激しく調整は不明である。6 ~ 8は球形の胴部に直立気味の口縁部を持つ。8はやや小型で、胴部外面は横方向のミガキが観察できる。1 ~ 4は弥生時代後期、5 ~ 8は古墳時代前期に属するであろう。

9と10は小型丸底壺である。9はやや浅めで、口縁端部は面取りを施している。10の内面に横方向のミガキが残る以外は、磨滅により調整等は不明である。ともに古墳時代前期であろう。

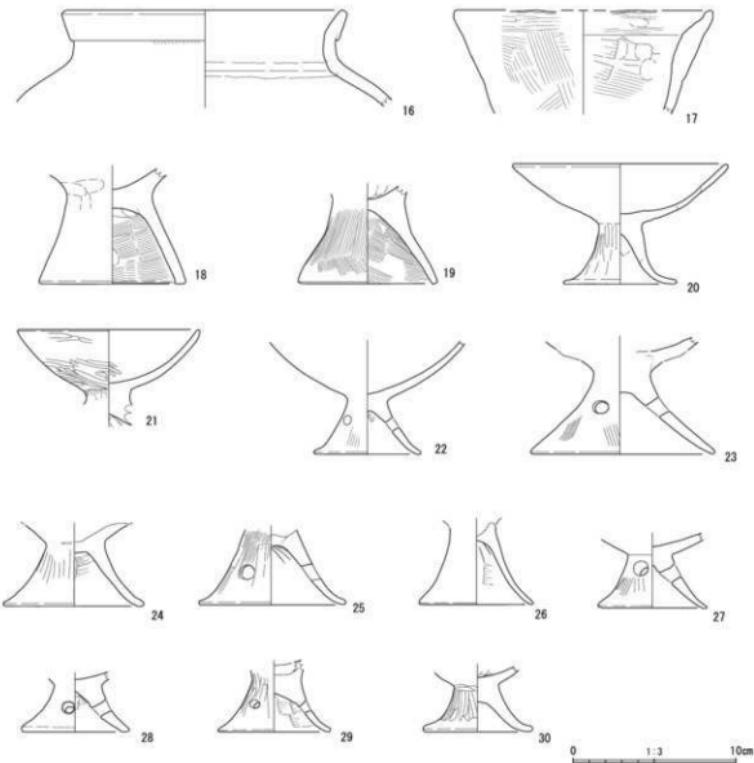
11 ~ 19は甕類である。11のみが口縁部外側に刻み目を施す。内外面ともに炭化物が多く付着している。12も外面に多く煤が付着している。13は口縁端部を面取りしている。剥離、磨滅により調整等は不明である。14は小型で口縁は直線的に広がり、端部でわずかに外反する。外面及び、口縁内面はハケ調整である。外面はほぼ全面に煤が付着している。15は口縁の端部を折返し、端面を面取りしている。器厚は厚く、胎土に含まれる砂粒は2mmほどまで、やや大きい。磨滅により調整は不明な部分が多いが、ところどころにハケメが残る。内面の頸部より下に炭化物が多く付着している。16も口縁部を折返している。剥離、磨滅により調整はほぼ不明である。内面の頸から下には炭化物が多く付着している。17は器種の判断に迷ったが、大型の甕の破片の可能性が考えられるため、ここに分類した。残存する下端部での厚みは5mmほどだが、端部から3 ~ 4cmのところで1.3cm程と内側に厚みが増し、下方に向け薄くなっている。端部は内側を斜め方向のハケ調整によりやや丸く仕上げている。外面は最終的には縦に近い、斜め方向のハケ調整で仕上げているのだが、前段階の横方向のハケメが多く残されている。内面は、肥厚部分は指オサエの後に板ナデ、他の部分は横方向のハケで仕上げている。18と19は台付甕の台部である。18は直線的に広がるが、19はやや内湾している。時期の判断は難しいが、11・12・18・19は弥生時代後期、13 ~ 16は古墳時代前期と考えられよう。

20 ~ 30が高杯である。23・25以外は小型とみなせよう。20のみが口縁から脚部まで残っていて全体像が分かるものである。皿状の杯部で、脚は裾で大きく開いている。透かしはない。剥離が激しく、脚部外面で縦方向のミガキが観察できるのみである。21は脚部を失うが、接合部分から、外へ大きく開く脚部であることがわかる。杯部に横方向のヘラミガキが一部に残る。22は杯部に比べて脚部が小さい印象である。ハの字に広がり、端部付近で外反する。透かしは3方向である。剥離、磨滅により調整等は不明であるが、脚部外面に見られるハケメは最終調整前のものであろう。24 ~ 30は脚部である。剥離、磨滅により調整不明の部分も多いが、外面は縦方向のミガキであること、裾部が外反することなどが共通項として見て取れる。24・26・30は透かしはなし。23と25は透かしが2箇所残存しており、3方向と考えられる。他の27・28・29も透かしは3方向である。高杯はすべて古墳時代前期と考えられる。

木製品が31・32である。ともに用途は不明である。31はイチイガシである可能性が高い。板状で先端を尖らせている。32はアカマツ製の板状の破片である。2 ~ 4mmの孔が斜めにあけられている。



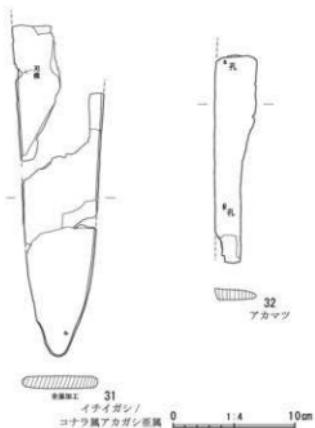
第12図 SD01出土遺物実測図1



第13図 SD01出土遺物実測図2

(2) SR02出土遺物 (第15・16図)

土器が33～46で、33～38が壺である。33と34は単純口縁である。双方とも、肩部に櫛状工具の刺突により、沈線を1条、その下に羽状文を施す。羽状文は1段分が残っている。33の口縁内面は剥離により調整不明、外面にはハケメがわずかに残り、頸部外面には縦方向のミガキが残る。34は口縁端部にハケメがところどころ観察できる。口縁内面は横方向のミガキ、外面は縦方向のハケ調整、頸部外面は縦方向のミガキである。35～37は折返し口縁である。35は肩部に櫛状工具により上下に1条ずつの沈線をめぐらし、その間に羽状文を1段施す。口唇部にはハケメ、折返し部には刻み目を施す。口縁内面には櫛状工具による刺突文が2段施されている、羽状を意識しているのかもしれないが、羽状にはなっていない。36は折返し部を指で押さえている。口縁内面は細い斜縫文を施すが、磨滅により不鮮明である。外面は縦方向のハケメが残る。37の折返し部は断面が三角に近く、外側に波状文を施すが、内側は粘土を張り付けた痕跡がほぼそのまま残る。口縁内面にも波状文が施されるが、かなり乱れている。38は肩から胴部の破片である。イチジク形の胴部で、最大径より下部は横方向のミガキ、上部はハケ調整



第14図 SD01出土遺物実測図3

である。肩部には櫛状工具の刺突による羽状文が1段分残っているが、その上側は欠損により不明である。胎土には砂粒が多く含む。

39～42が甕である。39は口縁が短く外反する。端面は面取りをし、外側に深く、内側に浅く刻み目を施す。胴部外面の縦方向と内面の横方向の調整は、条痕のように見えるほどの粗い工具でなされている。内面と外面口縁部付近に炭化物が付着している。40は口縁端面を面取りし、ハケメが残る。外側には刻み目を施す。41は器厚がやや厚めで胎土に砂粒が少ない。口縁端部を面取りし、外側に刻み目を施す。外面に煤が付着している。42は胴部がほぼ直立し、頸はほとんどすばまらずに外反する口縁部へと続く。口縁部は折返し、外面に刻み目を施す。内面の頸部から下に炭化物が付着している。

43～46が壺類である。43は有稜高壺である。口縁部は屈曲して外反し、端部は面取りしハケメを、外側には刻み目を施す。壺部の内面と外面の棱より下は横方向のミガキ、外面の棱より上は縦方向のハケで仕上げている。44は碗状の壺部であり、高壺と考えられる。口縁端部は面取りをし、粘土が内側にはみ出している部分がある。外面は中央付近にあるわざかな稜を境に、上部は横方向、下部は縦方向のミガキ、内面口縁付近は横方向のミガキで仕上げている。磨滅により不明確だが、内面は赤彩しているようである。45も碗状の壺部である。磨滅により調整は不明であるが、指オサエの跡が観察できる。46は高壺の脚部である。径のわりにやや低く、裾部付近で外反し、大きく開く。円形の透かしが残っているのは1つのみで全体の数は不明である。調整は、外面がミガキ、内面の裾部付近はヨコナデである。

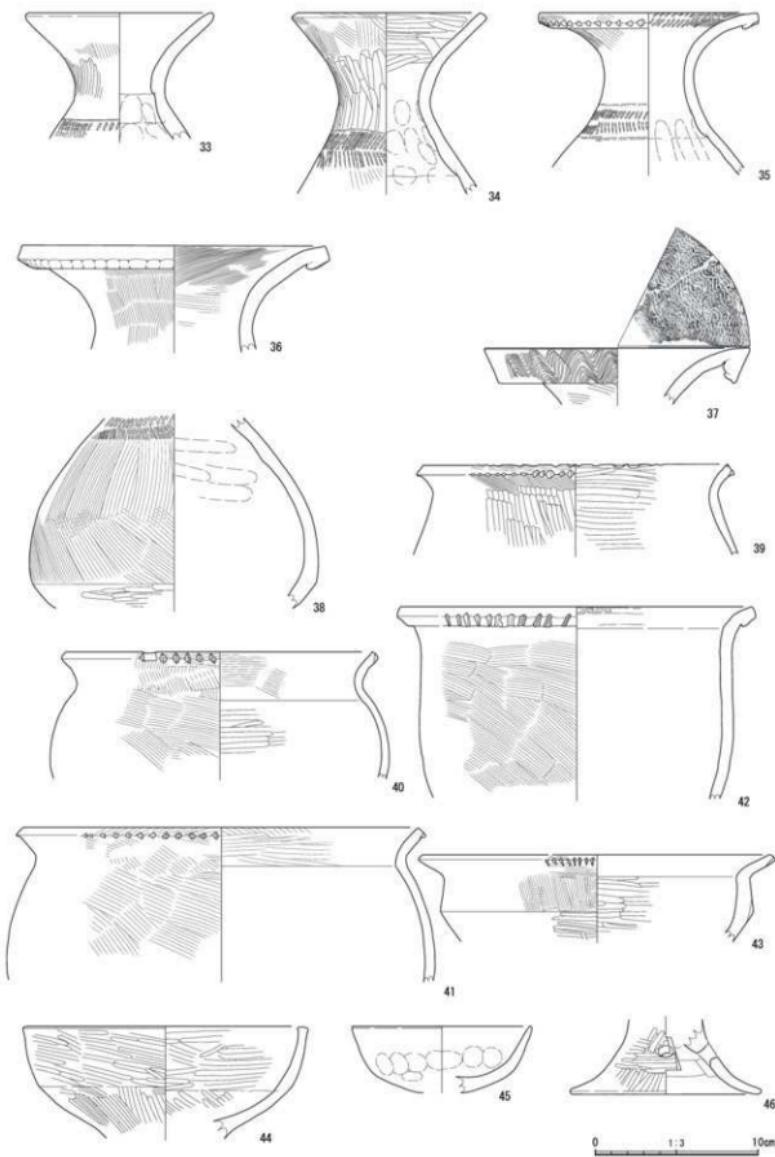
SR02出土の土器は46が古墳時代前期である以外は弥生時代後期に属すると考えられる。

47～50が木製品である。47は曲柄平鋸である。ウバメガシ製で、軸部が欠損した鋸身部分である。軸部に向かい緩やかに幅が狭くなっている。刃先は先端に向かって薄くなり、磨滅も見られる。

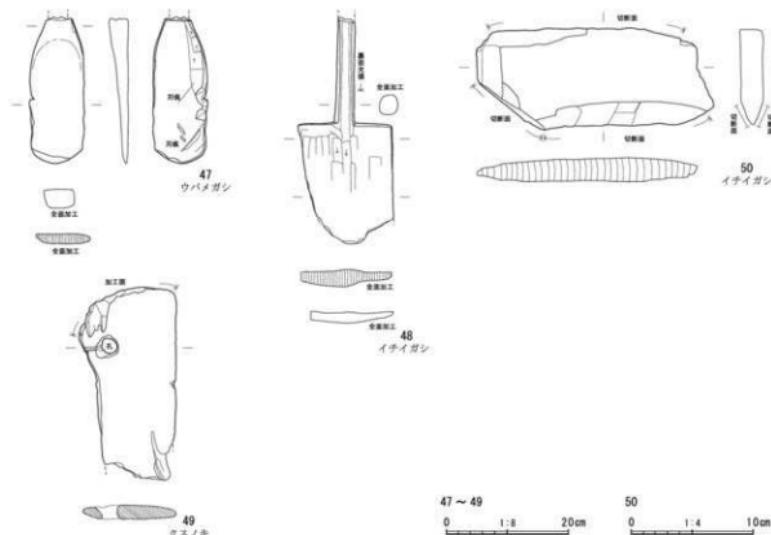
48は一本鋸である。イチイガシ製で、鋸身部分は片側刃と先端が欠損し、柄は約17cm残存している。柄の断面形はほぼ円形である。鋸身は全体的に磨滅している。49はクスノキの用途不明品である。直径2.5cmの孔があいているが、節が抜けた痕跡の可能性も考えられる。加工痕はほとんど見られず、ごく一部に削ったような平滑な部分が観察できる程度である。50はイチイガシ製の加工された材で、農具であろうか。長方形の長辺1辺を刃のように尖らせ、その隅を斜めに落としているようである。一部欠損しているが、幅は22cmほどと推定できる。

(3) SR03出土遺物（第17図）

土器が51～66で、51～57が壺類である。51～53は折返し口縁を持つ。51の折返し部は幅5mmほどと小さい。櫛状工具による刺突が、口縁内側と端部に施されている。端部は1段のみ、口縁内側は3段以上、羽状を意識しているかもしれないが、雑である。52は口縁内面に羽状繩文、端部に斜繩文を施す。折返し部外面には指オサエの跡が明瞭である。53も口縁内面には羽状繩文を施す。折返し部は指オサエ、端部はヨコナデであるが、ハケメが少し残る。頸部の外面は縦方向、口縁部内面の頸部側は横方向のミガキである。54は複合口縁である。端部は面取りし、内側に粘土がはみ出している。外面には斜めのハケ調整の後、棒状浮文を付け、3本が残存している。55と56は底部から胴部の破片である。55は底が突出し、底面も凸である。胎土に含まれる砂粒は3mmほどと大きい。56は小型の壺であろう。底はや



第15図 SR02出土遺物実測図1



第16図 SR02出土遺物実測図2

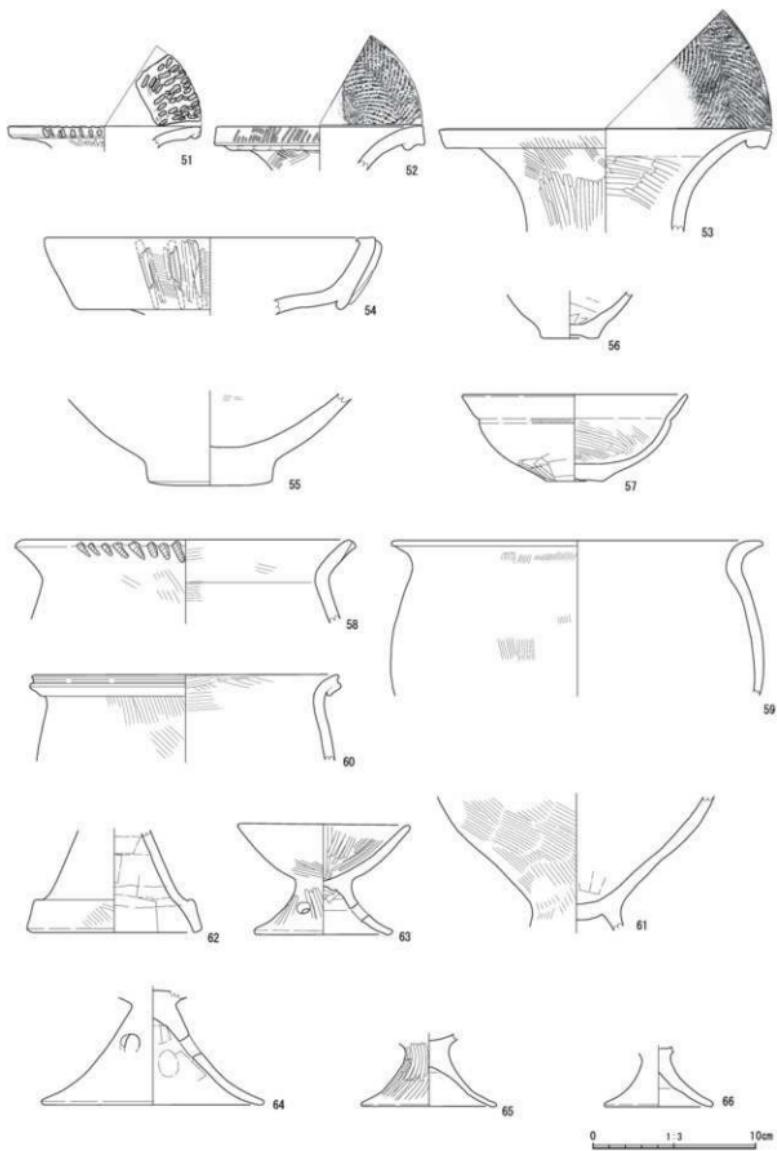
や突出し、上げ底である。内面にわずかに板ナデの痕跡が残る。57は小型鉢である。体部は浅く開いていて、口縁部はさらに屈曲して開く。外面の体部と口縁部の境には沈線状のくぼみができており、斜め方向のハケメが残っている。底面及び体部の底付近はヘラケズリであるが、他の部分は磨滅により不明である。内面は放射状にハケメが施されている。51～54は弥生時代後期、57は古墳時代前期に属すると考えられる。

58～61が甕である。58は口縁の端面を面取りし、外側に大きく刻み目を施す。59は頭部から強く外反する口縁部を持つ。全体的に剥離、磨滅が激しく、口縁端部に刻み目が見られないもの、もともとないのか、失われたのか不明である。外面にはわずかにハケメが残る。60は頭部がすぼまらず、口縁が外反し、折返している。折返し部は指で押さえ、端面に沈線を施す。剥離、磨滅は激しいが、外面及び、口縁部内面はハケメを残す。61は台付甕の胴部である。内面には炭化物が付着している。甕はすべて弥生時代後期と認められる。

62～66が高杯である。62は脚部で裾の外面に段を有するも、内面はなだらかである。剥離が激しく調整が観察しにくく、段部外面は斜縞文のようであるが、はつきりしない。63は小型で皿状の坏部に大きく開く脚部を持つ。透かしは3方向である。外面、坏部内面はヘラミガキである。64～66は脚部で裾部に向かって外反しながら、大きく開く。64は透かしが3方向、65と66は透かしがない。65は小型で、裾付近でやや屈曲している。66はミニチュアとしてもよいほど小型である。62が弥生時代後期、それ以外は古墳時代前期であろう。

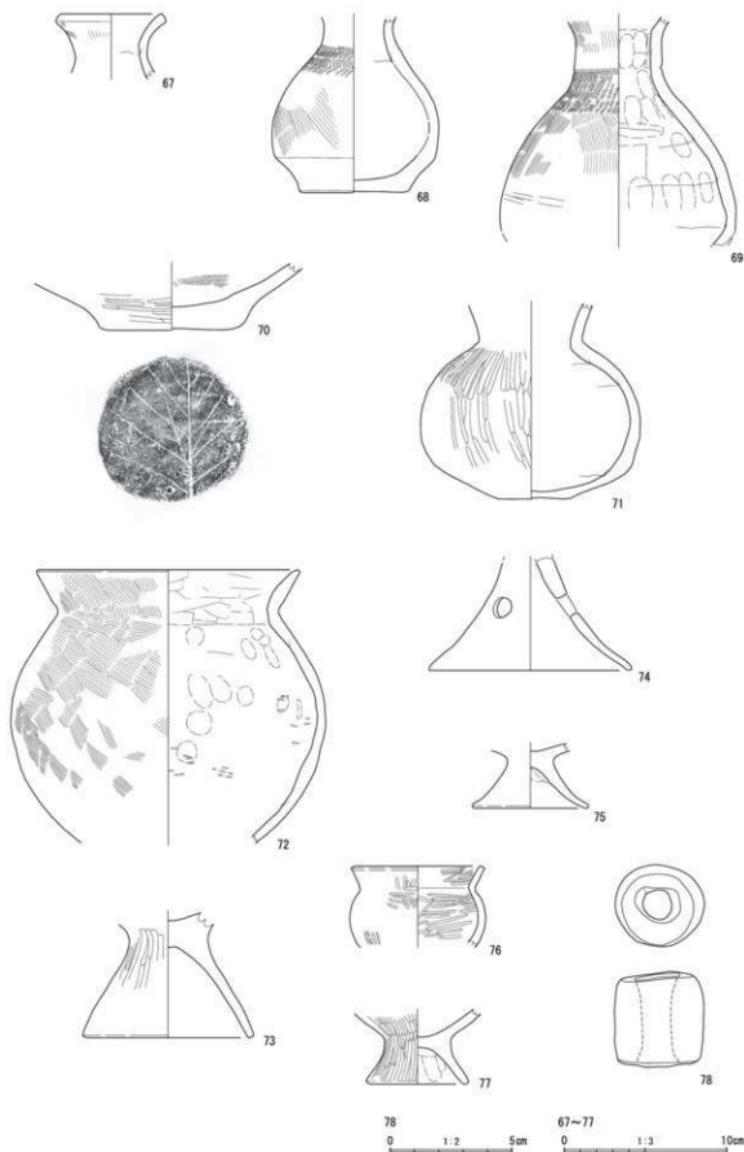
(4) SR04出土遺物（第18図）

土器が67～77で、67～71が壺類である。67は単純口縁の破片で、頭は細く口縁部は短い。口縁端部は面取りをしている。68は底から頭部の破片である。小型であるが、底径は大きく、下膨れの体部を



第17図 SR03出土遺物実測図

第4章 調査の成果



第18図 SR04 出土遺物実測図

持つ。肩部には櫛状工具による刺突で、羽状文を3段、その上部には沈線を1条施している。剥離が激しく、胴部外面にハケメが見えるが、最終調整前の痕跡かもしれない。69は頭から胴部の破片である。頭はやや長く、胴部は下膨れのようである。頭部の下方に櫛状工具による刺突で沈線を1条、その下に斜めに刺突文を2段施している。剥離、磨滅により調整ははつきりしないが、胴部下半にはミガキの痕跡がわずかにみられる。70は大型の底部片である。底径も大きく、胴部へは開いて立ち上がっている。底面には木葉痕が残る。外面は横方向のミガキ、内面の底はナデ、胴部ではハケメが見られる。胎土には砂粒が多い。71は長頸の直口壺である。底は小径で、やや上げ底である。胴部は下半にわずかに棱を持つ。剥離、磨滅が激しいが、外面は縦方向のミガキ調整である。71の古墳時代前期以外は弥生時代後期に属するであろう。

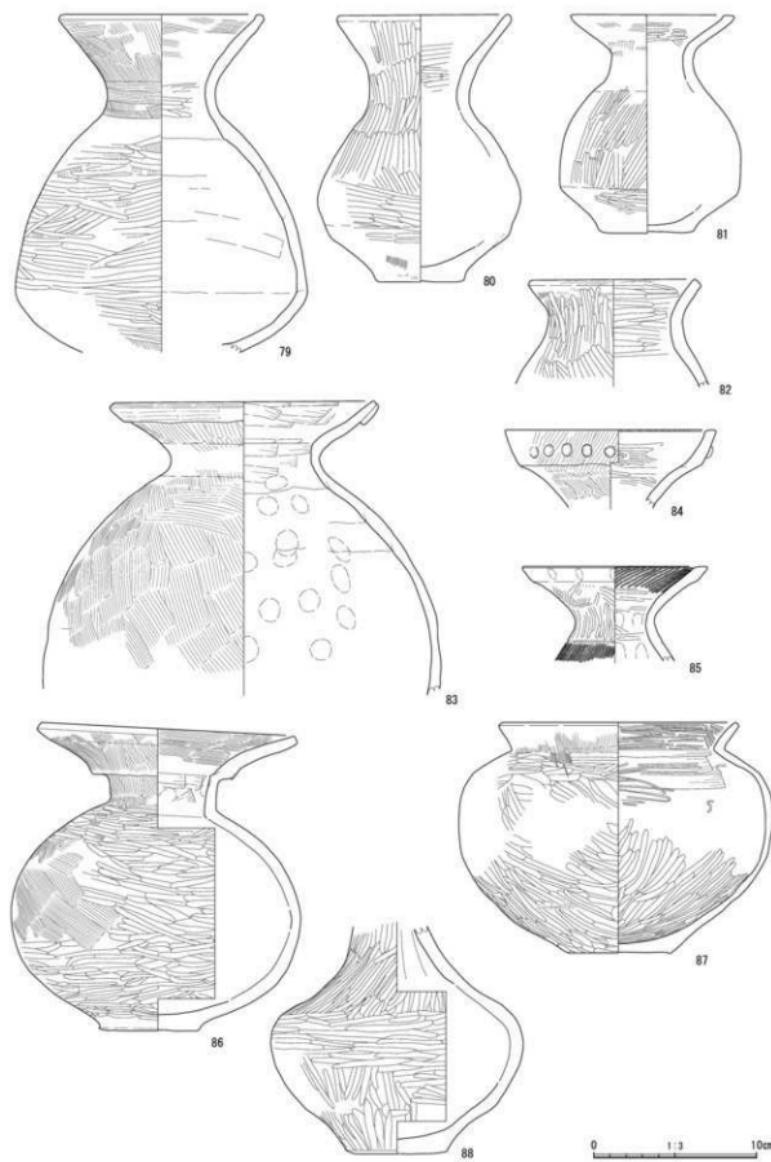
72と73が甕である。72は球形の胴部にくの字に外反する口縁を持つ。剥離、磨滅が激しく調整が不明瞭な部分が多いが、外面は斜め方向のハケ、内面の口縁は横方向のナデ調整である。胴部内面は指オサエで、爪の痕跡と思えるものが多くみられる。胎土に含まれる砂粒は3~4mmとやや大粒である。73は台付甕の台部である。やや内湾する。剥離により調整は不明瞭であるが、外面にハケメらしき痕跡がわずかに残る。ともに弥生時代後期であろう。

74~77は高杯、ミニチュア土器である。74は高杯の脚部で緩やかに外反しながら開いているが、端部付近でわずかに内湾する。透かしは3方向である。剥離により調整は不明である。75~77はミニチュアで、75は高杯の脚部である。ごくわずかに外反しながら広がり、端部付近ではやや強く外反する。透かしはない。磨滅により調整は不明である。76は口縁から全体部であるが、鉢となろうか。剥離が激しく、外面のミガキは方向が不明瞭である。内面は横方向のミガキである。77は台脚部である。ハの字に開き、胴部は斜めに立ち上がっている。形からは台付甕かと思われる。外面は縦方向のミガキ、内面の調整は観察できないが、滑らかに仕上げられている。これらは古墳時代前期と考えられよう。

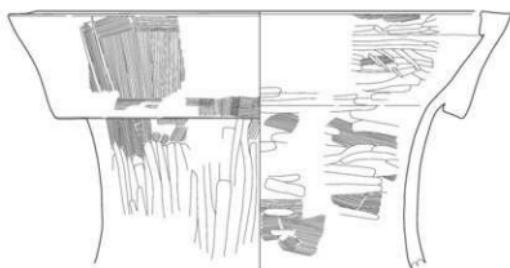
土製品が78で、土錐である。円筒形で径に比べて短い。孔は大きく、片側では1方向に広がっている。使用による摩耗と思われる。

(5) SR05出土遺物 (第19~26図)

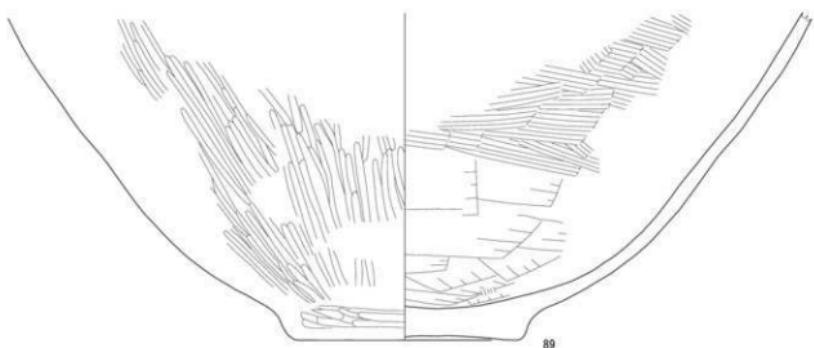
土器が79~129で、79~104までが壺類である。79~82は単純口縁を持つ。79は口縁端部をほぼ水平に面取りをし、ナデにより丸みをついている。外面は全面にハケ調整を施したのち、肩から胴部は横方向のミガキ、頭部に横方向のハケを、文様を付けるように施している。80の胴部は下半に棱を持つが、中位最大径の部分も棱のようになっている。外面は胴部の下半は横方向、上半から口縁までは縦方向のミガキで仕上げている。外面及び口縁内面に赤彩を施す。81の口縁はやや内湾し、端部はほぼ水平に仕上げている。口縁内面と胴部外面の下方は横方向、胴部外面の中位から肩までは縦方向のミガキ調整である。胎土に雲母を少量含む。82は駿河地域からの搬入品の可能性がある短頸壺である。外面は縦方向のミガキであるが、口縁付近は粗く、ハケメが多く残る。内面は口縁から頭部まで横方向のミガキである。83は折返し口縁である。外面は全体的にハケ調整であるが、頭部はヨコナデによりハケメが消されている。84は複合口縁の破片である。外面は口縁の頭部付近から端面までハケ調整である。円形浮文が5個まで連続して残存している。少し離れて1個が残っていて、距離からは3単位と考えられる。85はハの字状に開く単純口縁だが、外面端部をヨコナデすることで、わずかに棱を作っている。外面の肩部に櫛状工具による刺突で沈線をその下位に斜繩文を施す。口縁端面にも斜繩文、口縁内面には結節繩文を施している。外面に赤彩が残る。86の胴部は球形で、頭は垂直に立ち上がる。口縁は外反して大きく開く。胴部外面は横方向のミガキだが、全体の2/5程度が磨かれておらず、ハケメが残っている。87は短頸壺である。球形の胴部にくの字に外反する口縁を持つ。口縁外側がタテハケのちヨコナデ、頭内面の下方がヨコナデ、それ以外は内外とも丁寧なミガキで仕上げている。器厚は薄く、胴部でも3mmほど



第19図 SR05 出土遺物実測図 1



|



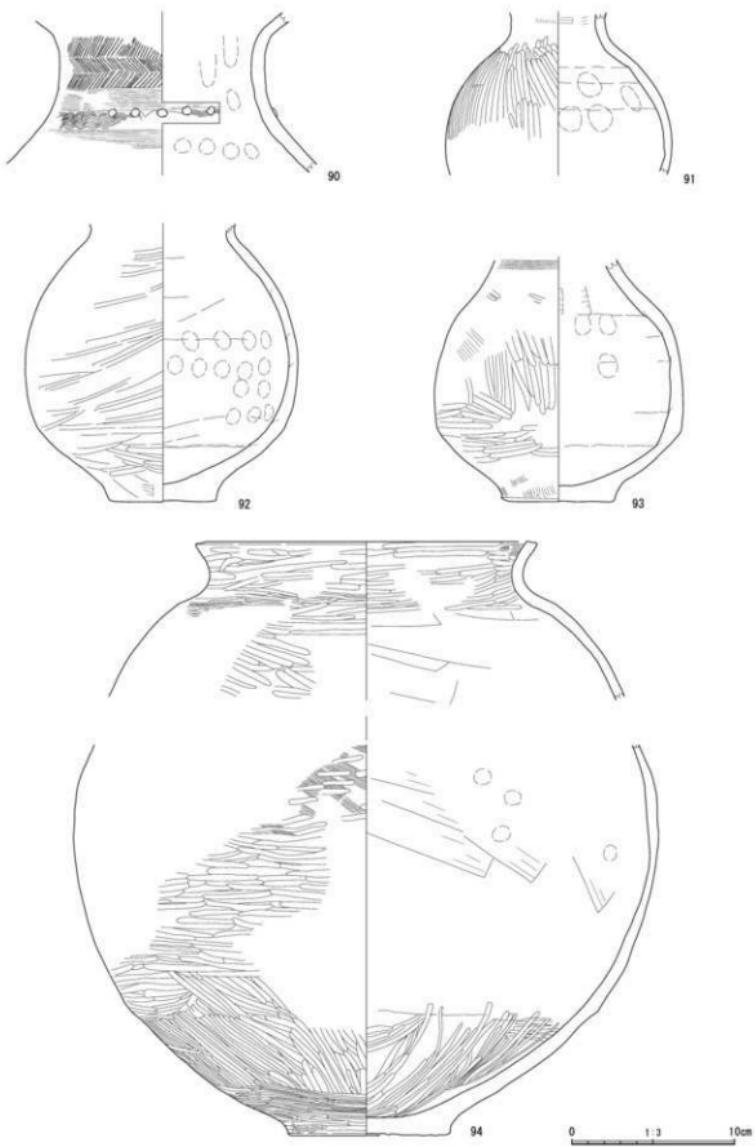
0 1:3 10cm

第20図 SR05 出土遺物実測図2

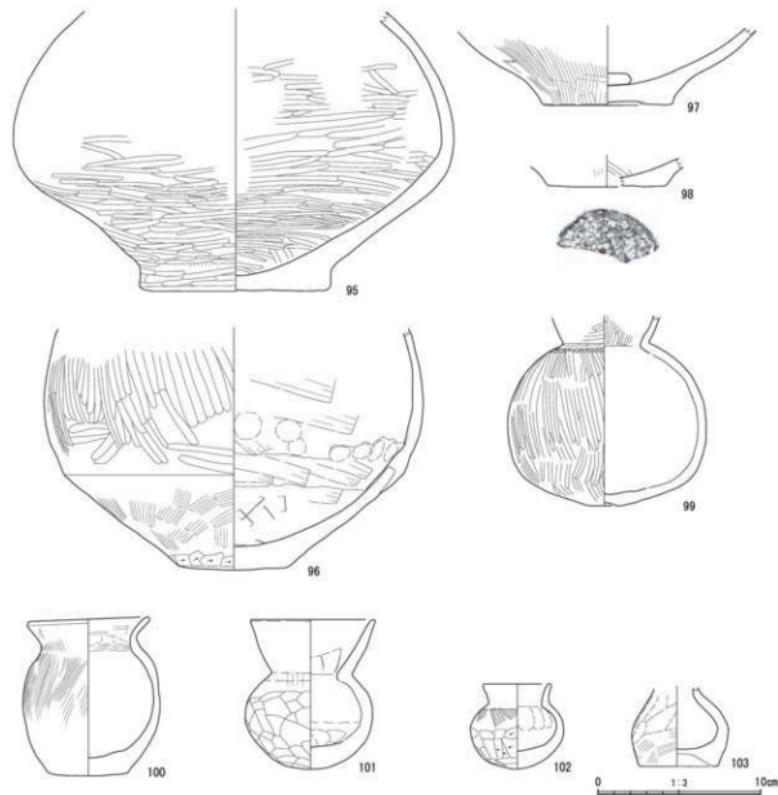
である。搬入品であろうか。88は胴部最大径が高い位置にあり、頸は細く絞られている。外面は全面ミガキを施している。搬入品と考えられる。89は大廓式の大型の壺で、同一個体と認められる口縁から頸部の破片と胴部下半から底部の破片である。口縁部の外面に縦に2本の沈線が残るが、欠損のため本数、単位は不明である。底面には網代痕が観察できる。網目の幅は約7mmである。90は頸から肩部にかけての破片である。残存部分では下から、櫛状工具により、横線文、波状文、横線文、板状工具の刺突による羽状文が3段施されている。波状文の上部に円形浮文が5個の1単位が残存している。胎土には砂を多量に含む。91は頸から胴部の破片である。胴は球形で、頸は直立する部分まで残存している。胴部外面は縦方向のミガキで赤彩されている。頸部はハケの後ヨコナデで赤彩はない。92と93は肩部から底部まで残存している。92の胴部は球形に近く、93は下ぶくれで肩も張る。ともに外面はミガキで仕上げられている。94は口縁から底部まで残存しているが、胴部上方で接合しない。口縁の端部はほぼ水平に丁寧に面取りされている。内外面ともに大部分がミガキで仕上げられている。胴部内面は底以外がヘラナデである。底面はわずかに上げ底で、接地面は磨滅しているが、接地しない内側に木葉痕が残る。95は肩部以下が残存し、下膨れが著しい。底面には木葉痕が残る。胎土に砂粒がやや多い。96は胴部以下が残存し下方に稜を持つ。底面はわずかに凸である。97と98は底部の破片である。97はわずかに上げ底である。底の中央付近に円形浮文のように径1.8cmの粘土が付着している。98は底面に幅6mmの網代のような痕跡が観察できるが、不明瞭である。99は直口壺であろうが口縁部を欠く。底は極めて小さく上げ底である。肩部に刺突による羽状文が1段施されている。胎土に砂粒がやや多い。100は小型の壺である。底面は少し突出している。外面はハケの後にナデているが、ハケメは多く残る。口縁内面から頸部外面はヨコナデによりハケメは消えている。101は小型丸底壺である。胴部外面はヘラケズリである。胎土に砂粒はほとんどない。102はミニチュアの丸底壺である。口縁は短い。103もミニチュアで壺である。底面は大部分が欠損している。胴の最大径に対し、底径が大きい。104は短頸壺としておく。底部は剥離している。胴部内面で横方向の強いナデがミガキのように見えるほか、口縁端部のナデなど、全体的に丁寧に仕上げられている。胴部中央にわずかに赤彩が残る。101は古墳時代中期まで下る可能性がある。

105～112が甕である。105はやや肩が張り、口縁は短く、外に開かず直立している。口縁端部は面取りをし、外側に刻み目を施す。106はやや小型で胴部は厚みがある。口縁部は端部を面取りし、外側に刻み目を施す。107～109はS字状口縁甕である。107は頸部に沈線をめぐらす。肩部のヨコハケは1段の幅が広い。胎土に雲母を少量含む。108も頸部に沈線をめぐらす。ハケメが明瞭で、肩部のヨコハケは幅が狭い。胎土に雲母を含む。109に頸部の沈線はなく、口縁端部は薄く開いている。ハケメが明瞭で、肩部のヨコハケは下側が途切れとぎれである。胎土の雲母は少量である。107と108はC類の搬入品、109はB類の新段階と考えられる。110～112は台付甕の台部である。110は大型で端面にスノコ痕が残る。111はやや低めである。砂粒がやや多い。112はミニチュアである。外面には横方向のミガキ、内面は板状工具によるナデが見られる。

113～121が高坏・器台である。113は有稜高坏である。口縁部は屈曲して外反して開く。端部は面取りし、外側に刻み目を施す。坏部の内面は横方向、外面の稜より下は縦方向のミガキ、外面の稜より上は縦方向のハケで仕上げている。胎土に砂粒が多い。114は脚部である。裾部にはわずかに段を残し、斜めのハケメを付けている。接合部には櫛状工具による刺突羽状文を施す。115はやや小型である。皿状の坏部で、脚は端部が大きく開く。透かしは3方向である。116は坏部がやや大きくなる状で、口縁端部がわずかに外反する。透かしは3方向である。117は透かしが4方向である以外は、116に近い形態である。118はやや直線的に広がる脚部で、透かしは3方向である。119は小型の器台の受部である。直線的に開く皿状で稜を持つ。中央に径9mmの孔があけられている。120と121はミニチュアの高坏である。



第21図 SR05 出土遺物実測図3



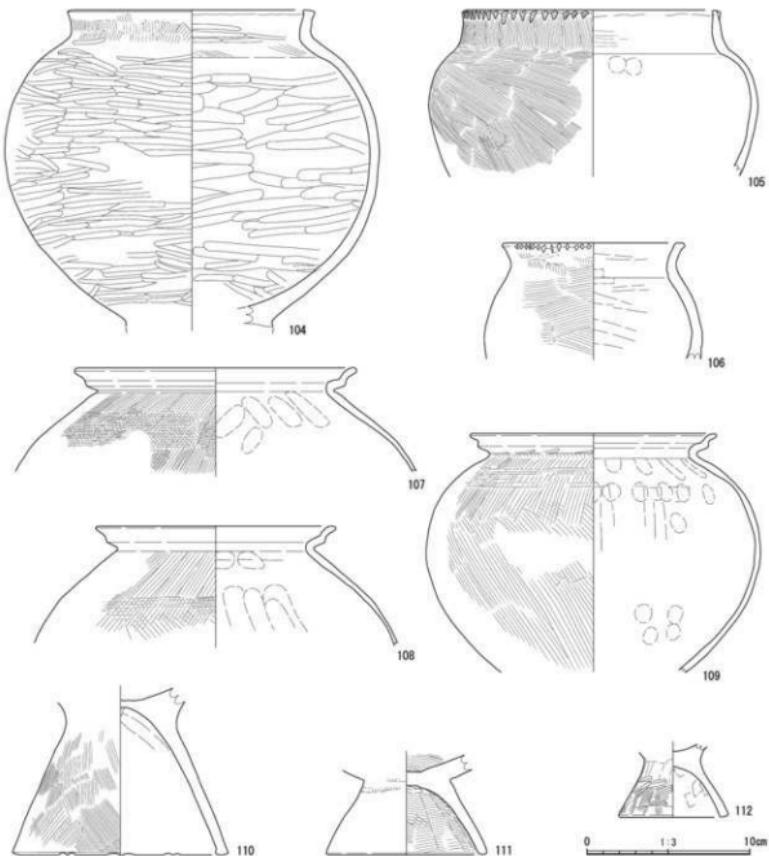
第22図 SR05 出土遺物実測図4

120はやや浅い皿状の壊部の破片である。接合部に縦方向で、内面にもヘラの痕跡が残るが、磨滅によりはつきりしない。121は脚部である。ハの字に広がり、端部がわずかに外反する。

122～124は小型の鉢である。122は直線的にやや広がっている。外面にハケメが明瞭に残る。底面にはスノコのような痕跡が観察できるが、はつきりしない。123の底は厚いが、径は小さめである。全体的にナデで仕上げているが、わずかに指とハケの跡が観察される。124は内湾気味で、わずかに上げ底である。胎土に含まれる砂粒がやや大き目多い。

125と126は頭のすぼまり方が弱いため、鉢とした。125は球形の胴にくの字に折れて外反する短い口縁を持つ。胴部下方にわずかに稜があり、わずかに上げ底である。外面の稜より下は板ナデ、上はミガキ調整である。126の口縁部は直立気味でやや厚くしている。底面はヘラケズリである。胴部の外面はミガキの中にところどころにハケメが残る。

127～129は須恵器である。127は壺蓋の小破片、やや黒っぽい色調である。128は壊身でやや小径で

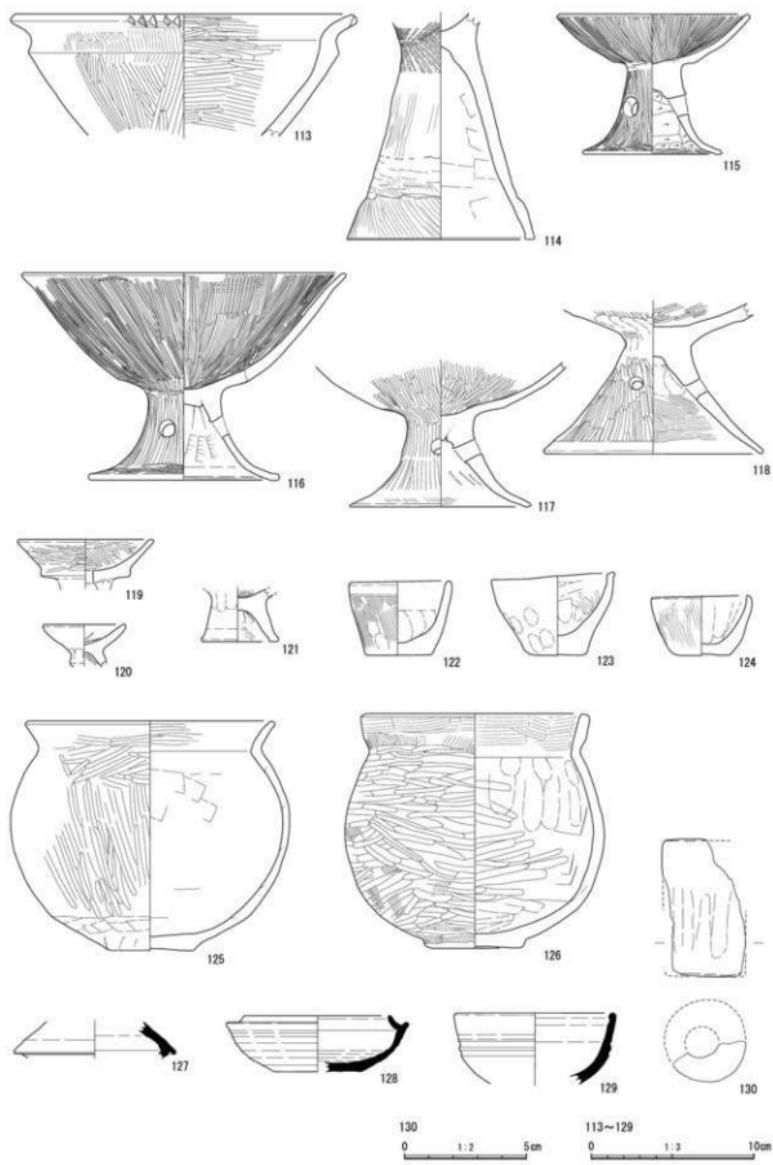


第23図 SR05出土遺物実測図5

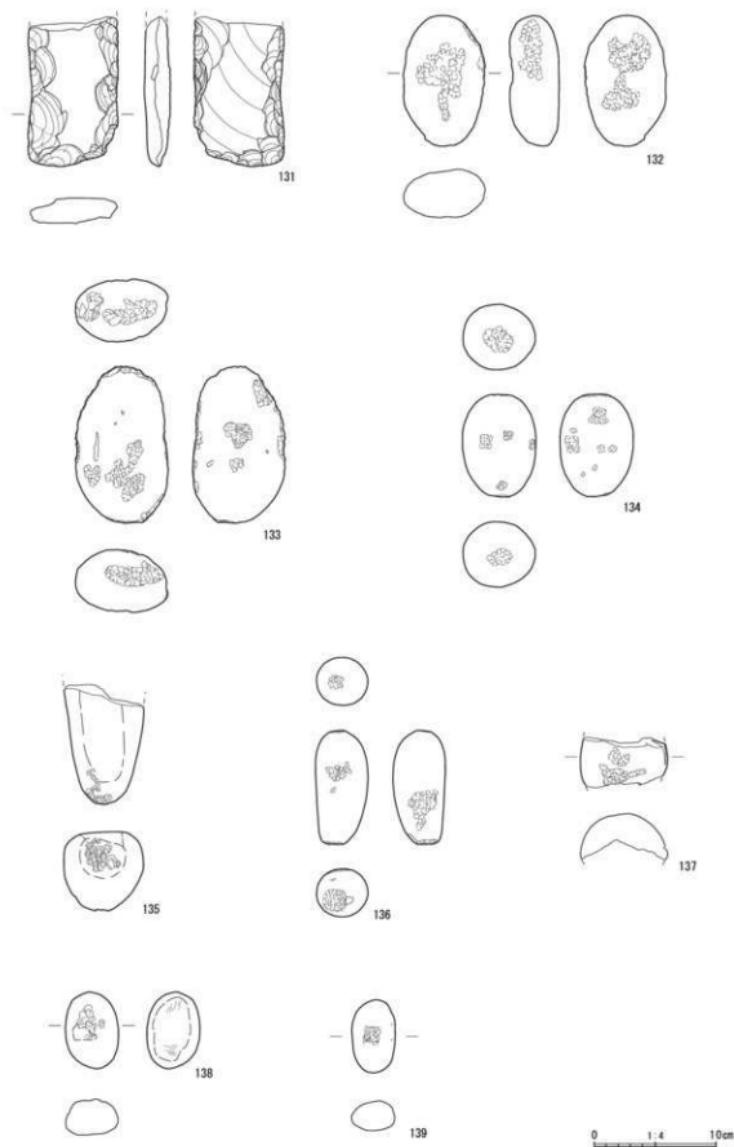
ある。129は高坏で、内面の口縁端部付近にやや深い沈線が1条、外面には中位に2条の沈線をめぐらす。いずれも7世紀前半ごろと考えられる。

土器・石製品は130の土鍤1点である。円筒形で約1/2の破片である。

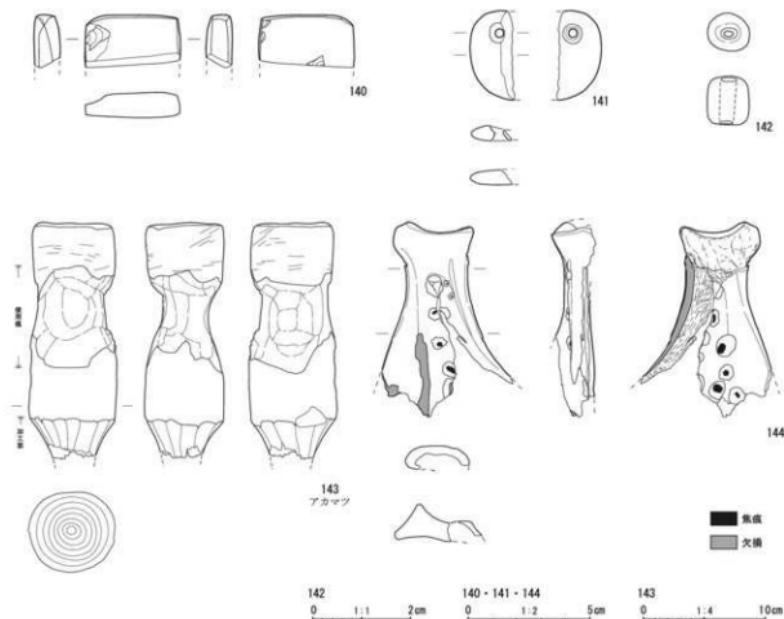
石器・石製品が131～141である。131は石鍤で全体の半分ほどの破片と思われる。端部付近の片面にわずかに擦れが見られるだけであり、ほとんど使用されていないのか、基部と考えられる。132～139は敲石である。132は全体的によく使われており、中央部はへこんでいる。133、134、136は端部を含め、ほとんどの面を使用している。135は欠損しているが、端部に使用痕が顕著である。137は元の鍤としては10cm以上あり、全体の1/5～1/10ほどの破片と推定される。残った面に敲きの痕跡が見られる。138は敲石としたが、磨りの痕跡の方が多い。小型の円錐を利用している。片面は使用により激しく摩



第24図 SR05 出土遺物実測図6



第25図 SR05 出土遺物実測図7



第26図 SR05 出土遺物実測図8

耗し、平坦になっている。反対の面にも磨りの痕跡と凹みが認められる。端部を含め側縁には使用痕は観察できない。139は長さ6cmと小型の円碟で、中心部だけでなく、端部も使用している可能性がある。140は扁平片刃石斧の基部の破片である。中央部は厚く、縁辺部はやや薄い。風化によるものか表面が荒れており、研磨痕は観察できない。141是有孔の石製品の破片である。円形に近いとも考えられるが、全体の形状は不明である。孔は両側からあけられている。磨滅により研磨痕は見えない。

ガラス玉が142である。濃青色で透明感はない。短い管状で丸みを帯びている。全長1.0cm、外径0.8cm、孔径0.3cm、重量0.83gである。

本製品は143のみで、横楕である。アカマツ製で、柄は欠損している。楕部は直径約7cm、長さ16cm、握り部に向かって細くなっている。握り部は直径3.5cmと推定される。楕部の中央は表裏とも多く碗状にへこんでいる。側面も欠損している。へこみよりも頭側には1cm弱の傷も多く見られ、何らかの使用痕かと思われる。

144はト骨である。種の同定調査の結果はイノシシ幼獣の肩甲骨である。破損が激しく刀物による加工などの跡は見つけられない。焼灼痕は小さな痕跡も含めると、棘のある面に7箇所、裏面に9箇所確認できる。焼灼部分で割れやすくなっているようである。残存している長さは7.95cm、幅は5.4cmである。

2 遺構外出土遺物（第27・28図）

土器が145～163である。145～151が壺類である。145は単純口縁、底部はわずかに上げ底で木葉痕がある。磨滅が激しいが、胴部最大径付近にミガキが残る。146は小型の単純口縁である。口縁内面と頸部との境に稜を持つ。全体に剥離、磨滅が激しく調整はほぼ不明である。147と148は折返し口縁である。147は口縁端面に斜めの刺突、内面は3段の羽状刺突文を、端面下端には刻み目を施す。肩部には非常に浅い沈線をめぐらした下に斜めの刺突文が1段残る。いずれも櫛状工具によるものである。148の折返し部下面は強く指で押さえることで、波状になっている。口縁端面に櫛状工具による押引文、内面には刺突羽状文が5段、肩部には刺突羽状文が3段施されている。また、羽状文の上には浮文も付されている。肩部では、上から1段目と2段目の間に、長さ8mm、断面三角形につまんだ浮文が2個5単位。口縁部では外から2段目と3段目の間に4個5単位。4単位は円形であるが、1単位だけは肩部と同様につままれている。149は複合口縁の破片である。口縁外面には羽状繩文を1段施し、棒状浮文が2本分、円形浮文が2個残存しているが、本来はもっと多かったと思われる。150は胴部から底部の破片である。球形の胴部に大きめの底部を持つ。全体に剥離が激しく、胴部外面中央付近に縱方向のミガキが内面底付近にハケメがわずかに観察される程度である。胎土に砂粒が多い。151は壺とした。底径は3.1cmと小さい。ほとんど剥離しているが、内面にわずかにミガキの痕跡を見る事ができる。胎土にはやや砂粒が多い。

152～155が甕である。152と153はともに口縁部外側に刻み目を施す。153は口縁端面を面取りし、ハケメが見られる。154はS字状口縁台付甕である。口縁内側の段は不明瞭で、摩滅により調整も不明である。胎土に雲母を少量含む。頭部の沈線は不明瞭だが、C類に分類できよう。155はS字状口縁台付甕の台部である。端部は内側に折り返している。胎土に雲母を含む。

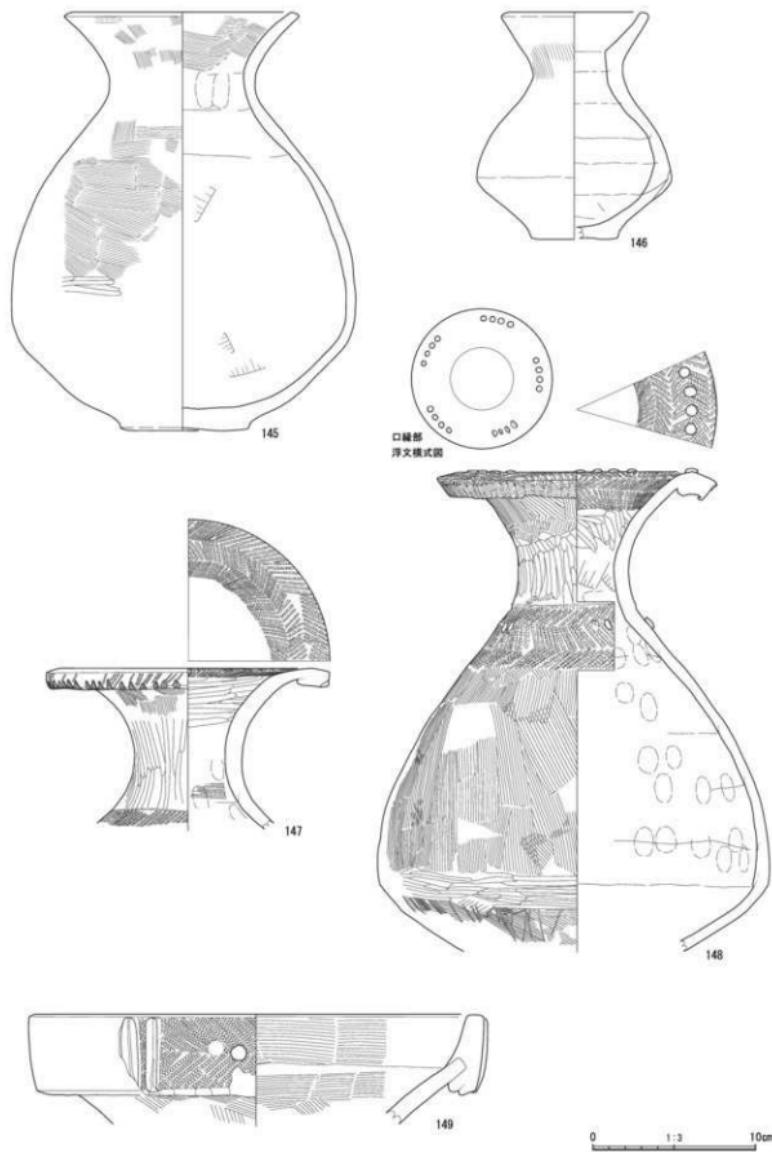
156～159は高坏類である。156はミニチュアとしてよいであろう。やや深めの皿状の坏部に、わずかに内湾する脚部を持つ。透かしはない。157も小型である。脚部の裾は緩やかに広がり、透かしはない。158は器台である。浅い皿状の受部の中央に穿孔を持つ。外面にわずかに赤彩が見られる。159は柱状の脚部である。裾は大きく広がり、端部はほぼ水平になる。透かしは3方向である。古墳時代中期後半に属するだろう。

160～162はその他、鉢などである。160は鉢で底から直線的に開き、口縁部でわずかに内湾する。底部外面も含め、全面をミガキによって仕上げている。胎土には2mm程までの砂礫をやや多く含む。雲母もわずかに含む。161も鉢であろうが注口部分の破片である。3cmほど突出し、端面は面取りされている。外面は縱方向のミガキを施しているが、内面は不明である。162は手捏ね土器の完形品である。輪積みの痕が残り、内面の底付近では大きな段差として残る。

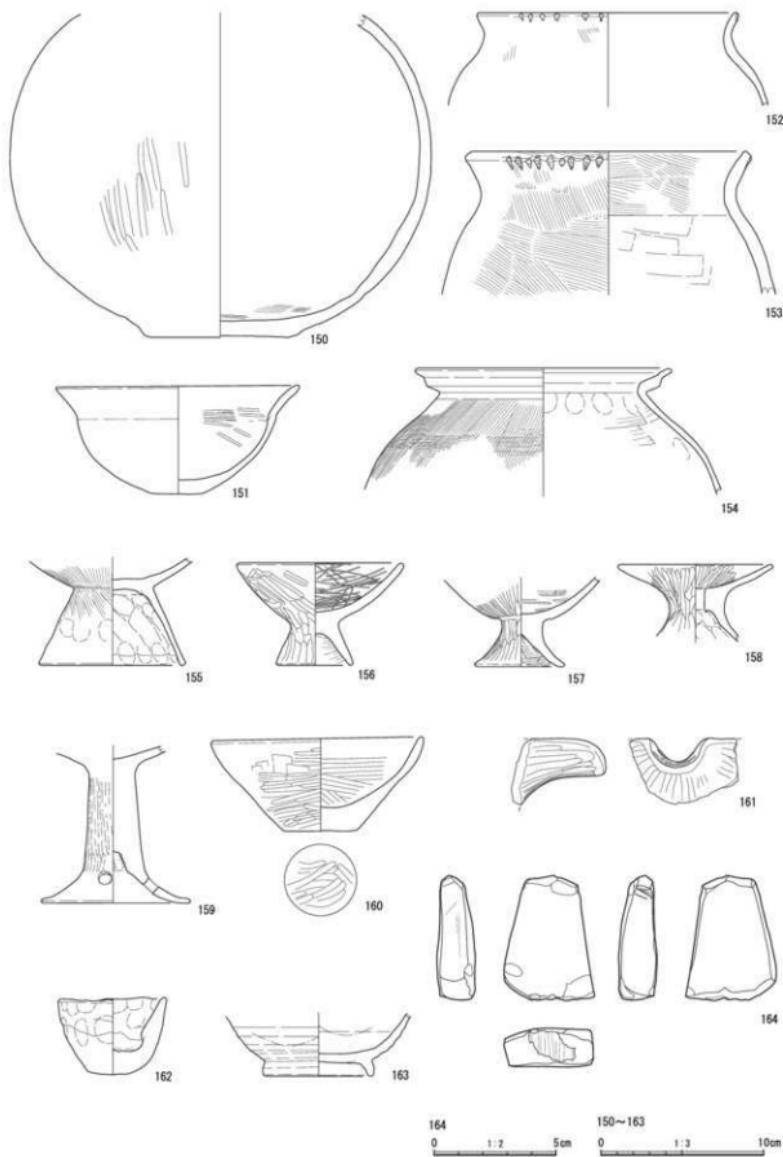
163は灰釉陶器碗の底部である。灰釉は剥離して不明瞭であるが、3か4方向の漬け掛けと思われる。底部は回転糸切である。O-53号窯式、10世紀前半ごろと推定される。

石器は164の砥石1点である。平面形が台形状である。台形の長辺側の端面と側面に直線的な筋があるが、使用痕なのか成形の痕なのか不明である。

遺構外出土遺物として記載した遺物のうち、確認調査時にテストピットTP3-2から出土した156、157、158、161は、SD01の検出状況等から判断すると、もともとSD01に包含されていた可能性が高い。SD01出土遺物として記載したものと同様、古墳時代前期の祭祀に使われたものと考えられる。



第27図 造構外出土遺物実測図 1



第28図 遺構外出土遺物実測図2

第2表 出土器觀察表

擇因 No.	國版	出土 位置	種類	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口徑 (cm)	底径 (cm)	色調(外)	色調(内)	焼成	備考	
1	S001	弥生土器	盞	口縁部 ～底部	10～30	(7.1)		(13.1)			に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	良		
2	S001	弥生土器	盞	口縁部 ～底部	40	(8.5)		(15.6)			灰褐色	灰褐色	10YR 7/3	10YR 7/3	
3	S001	弥生土器	盞	口縁部 ～底部	25	(6.75)		(14.4)			に赤い褐色	に赤い褐色	良		
4	S001	弥生土器	盞	口縁部 ～底部	25	(5.9)		(23.6)			淡褐色	黑色	STR 8/4	2.5YR 2/1	
5	S001	土師器	盞	口縁部 ～底部	25	(7.1)		(17.9)			褐色	褐色	10YR 7/6	10YR 7/6	
6	S001	土師器	盞	口縁部 ～底部	100	(8.2)		(13.1)			に赤い褐色	に赤い褐色	良		
7	S001	土師器	盞	口縁部 ～底部	15	(7.1)		(12.0)			に赤い褐色	に赤い褐色	10YR 7/4	10YR 7/4	
8	S001	土師器	小型盞	口縁部 ～底部	25	(4.9)	(8.85)	(8.4)			褐色	褐色	2.5YR 7/6	2.5YR 7/6	
9	S001	土師器	小型丸底壺	口縁部 ～底部	20	(5.8)		(12.0)			オリーブ褐色	オリーブ褐色	3Y 3/1	3Y 3/1	
10	S001	土師器	小型丸底壺	口縁部 ～底部	20	(5.4)		(12.7)			淡褐色	灰褐色	10YR 8/4	10YR 8/2	
11	6	S001	弥生土器	甕	口縁部 ～底部	25	(8.2)		(16.4)			黑色	黑色	7.5YR 1.7/1	7.5W 1.7/1
12	6	S001	弥生土器	甕	50～60	(16.5)	(24.5)	(18.2)			に赤い褐色	に赤い褐色	2.5YR 7/6	5W 2/3	
13	S001	土師器	甕	口縁部 ～底部	20	(7.1)		(14.0)			褐色	褐色	2.5YR 7/6	2.5YR 7/6	
14	6	S001	土師器	甕	100	(7.35)		11.4			暗灰色	褐色	5Y 3/1	5Y 3/1	
15	S001	土師器	甕	口縁部 ～底部	25	(8.5)		(14.7)			に赤い褐色	に赤い褐色	10YR 7/4	10YR 7/4	
16	S001	弥生土器	甕	口縁部 ～底部	20	(5.9)		(17.0)			に赤い褐色	に赤い褐色	2.5YR 7/4	7.5W 1.7/1	
17	6	S001	弥生土器?	甕?	口縁部	5	(6.4)				灰白色	灰白色	10YR 7/2	10YR 7/2	
18	6	S001	弥生土器	台付甕	底部 ～台部	70	(7.5)			(8.75)	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	10YR 7/3	10YR 7/3	
19	6	S001	弥生土器	台付甕	台部	100	(6.0)			(8.6)	淡褐色	淡褐色	STR 8/3	STR 8/3	
20	6	S001	土師器	高坪	全体	40	(7.4)		(13.3)		に赤い褐色	に赤い褐色	2.5YR 7/4	7.5W 1.7/1	
21	6	S001	土師器	高坪	坪部	70	(5.85)		(11.2)		に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	10YR 7/2	10YR 7/2	
22	S001	土師器	高坪	底部 ～脚部	10～70	(6.95)			(6.55)	に赤い褐色	に赤い褐色	5Y 3/1	5Y 3/1		
23	S001	土師器	高坪	底部 ～脚部	20～30	(7.2)			(11.4)	淡褐色	淡褐色	5Y 3/1	5Y 3/1		
24	7	S001	土師器	高坪	底部 ～脚部	100	(5.1)		(8.65)		褐色	褐色	2.5YR 6/6	2.5YR 6/6	
25	S001	土師器	高坪	脚部	30	(4.6)			(9.1)	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	10YR 7/2	10YR 7/2		
26	7	S001	土師器	高坪	脚部	80	(5.0)		(7.65)		褐色	褐色	2.5YR 7/6	2.5YR 7/6	
27	7	S001	土師器	高坪	底部 ～脚部	100	(4.6)			(6.7)	淡褐色	淡褐色	2.5YR 7/4	2.5YR 7/4	
28	7	S001	土師器	高坪	底部 ～脚部	100	(3.7)			6.6	淡褐色	淡褐色	5Y 3/1	5Y 3/1	
29	7	S001	土師器	高坪	脚部	95	(4.4)			(6.9)	褐色	褐色	2.5YR 7/6	2.5YR 7/6	
30	7	S001	土師器	高坪	底部 ～脚部	10～90	(4.0)			(6.8)	淡褐色	淡褐色	5Y 3/1	5Y 3/1	
33	8	S002	弥生土器	盞	口縁部 ～底部	70	(7.8)		(11.6)		に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	2.5YR 7/4	5W 2/6	
34	7	S002	弥生土器	盞	口縁部 ～底部	90～60	(11.1)			(12.0)	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	10YR 7/3	10YR 7/3	
35	7	S002	弥生土器	盞	口縁部 ～底部	25～80	(5.5)			(13.6)	褐色	褐色	5W 2/5	5W 2/5	
36	S002	弥生土器	盞	口縁部 ～底部	40	(5.6)		(18.7)			明褐色	明褐色	2.5W 1/2	2.5W 1/2	
37	8	S002	弥生土器	盞	口縁部 ～底部	20	(3.5)			(16.4)	淡褐色	淡褐色	2.5YR 7/4	10YR 7/1	
38	S002	弥生土器	盞	体部	50	(11.75)	(17.8)				に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	10YR 7/2	2.5Y 7/2	

第2表 出土器觀察表

擇因 No.	國版	出土 位置	種別	器種	部位	殘存率 (%)	器高 (cm)	器徑 (cm)	口徑 (cm)	底徑 (cm)	色調(外)	色調(内)	構成	備考
39	S802	弥生土器	便	口縫部 ～体部	10	(5.6)		(18.8)			褐色	褐灰色		
40	S802	弥生土器	便	口縫部 ～体部	15	(7.8)		(18.8)			灰白色	10YR 6/1 に近い・黒褐色		
41	S802	弥生土器	便	口縫部 ～体部	15	(9.5)		(24.3)			明褐色	明褐色		
42	S802	弥生土器	便	口縫部 ～体部	15	(11.8)		(21.7)			浅黄色	浅黄色		
43	8	S802	弥生土器	高坪	口縫部 ～体部	10	(5.4)		(21.4)		灰白色	灰白色		
44	S802	弥生土器	高坪?	口縫部 ～体部	30	(6.9)		(17.6)			に近い・黒褐色	に近い・黒褐色		
45	S802	弥生土器	高坪?	全体	20	(4.1)		(11.1)			浅黄色	浅黄色		
46	S802	土師器	高坪	脚部	20	(4.6)				(11.8)	褐色	褐色		
47	S803	弥生土器	直	口縫部 ～頭部	10	(1.35)		(11.9)			に近い・褐色	に近い・褐色		
52	S803	弥生土器	直	口縫部 ～頭部	20	(2.7)		(12.8)			浅黄色	浅黄色		
53	S803	弥生土器	直	口縫部 ～頭部	15	(6.25)		(20.5)			明褐色	明褐色		
54	8	S803	弥生土器	直	口縫部	10	(4.7)		(20.4)		赤褐色	赤褐色		
55	S803	弥生土器	直	底部	30	(5.7)				(7.6)	に近い・黒褐色	に近い・黒褐色		
56	S803	弥生土器	小型鉢	底部	100	(2.9)				(3.6)	淡褐色	淡褐色		
57	8	S803	土師器	小型鉢	全体	50	5.35		(13.9)	3.5	褐色	褐色		
58	S803	弥生土器	便	口縫部 ～体部	15	(5.15)		(20.1)			10YR 6/1 明褐色	10YR 6/1 明褐色		
59	S803	弥生土器	便	口縫部 ～体部	15	(9.6)		(22.8)			7.5YR 7/2 浅黄色	7.5YR 7/2 浅黄色		
60	S803	弥生土器	便	口縫部 ～体部	15	(5.3)		(18.8)			7.5YR 8/3 浅褐色	7.5YR 8/3 浅褐色		
61	S803	弥生土器	台付甕	体部 ～台部	30	(8.3)					灰白色	灰白色		
62	S803	弥生土器	高坪	脚部	20	(6.3)				(10.8)	10YR 6/4 淡褐色	10YR 6/4 淡褐色		
63	8	S803	土師器	高坪	全体	60	6.8		(10.6)	8.6	5YR 8/4 淡褐色	5YR 8/4 淡褐色		
64	S803	土師器	高坪	脚部	30	(7.05)				(13.7)	10YR 6/2 淡褐色	10YR 6/2 淡褐色		
65	8	S803	土師器	高坪	脚部	40	(4.5)			(8.35)	に近い・褐色	に近い・褐色		
66	8	S803	土師器	高坪	脚部	50	(3.65)			(6.7)	に近い・褐色	に近い・褐色		
67	S804	弥生土器	直	口縫部 ～頭部	100	(4.0)				6.8	2.5YR 8/4 浅黄色	2.5YR 8/4 浅黄色		
68	9	S804	弥生土器	直	頭部 ～底部	100	(10.8)	10.2		6.7	2.5YR 8/4 浅黄色	2.5YR 8/4 浅黄色		
69	9	S804	弥生土器	直	頭部 ～体部	100	(14.05)	(14.6)			灰白色	褐色		
70	9	S804	弥生土器	直	底部	100	(4.1)			9.0	褐色	褐色		
71	9	S804	土師器	直	頭部 ～底部	~100	(12.0)	13.5		4.4	褐色	褐色		
72	S804	弥生土器	便	口縫部 ～体部	25	(16.8)	(19.4)	(16.2)			2.5YR 7.6 淡褐色	2.5YR 7.6 淡褐色		
73	S804	弥生土器	台付甕	台部	60	(7.7)				(16.5)	5YR 8/4 淡褐色	5YR 8/4 淡褐色		
74	8	S804	土師器	高坪	脚部	90	(6.9)			(12.5)	褐色	褐色		
75	9	S804	土師器	高坪	底部 ～脚部	70	(3.95)			(7.2)	明褐色	明褐色		
76	S804	土師器	鉢?	口縫部 ～体部	25	(5.0)	(8.4)	(8.2)			褐色	褐色		
77	9	S804	土師器	台付甕	底部 ～脚部	100	(4.6)			(6.3)	に近い・褐色	に近い・褐色		
79	9	S805	弥生土器	直	口縫部 ～体部	40	(20.8)	(18.0)	(12.6)		2.5YR 7/3 褐色	2.5YR 7/3 褐色		

第2表 出土器觀察表

擇因 No.	國版	出土 位置	種類	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口徑 (cm)	底径 (cm)	色調(外)	色調(内)	構成	備考
80	9	S805	衛生土器	盞	全体	70	16.4	12.5	(10.3)	8.4	にぶい褐色 7.5W 7/4	にぶい褐色 7.5W 7/4	良	外面刷毛
81	10	S805	衛生土器	盞	全体	70	13.4	11.0	(10.1)	5.7	にぶい褐色 10W 6/2	にぶい褐色 10W 6/2	良	黒墨あり
82	10	S805	衛生土器	盞	口縁部 ～底部	100	(6.65)		10.0		にぶい褐色 7.5W 7/4	にぶい褐色 7.5W 7/4	良	
83	10	S805	衛生土器	盞	口縁部 ～底部	100 ～70	(18.1)	(24.5)	(16.6)		褐色 SW 7/6	褐色 SW 7/6	良	
84	10	S805	衛生土器	盞	口縁部	30	(4.8)		(13.0)		灰白色 10W 7/1	浅黃褐色 7.5W 8/3	良	
85	10	S805	衛生土器	盞	口縁部 ～底部	25	(5.8)		(11.4)		淡褐色 SW 8/3	褐色 10W 5/1	良	
86	10	S805	土師器	盞	全体	30 ～100	19.0	17.9	(16.1)	6.2	にぶい褐色 10W 7/2	にぶい褐色 10W 7/2	良	黒墨あり
87	10	S805	土師器	短頭盞	全体	30 ～100	14.2	(19.3)	(14.8)	6.3	にぶい褐色 10W 7/4	灰褐色 10W 4/2	良	黒墨あり
88	10	S805	衛生土器	盞	体部 ～底部	100	(14.0)		15.6	6.2	褐色 10W 4/1	褐色 10W 4/1	良	
89	11	S805	土師器	盞	口縁部 ～底部	10/15～ 100	(15.9) (28.2)		(31.0)	14.6	にぶい褐色 7.5W 7/4	にぶい褐色 7.5W 7/4	良	底部刷毛
90	12	S805	衛生土器	盞	底部	25	(9.8)				褐色 10W 5/1	褐色 10W 7/3	良	
91	11	S805	衛生土器	盞	体部	40	(10.0)	(14.0)			灰褐色 7.5W 5/2	灰褐色 7.5W 5/2	良	外面刷毛
92	11	S805	衛生土器	盞	体部 ～底部	40	(17.1)	(16.7)		6.6	にぶい褐色 7.5W 7/4	にぶい褐色 7.5W 7/4	良	
93	12	S805	衛生土器	盞	体部 ～底部	90	(14.9)	15.35		6.9	明赤褐色 2.5W 7/2	明赤褐色 2.5W 7/2	良	
94	12	S805	土師器	盞	口縁部 ～底部 /底部 ～底部	25～ 40～ 100	(9.8) (24.1)	(36.1)	(21.0)	16.0	浅黃褐色 10W 8/3	浅黃褐色 10W 8/3	良	底部木彫痕
95	11	S805	衛生土器	盞	体部 ～底部	60～ 100	(17.2)	(27.2)		11.8	淡赤褐色 2.5W 7/4	淡赤褐色 2.5W 7/4	良	
96	S805	衛生土器	盞	体部 ～底部	25～ 100	(19.85)	(23.4)		6.8	にぶい褐色 10W 7/3	にぶい褐色 10W 7/3	良		
97	11	S805	衛生土器	盞	底部	100	(4.8)			8.0	にぶい褐色 10W 6/4	にぶい褐色 10W 6/2	良	底部内面に円形 の轍跡
98	S805	土師器	盞	底部	40	(1.8)			(7.2)	にぶい褐色 SW 7/4	にぶい褐色 SW 7/4	良	底部刷毛	
99	12	S805	土師器	直口盞	頸部 ～底部	90	(11.7)	12.2		1.8	褐色 SW 6/6	褐色 SW 6/6	良	
100	12	S805	土師器	小型盞	全体	90	9.5～9.8		7.5	4.8	にぶい褐色 10W 7/3	褐色 2.5W 7/6	良	
101	13	S805	土師器	小型丸底壺	全体	70	9.2		(7.6)		灰白色 BY 7/2	灰白色 BY 7/2	良	
102	13	S805	土師器	丸底壺	全体	60 ～100	5.25	5.75	4.2		にぶい褐色 5W 7/4	黑色 7.5W 2/1	良	
103	13	S805	土師器	盞	体部 ～底部	80	(4.9)			(5.0)	浅黃褐色 2.5W 8/3	黑色 N 3'	良	
104	13	S805	土師器	盞	全体	70	(19.5)	23.1	(15.2)		赤褐色 10W 6/6	赤褐色 10W 6/6	良	
105	13	S805	衛生土器	甕	口縁部 ～底部	70	(10.15)	(20.3)	15.9		浅黃褐色 2.5W 8/4	浅黃褐色 2.5W 8/4	良	
106	S805	衛生土器	甕	口縁部 ～底部	20	(7.2)		(11.2)		浅黃褐色 10W 8/3	灰白色 10W 7/1	良	黒墨あり	
107	S805	土師器	S字状口縁 台付甕	口縁部 ～底部	30	(6.4)		(7.4)		にぶい褐色 10W 7/2	にぶい褐色 10W 7/2	良	外面刷毛	
108	S805	土師器	S字状口縁 台付甕	口縁部 ～底部	25	(7.4)		(14.8)		灰褐色 10W 6/2	灰白色 10W 6/2	良		
109	13	S805	土師器	S字状口縁 台付甕	口縁部 ～底部	30	(14.7)	(20.6)	(15.2)		灰色 10W 4/1	褐色 10W 5/1	良	
110	13	S805	衛生土器	台付甕	台部	30	(10.3)			(13.3)	にぶい褐色 BY 7/4	にぶい褐色 SW 7/4	良	端部にスコット 状痕
111	S805	衛生土器	台付甕	底部 ～台部	95	(6.1)				9.9	灰白色 SW 6/3	灰白色 SW 7/2	良	外面刷毛
112	13	S805	衛生土器?	台付甕	台部	100	(4.4)			6.8	灰白色 10W 4/2	灰白色 10W 4/2	良	
113	14	S805	衛生土器	瓦片	口縁部 ～底部	20	(7.5)		(20.7)		にぶい褐色 10W 6/3	にぶい褐色 10W 7/2	良	

第2表 出土土器觀察表

件番 No.	國版	出土 位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外)	色調(内)	焼成	備考	
114	14	S805	衛生土器	高坪	脚部	100	(13.9)			11.6	淡黃褐色	灰褐色	良		
115	14	S805	土師器	高坪	全体	60	8.6		(11.9)	8.6	にぶい・黄褐色 10YR 6/4	にぶい・黄褐色 10YR 4/3	良		
116	14	S805	土師器	高坪	全体	70 ~ 90	12.75		(20.0)	(11.8)	にぶい・黄褐色	灰褐色	良		
117	14	S805	土師器	高坪	底部 ~脚部	50	8.9			11.2	淡黃褐色	褐色	良		
118	14	S805	土師器	高坪	脚部	70	(3.2)			(4.8)	にぶい・褐色 5W 7/4	にぶい・褐色 7.5W 7/3	良		
119	14	S805	土師器	器台	脚部	30	(2.7)		(8.3)		にぶい・褐色 7.5W 7/4	にぶい・褐色 7.5W 7/4	良		
120	14	S805	土師器	高坪	全体	100	4.6		6.35	4.0	淡黃褐色	にぶい・黄褐色 10YR 8/3	良		
121	14	S805	土師器	高坪	脚部	70	(3.2)			(4.8)	にぶい・褐色 5W 7/4	にぶい・褐色 7.5W 7/3	良		
122	15	S805	土師器	小型脚	全体	60	2.6		(5.1)	(2.2)	淡黃褐色	にぶい・褐色 2.5W 6/3	良		
123	15	S805	土師器	小型脚	全体	95	4.6 ~ 5.1		7.6	3.5	灰白色	淡黃褐色	良		
124	15	S805	土師器	小型脚	全体	80	3.7			6.2	にぶい・褐色 5W 7/4	褐色	良		
125	15	S805	衛生土器	鉢	全体	50	14.1		(15.4)	5.4	にぶい・褐色 7.5W 7/3	にぶい・褐色 7.5W 7/3	良	黒斑あり	
126	15	S805	衛生土器	鉢	全体	60		~ 100	13.9	16.0	(14.1)	6.0	灰白色		
127		S805	須恵器	蓋	全体	10	(2.3)	(10.1)			灰色	灰色	良		
128	15	S805	須恵器	身	底部 ~脚部	95	(9.3)			13.5	褐色	褐色	良		
129		S805	須恵器	高坪	口縁部	20	(4.4)		(10.0)		灰白色	灰オーラー色 5Y 7/1	良	内面暗灰	
145	15	DGrid 13層	衛生土器	蓋	全体	40		25.75	(21.2)	(14.4)	7.9	褐色	褐色	良	
146	15	CGrid 包含層	衛生土器	蓋	全体	60	14.0	(12.0)	(9.0)	(5.3)	淡黃褐色	淡黃褐色	良	黒斑あり	
147	15	DGrid 包含層	衛生土器	蓋	口縁部 ~底部	90	(9.9)			17.45	灰白色	灰白色	良		
148	16	DGrid 包含層	衛生土器	蓋	口縁部 ~体部	100	~ 80	(29.5)	(24.0)	17.25	にぶい・黄褐色 10YR 7/3	にぶい・黄褐色 10YR 7/3	良		
149		DGrid 包含層	衛生土器	蓋	口縁部 ~底部	15	(6.7)		(28.0)		にぶい・褐色 7.5W 7/4	にぶい・褐色 7.5W 7/4	良		
150		DGrid 13層	衛生土器	蓋	体部 ~底部	60	(19.9)	(26.0)		9.4	褐色	褐色	良		
151	16	DGrid 13層	土師器	壺	全体	80	6.7		15.0	3.1	褐色	褐色	良		
152		DGrid 13層	衛生土器	壺	口縁部 ~体部	20	(8.8)		(17.4)		にぶい・黄褐色 10YR 7/4	にぶい・黄褐色 10YR 7/4	良		
153		DGrid 13層	衛生土器	壺	口縁部 ~体部	20	(2.7)		(16.1)		灰黃褐色	褐色	良		
154		DGrid 13層	土師器	S字状口縁 台付壺	口縁部 ~底部	15 ~ 30	(7.75)		(15.8)		灰白色	灰白色	良	外面部付着	
155	16	DGrid 13層	土師器	S字状口縁 台付壺	底部 ~台部	100	(6.6)			9.0	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	良	内外面煤行者	
156	16	TP3-2	土師器	高坪	全体	~ 100	6.3		(10.3)	(4.7)	明褐色	褐色	良		
157		TP3-2	土師器	高坪	底部 ~脚部	30 ~ 90	(5.5)			5.6	淡黃褐色	淡黃褐色	良		
158	16	TP3-2	土師器	器台	底部 ~脚部	40	(4.8)		(9.6)		にぶい・褐色 5W 7/4	にぶい・褐色 5W 7/4	良		
159		DGrid 包含層	土師器	高坪	底部 ~脚部	80	(9.6)			(9.2)	灰白色	灰白色	良		
160	16	DGrid 包含層	土師器	小型脚	全体	80	5.7			13.0	4.4	淡赤褐色	淡赤褐色	良	
161	16	TP3-2	土師器?	鉢?	注口部	100	(4.1)				灰白色	灰白色	良		
162	16	DGrid 包含層	土師器	手捏ね土器	全体	100	4.7		6.7		にぶい・褐色 7.5W 7/4	にぶい・褐色 7.5W 7/4	良		
163	16	DGrid 包含層	灰陶器	罐	底部	100	(3.9)			(6.8)	灰白色	灰白色	良		

() 内数字は器高幅では残存値、口径・器径・底径幅では推定値を示す。

第3表 出土石器觀察表

擇因 №	図版	出土位置	遺物名	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
131	17	SB05	石錐	砂岩	(12.3)	7.4	2.2	300.1	欠損
132	17	SB05	敲石	砂岩	10.7	6.7	4	408.7	
133	17	SB05	敲石	石英斑岩	12.9	7.6	5.1	727.51	
134	17	SB05	敲石	細粒黒雲母花崗岩	8.4	5.95	5.4	368.23	
135	17	SB05	敲石	砂岩	(9.85)	(6.55)	6.5	462.08	上半部欠損
136	17	SB05	敲石	砂岩	9.3	4.3	4	209.78	
137		SB05	敲石	砂岩	(4.2)	7.15	-	103.99	上下端部・ 裏面欠損
138	17	SB05	磨石	砂岩	6.25	4.3	2.95	117.79	
139	17	SB05	敲石	砂岩	6.0	3.5	2.4	71.63	
140	17	SB05	扁平片刃石斧	董青石ホルンフェルス	(2.15)	3.9	1.1	5.49	刃部欠損
141	17	SB05	有孔石製品	頁岩	(3.7)	1.8	0.6	5.4	孔径:0.3 cm
164	17	D3grid 伴水漢	砾石	流紋岩	5.1	3.7	1.6	40.87	

() 内数値は残存値を示す

第4表 出土土製品觀察表

擇因 №	図版	出土位置	器種	全長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	色調	備考
78	17	SR04	土壺	3.9	3.7	3.35	1.15	灰白色 2.5Y 8/2	完形
130	17	SR05	土壺	5.65	(3.55)	-	(1.4)		半分欠損

() 内数値は残存値を示す

第5表 出土木製品觀察表

擇因 №	図版	出土位置	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	木取り	備考
31	18	SD01	用途不明品	その他 ・不明	その他 ・不明		イチイガシ/ コナラ風 アカガシ亞属	(27.1)	(7.5)	1.0	柾目	
32	18	SD01	用途不明品	その他 ・不明	その他 ・不明		アカマツ	17	3.4	0.9	柾目	孔2箇所
47	18	SR02	農耕土木具	鋤	曲柄鋤身	平鋤	ウバメガシ	(24.0)	8.9	1.6~3.1	柾目	
48	18	SR02	農耕土木具	鋤	一本鋤	平鋤	イチイガシ	(37.2) 柄:(17.3) 身:(19.9)	柄:3.05 身:15.4	2.25 2.8	柾目	
49	18	SR02	用途不明品	その他 ・不明	その他 ・不明		クスノキ	41.6	16.05	2.3	柾目	孔1箇所
50	18	SR02	用途不明品	その他 ・不明	その他 ・不明		イチイガシ	8.35	19.45	1.95	柾目	
143	19	SB05	工具	槌	横樋		アカマツ	(19.4)	7.1	6.55	芯持ち材 径:(3.5) cm	握り部

() 内数値は残存値を示す

第5章 自然科学分析

第1節 水洗遺跡出土木製品の樹種

鈴木三男（東北大学植物園）

静岡県菊川市中内田地内の水洗遺跡から出土した木製品7点の樹種を調べ、第6表の結果を得た。

これらの木製品は菊川の支流稻荷部川の旧流路と思われる自然流路と溝からの出土で、共伴する土器等から弥生時代後期～古墳時代前期のものと判断されている。これら7点の樹種はアカマツとイチイガシが各2点、それにクスノキ、ウバメガシ、イチイガシか他のアカガシ亜属の種類と考えられるもの各1点である。これらの樹種の利用は静岡県内の同時期の遺跡出土材の樹種組成と非常によく整合する。

第6表 水洗遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧表

標団No.	出土遺構	プレバラートNo.	器種名	樹種
32	SR01	17096	用途不明	アカマツ
31	SD01	17097	用途不明	イチイガシ / コナラ属アカガシ亜属
48	SR02	17099	一木鉗	イチイガシ
49	SR02	17093	用途不明	クスノキ
47	SR02	17094	曲柄鉗	ウバメガシ
50	SR02	17095	用途不明	イチイガシ
143	SR05	17098	横槌	アカマツ

1 樹種同定結果

①アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科

写真3-1 a～c (プレバラート番号17096)

年輪が明瞭な針葉樹材で、水平・垂直両樹脂道を持つ。早材部、晚材部とも幅広く、早材から晩材への移行はやや明瞭である。放射組織は單列と紡錘形があり、柔細胞、放射仮道管、それに水平樹脂道を囲む分泌細胞からなる。放射組織の上下に1～数層の放射仮道管があり、その細胞内壁には顕著な歯牙状肥厚がある。分野壁孔は大型の窓状で1分野に1個ある。以上の形質より、マツ科のマツ属複維管束亜属のアカマツの材と同定した。

アカマツは本州から九州までの低地から山地にかけて広く分布する針葉樹で、特に瘦せ地や二次林に多い。材は木理通直、肌目は粗く、心材の保存性は良く、特に水湿に強いので、建築材（特に基礎、土台回りなど）、土木用材、器具材などに幅広い用途がある。本遺跡出土材は2点で、横槌が1点、用途不明品の木材が1点である。

②クスノキ *Cinnamomum camphora* (Linn.) Siebold et Zucc. クスノキ科

写真3-2 a～c (プレバラート番号17093)

丸～楕円形で壁のやや厚い中～大型の道管が単独あるいは2個放射方向に複合して比較的のまばらに均一に分布する散孔材で、年輪界付近では道管径が小さくなる。道管の穿孔は單一、年輪界近くの細い道管では横棒が數本の階段状が混じり、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、道管内にはチローシスが発達し、横断面でもよく見える。柔組織は周囲状でときどき大型の油細胞が混じり、径が大きいので横断面では

道管のように見えることがある。放射組織は2～3細胞幅の異性で背が低く、接線断面の形状は紡錘状であり、直立細胞に大きく膨らんだ油細胞が混じる。以上の形質からクスノキ科のクスノキの材と同定した。

クスノキは関東南部以南の暖帯に生育する常緑高木で、社寺、公園、屋敷林に良く植えられるので、天然分布の範囲は分からなくなっている。成長が早く、幹径1m、樹高20mを超える大木となる。社寺等には直径2mを越える大木がありしばしば天然記念物等に指定される。材は堅硬で耐久力、保存性にすぐれ、光沢があって芳香を持ち、建築材、和洋家具、箱物、木魚などの各種器具材に良く用いられる。本遺跡出土材は有孔の木材1点である。

③イチイガシ *Quercus gilva* Blume ブナ科

写真4-3 a～c (プレバラート番号17099)

丸～楕円形の単独道管が緩く集まって放射方向に配列する放射孔材で、大きな道管は接線径が $220\mu\text{m}$ を超える。道管の穿孔は單一、木部柔組織は接線状に配列する。放射組織は単列と大きな複合放射組織がある。これらの形質からブナ科コナラ属アカガシ亜属のイチイガシの材と同定した。

アカガシ亜属の材は道管が放射方向に配列する形質で他の樹木から区別されるが、アカガシ亜属にはアカガシ*Quercus acuta* Thunb.、シラカシ*Quercus myrsinæfolia* Blume、ウラジロガシ*Quercus salicina* Blumeなど多数の種があり、材構造が互いに似ていて個々の種を区別するのは困難である。その中でイチイガシは道管径が他の種に比べて一回り大きく、接線径が $220\mu\text{m}$ を超えることで区別できる（能城他2012）。イチイガシは関東地方南部以西の太平洋側及び瀬戸内地方、四国、九州に分布する常緑高木で、幹径1m、樹高30m以上になる。有用な木材が得られるので古くから植栽・造林されており、現在の分布域は元々の天然分布域を越えて拡がっていると考えられている。材は堅硬緻密で、木理通直、割裂自在で弹性強く強靭である。床柱、硬い材質を活かした各種器具、柄物、舟の櫓、檻、車輪、歯車など広い用途がある。イチイガシは関東から九州の弥生～古墳時代の鍔、鎌、エブリなどの木製農具に特に多用される。本遺跡出土材も一本鍔と、鍔や鎌といった農具の破片かと思われるもの各1点である。

④イチイガシ/コナラ属アカガシ亜属 *Quercus gilva* or *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 写真4-4 a～c (プレバラート番号17097)

本試料は道管径以外の材形質は上記イチイガシと全く同様である。能城他(2012)はアカガシ亜属において道管の最大径が $220\mu\text{m}$ 以上はイチイガシ、 $200\mu\text{m}$ 以下はイチイガシ以外のアカガシ亜属であり、 $200\sim220\mu\text{m}$ はその両者のいずれかであるとした。本資料は約 $200\mu\text{m}$ であり、イチイガシであるとはいえないでのイチイガシ/コナラ属アカガシ亜属としたが、顕微鏡写真3a、4aに見るようにイチイガシとしたもの(3a)によく似ており、イチイガシである可能性が高い。

⑤ウバメガシ *Quercus phillyraeoides* A. Gray ブナ科

写真4-5 a～c

イチイガシを含むアカガシ亜属と同様、円～楕円形の道管が緩く放射方向に配列する放射孔材で、道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。木部柔組織は独立帶状で接線方向に連なる。放射組織は単列と集合状(～やや複合状)とがある。道管径は最大の接線径で $100\mu\text{m}$ 程度でアカガシ亜属の材より格段に小さい。これらのことからブナ科コナラ属コナラ節のウバメガシの材と同定した。

ウバメガシは関東地方南部以西の海岸地帯に生える常緑の低木～小高木で、幹径30cm、樹高6mくらいになる。材は非常に硬くて強靭で、割裂、切削ともに困難である。農具、柄物、車軸、和船の檻等に用い、また炭は硬くて火持ちが良く備長炭として重用される。本遺跡出土材は曲柄鎌と思われる木製品1点である。

引用文献

能城修一・佐々木由香・鈴木三男・村上由美子. 2012. 弥生時代から古墳時代の関東地方におけるイチイガシの木材資源利用. 植生史研究21:29-40.

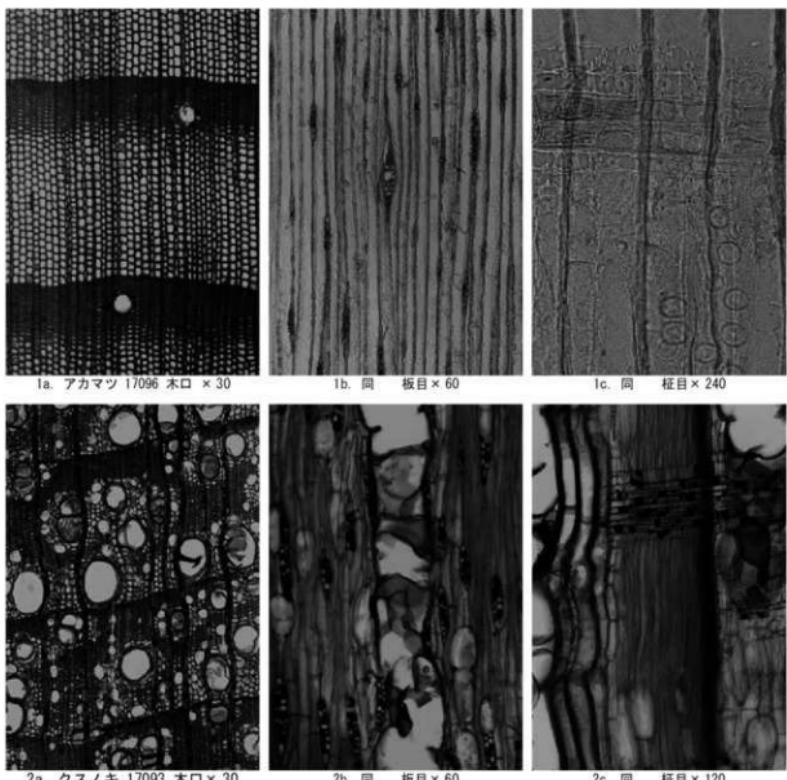


写真3 出土木材顕微鏡写真1

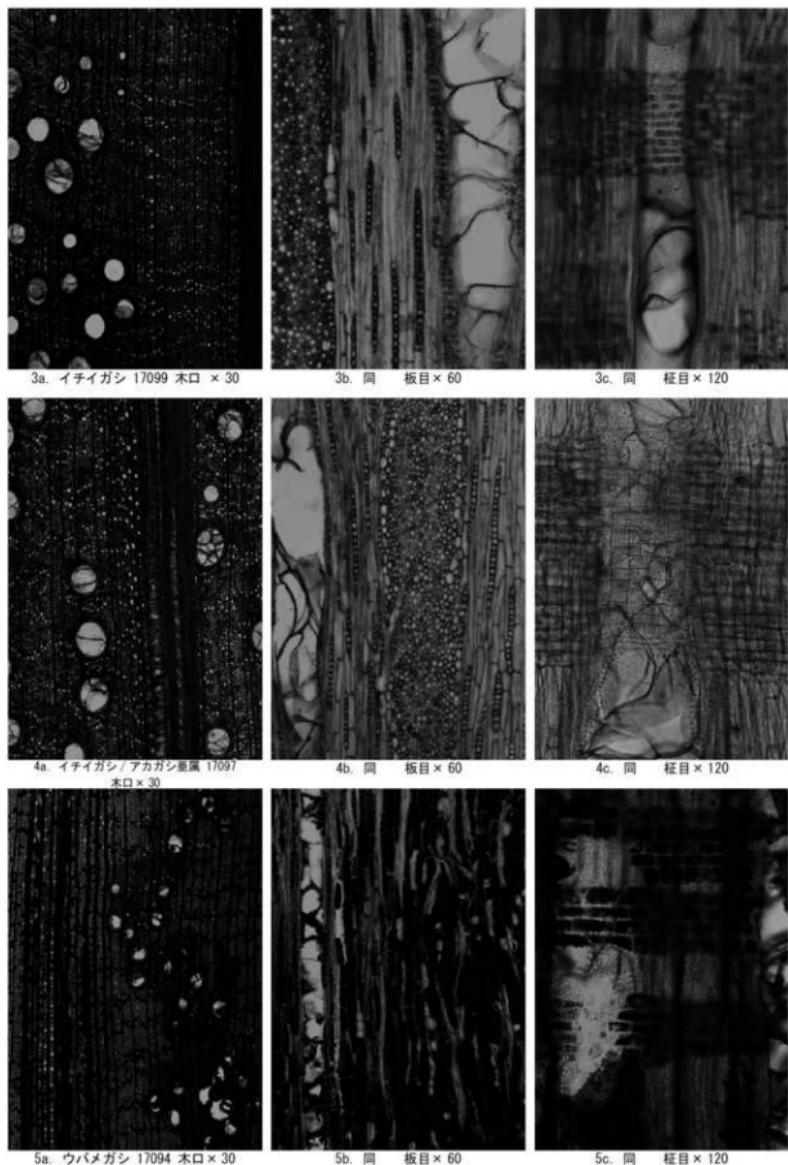


写真4 出土木材顕微鏡写真2

第2節 水洗遺跡の種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1はじめに

静岡県菊川市中内田に所在する水洗遺跡は、稲荷部川が開削した小谷底部に位置し、発掘調査では弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多く出土した、溝と流路跡が計5条検出された。

本分析調査では、遺構から出土した種子を対象に同定を行い、当時の植物利用について検討する。

2試料

試料は、弥生時代後期から古墳時代前期の溝と流路跡から出土した種実48点88個（内1個は炭化材）である。試料は全て乾燥した状態でポリ袋に入っている。各試料の詳細は、同定結果と共に第7表に示す。

3分析方法

試料を肉眼および双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体をピンセットで抽出する。種実遺体の同定は、現生標本や石川(1994)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施する。

結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示す。また、種実遺体各分類群の写真を添付し、状態良好な一部の種実の大きさをデジタルノギスで計測した結果や特徴等を一覧表に併記して同定根拠とする。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管する。

4結果

種実同定結果を第7表に示す。また、種実遺体各分類群の写真を写真5に、主な分類群の計測値等を第7表に示して同定根拠とする。

分析に供された48試料を通じて、被子植物7分類群(広葉樹のヤマモモ、オニグルミ、アカガシ亜属(アカガシ亜属?)、コナラ属、クスノキ、モモ、エゴノキ)87個の種実遺体が同定された。種実以外は、炭化材が1個(取上No.36)確認された。

栽培種は、果樹のモモの核が49個確認され、全個数の56%を占める。欠損がない完形核34個の計測値は、長さが18.26～26.27(平均21.75±標準偏差1.81)mm、幅が16.43～24.57(平均20.27±2.03)mm、厚さが14.65～20.23(平均17.17±1.46)mmである。出土核群は、一部試料(取上No.429など)に異なる形状の混在がみられるものの、頂部が丸みを帯びる個体を主体とし、鋭く尖る個体はみられない。

栽培種を除いた分類群は、全て木本種実から成り、常緑高木のヤマモモの核が1個(取上No.475)、アカガシ亜属の幼果が2個(取上No.99・130)、コナラ属(アカガシ亜属?)の果実が1個(取上No.14)、クスノキの種子が1個(取上No.470)、落葉高木のオニグルミの核が31個、落葉小高木のエゴノキの種子(取上No.208・511)の、計39個が確認された。

種実遺体の保存状態は良好である。エゴノキには食痕が確認された。また、オニグルミの一部には、リス類やネズミ類によると考えられる食痕の他に、人為による打撃痕と考えられる欠損が多く確認された。

5考察

水洗遺跡の出土種実には、栽培種のモモが多く確認された。果樹のモモは、近辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆される。

第7表 種実同定結果一覧表

No.	取上 No.	分類群	部位	状態	個数	枚番	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	写真 番号	備考	
1	9	モモ	核	完形	1	-	19.75	20.91	17.60	-	頂部丸い	
1	9	モモ	核	破片	1	-	22.21	+	-	-	-	
2	11	オニグルミ	核	完形	1	-	35.42	25.64	21.54	-	-	
2	11	モモ	核	完形	3	1	29.98	+ 20.80	17.56	-	頂部僅かに尖る(僅かに欠損)	
2	11	モモ	核	完形	2	1	19.95	+ 19.05	16.26	-	頂部僅かに尖る(僅かに欠損)	
2	11	モモ	核	完形	3	19.33	17.02	11.95	+	-	頂部尖る。表面草耗	
3	12	オニグルミ	核	破片	1	-	22.51	+ 19.95	5.90	+	上部(8~3時)、隔壁欠損	
4	14	オニグルミ	核	完形	1	-	27.19	23.65	20.35	-	-	
4	14	オニグルミ	核	完形未満	食痕	1	-	30.09	24.04	+ 12.29	+	リス類食痕(縫合線)
4	14	コナラ属 (アカガシ亞属?)	果実	完形	1	-	11.85	8.28	-	8	花柱欠損。基部着点径4.10mm	
5	28	モモ	核	完形	1	-	22.88	22.70	20.23	-	頂部尖る	
6	31	オニグルミ	核	破片	2	1	26.22	+ 22.55	11.22	+	頂部(11~1時)、基部(6~7時)欠損	
6	31	オニグルミ	核	破片	2	20.88	-	-	-	-		
7	34	オニグルミ	核	破片	1	-	27.12	+ 21.13	12.04	+	頂部(10~1時)、隔壁欠損	
8	35	モモ	核	完形	2	1	21.41	19.62	16.76	-	頂部僅かに尖る	
8	35	モモ	核	完形	2	1	21.45	18.33	16.35	-	頂部僅かに尖る	
9	36	オニグルミ	核	破片	1	-	29.30	+ 25.40	11.34	+	頂部(11~1時)、隔壁欠損	
9	36	モモ	核	完形	1	-	20.51	19.18	15.83	-	頂部僅かに尖る(僅かに欠損)	
9	36	モモ	核	完形未満	1	-	21.58	18.87	14.46	+	頂部僅かに尖る、側面磨耗	
9	36	種芽ではない (炭化材)			1	-	-	-	-	-	計測対象外	
10	38	オニグルミ	核	破片	食痕	1	-	27.29	+ 25.89	9.81	+	頂部(11~2時)、基部(4~8時)欠損、縫合線一部残存、頂部は打撲痕。基部はリス類食痕
11	51	オニグルミ	核	破片	1	-	21.47	+ 19.03	+ 10.41	+	基部~頂部(6~1時)、隔壁欠損。縫合線一部残存	
11	51	モモ	核	完形	1	-	21.60	+ 20.49	16.24	-	頂部僅かに尖る(僅かに欠損)	
12	52	モモ	核	完形	4	1	23.35	19.19	17.11	-	頂部僅かに尖る	
12	52	モモ	核	完形	2	20.97	18.45	15.24	-	頂部僅かに尖る		
12	52	モモ	核	完形	3	22.30	20.20	16.71	-	頂部僅かに尖る(僅かに欠損)		
12	52	モモ	核	完形	4	20.42	+ 19.07	17.22	-	頂部僅かに尖る(僅かに欠損)		
14	97	モモ	核	完形	2	1	21.43	+ 20.47	18.60	-	頂部僅かに尖る(僅かに欠損)	
14	97	モモ	核	完形	2	1	19.98	20.31	17.52	-	頂部僅かに尖る	
15	99	アカガシ亞属 幼果		完形	1	-	5.85	6.79	-	-	花柱欠損、輪状紋5~6段	
16	130	オニグルミ	核	破片	1	-	27.30	+ 20.17	+ 10.77	+	頂部~基部(3~12時)欠損	
16	130	オニグルミ	核	破片	1	-	29.60	+ 22.34	+ 11.49	+	リス類食痕(縫合線)	
16	130	アカガシ亞属 幼果		完形	1	-	5.99	5.98	-	7	花柱欠損、輪状紋5段	
17	149	モモ	核	完形	1	-	19.90	18.07	15.50	-	頂部僅かに尖る	
18	207	モモ	核	完形	1	-	19.66	18.04	15.48	13	頂部尖る	
19	208	モモ	核	完形	1	-	21.42	16.43	14.65	-	頂部僅かに尖る	
19	208	エゴノキ	種子	完形未満	食痕	1	-	10.92	7.50	7.46	-	-
20	209	オニグルミ	核	完形	2	1	32.18	26.47	23.44	-	-	
20	209	オニグルミ	核	完形	2	2	28.71	26.63	21.82	-	-	
20	209	オニグルミ	核	完形未満	食痕	1	-	30.11	23.19	21.78	4	ネズミ類食痕2箇所(縫合線)
20	209	モモ	核	完形	2	1	21.63	21.61	17.31	-	頂部丸い	
20	209	モモ	核	完形	2	2	21.68	+ 20.50	17.96	-	頂部丸い(僅かに欠損)	
21	211	オニグルミ	核	完形未満	食痕	1	-	29.55	24.50	+ 22.55	-	ネズミ類食痕1箇所(縫合線)
22	212	オニグルミ	核	完形	1	-	27.06	26.19	24.50	-	-	
22	212	オニグルミ	核	完形未満	食痕	1	-	31.78	24.12	+ 24.32	-	ネズミ類食痕2箇所(縫合線)
23	217	オニグルミ	核	破片	1	-	28.80	+ 24.05	+ 12.19	+	基部~頂部(10~6時)欠損	
24	218	オニグルミ	核	完形	1	-	30.57	20.71	17.26	2	頂部僅く尖る	
25	248	オニグルミ	核	完形	1	-	32.48	24.26	18.58	3	頂部僅く尖る	
25	248	モモ	核	完形	3	1	23.04	20.23	17.13	-	頂部僅かに尖る	
25	248	モモ	核	完形	2	2	21.63	18.65	16.52	-	頂部尖る	
25	248	モモ	核	完形	3	18.53	17.36	15.31	-	頂部僅かに尖る		
25	248	モモ	核	破片	1	-	20.58	+ 20.40	8.68	+	頂部丸い	
26	262	オニグルミ	核	完形未満	食痕	1	-	33.19	23.05	+ 22.83	-	ネズミ類食痕2箇所(縫合線)
27	269	オニグルミ	核	破片	1	-	26.78	+	-	-	頂部~基部(11~6時)欠損	
27	269	モモ	核	完形	4	1	22.79	24.57	20.15	-	頂部僅かに尖る	
27	269	モモ	核	完形	2	2	22.60	22.18	17.88	-	頂部丸い	
27	269	モモ	核	完形	3	2	22.16	18.87	16.54	-	頂部尖る	
27	269	モモ	核	完形	4	20.34	19.10	15.43	-	頂部僅かに尖る		
27	269	モモ	核	破片	1	-	-	-	-	-	計測対象外	

第7表 種実同定結果一覧表

No.	取上No.	分類群	部位	状態	個数	枚番	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	写真番号	備考		
28	303	オニグルミ	核	完形	食痕	1	-	29.95	23.51	*	23.32	-	
29	304	オニグルミ	核	完形		1	-	28.70	27.23		25.52	-	
30	305	オニグルミ	核	破片	食痕	2	1	27.70	*	18.94	10.26	*	
30	305	オニグルミ	核	破片	食痕	-	2	31.03	*	27.22	11.95	*	
31	306	モモ	核	完形		1	-	22.04	21.83		17.76	-	
32	327	モモ	核	完形		1	-	21.87	21.76		17.33	-	
33	353	オニグルミ	核	破片		1	-	28.77	*	21.37	9.24	*	
33	353	モモ	核	完形未満		1	-	22.80	*	18.74	16.71	-	
34	392	モモ	核	完形		3	1	21.66	21.21		17.38	-	
34	392	モモ	核	完形		-	2	19.28	17.72		15.62	-	
34	392	モモ	核	完形		-	3	20.31	19.05		16.11	-	
35	429	モモ	核	完形		3	1	18.26	18.36		19.02	12	
35	429	モモ	核	完形		-	2	24.89	24.18		19.10	-	
35	429	モモ	核	完形		-	3	23.34	20.93		17.55	-	
36	437	モモ	核	完形		3	1	24.19	20.73		16.72	-	
36	437	モモ	核	完形		-	2	24.54	22.82		20.09	-	
36	437	モモ	核	完形		-	3	22.97	21.03		16.62	-	
37	438	モモ	核	破片		1	-	22.01	*	22.55	11.23	*	
38	445	オニグルミ	核	完形		1	-	31.45	*	24.51	23.33	-	
39	449	モモ	核	破片		1	-	22.02	*	20.21	9.11	*	
40	452	モモ	核	完形		1	-	22.71	22.11		18.26	-	
41	470	クスノキ	種子	完形		1	-	4.87	5.06		4.67	10	
42	475	ヤマモモ	核	完形		1	-	6.49	6.00		4.46	1	
43	488	モモ	核	完形		1	-	26.27	23.86		18.69	11	
44	495	モモ	核	完形未満		1	-	25.22	*	20.44	*	17.57	-
45	508	モモ	核	完形		1	-	20.70	19.55		18.34	-	
46	510	オニグルミ	核	破片		1	-	13.23	*	-	-	-	
47	511	エゴノキ	種子	完形未満	食痕	1	-	8.75	*	4.99	*	5.31	14
48	516	オニグルミ	核	破片	食痕	1	-	27.52	*	23.94	*	10.41	*
平均													
標準偏差													
最小													
最大													
標本数													
欠損のないモモ核の計測値													

(注) 計測はデジタルノギスを使用し、欠損等は残存値に「*」で示す。

栽培種を除いた分類群は、全て木本から成り、常緑広葉樹林(照葉樹林)の主要構成種である常緑高木のヤマモモ、コナラ属アカガシ亜属、クスノキや、河畔林要素の落葉高木であるオニグルミ、落葉小高木のエゴノキが確認された。これらの樹種は、遺跡周辺の照葉樹林内や稲荷部川流域の河畔林等に生育していたと考えられる。

なお、堅果類のオニグルミは、果実(核)内部の子葉が食用可能で、コナラ属、アカガシ亜属は、あく抜きを施することで子葉が食用可能となる。ヤマモモは、果実が食用可能である。エゴノキの種子は食用に適さないが、エゴサボニンを含む果皮が洗濯や魚探等に利用可能である。これらの出土種実のうち、オニグルミ以外は人が利用した痕跡が確認されなかったが、オニグルミには打撃痕の可能性が示唆された。人が食用に利用するために核を叩き割り、内部の子葉を取り出した痕跡と考えられる。

引用文献

石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑(2010年改訂版), 東北大出版会, 678p.

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2012, ネイチャーウォッティングガイドブック 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種—, 誠文堂新光社, 272p.



- | | |
|-------------------------------------|------------------------------|
| 1. ヤマモモ 種(取上No.475) | 2. オニグルミ 核(取上No.218) |
| 3. オニグルミ 核(取上No.248) | 4. オニグルミ 核(ネズミ類食痕)(取上No.209) |
| 5. オニグルミ 核(リス類食痕)(取上No.14) | 8. コナラ属(アカガシ亜属?) 果実(取上No.14) |
| 6. オニグルミ 核(リス類食痕, 顶部打撃痕?)(取上No.305) | 10. モモ 核(取上No.488) |
| 7. アカガシ亜属 効果(取上No.130) | 12. モモ 核(取上No.207) |
| 9. クスノキ 種子(取上No.470) | |
| 11. モモ 核(取上No.429) | |
| 13. エゴノキ 種子(取上No.511) | |

写真5 種実遺体

第3節 水洗遺跡出土石器の岩石肉眼鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1はじめに

静岡県菊川市中内田に所在する水洗遺跡は、稲荷部川が開削した小谷底部に位置し、発掘調査では弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多く出土した、溝と流路跡が計5条検出された。

本分析調査では、遺構から出土した石器について肉眼鑑定を行い、石材利用について検討する。

2試料

試料は、弥生時代後期から古墳時代前期の自然流路等から出土した石器15点である。器種別の点数は、剥片1点、扁平片刃石斧1点、石鍬1点、砥石1点、敲石8点、台石？1点、有孔石製品1点、石皿？1点である。

石製品の取上Noなどの詳細は結果とともに第8表に示す。代表的な岩相を示す石材については、写真撮影を行い、写真6に示した。

3分析方法

岩石肉眼鑑定は、野外用ルーペを用いて行い、石材表面の鉱物や組織を観察し、五十嵐(2006)の分類基準に基づき、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。なお、正確な岩石名の決定には、岩石薄片作成観察や、蛍光X線分析、X線回折分析などを併用するが、今回は実施していないため、鑑定された岩石名は概査的な岩石名である点に留意されたい。

4結果

鑑定結果を第8表に、器種別の石質組成を第9表に示す。深成岩類として細粒黒雲母花崗岩1点、半深成岩類として石英斑岩1点、火山岩類として流紋岩1点、堆積岩類として砂岩9点、頁岩2点、変成岩類として董青石ホルンフェルス1点に鑑定された。傾向として、堆積岩類の砂岩が主要な石材として利用されており、石鍬、敲石、台石？、石皿？へ多岐にわたり使用される。

5考察

水洗遺跡は、菊川市中内田地区の両側を丘陵に挟まれた沖積低地上で、菊川水系の支川の稲荷部川の流路沿いに位置する。20万分の1地質図幅「静岡及び御前崎（第2版）」（杉山ほか、2010）によれば、周辺の丘陵を構成するのは、鮮新世～漸新世後期の砂岩泥岩互層および泥岩を主体とし、礫岩および凝灰岩を伴う掛川層群である。さらに、本遺跡より西方において、

第8表 岩石肉眼鑑定結果一覧表

No.	取上No.	堆積No.	材質	種類	備考
1	12	164	流紋岩	砥石	
2	248	137	砂岩	敲石	破片
3	248	138	砂岩	敲石	小型
4	305	-	砂岩	石皿？	小破片
5	307	141	頁岩	有孔石製品	欠損、半分ほどか
6	364	139	砂岩	敲石	小型
7	397	-	砂岩	台石？	被熱。破片
8	406	134	細粒黒雲母花崗岩	敲石	
9	407	133	石英斑岩	敲石	
10	412	132	砂岩	敲石	
11	424	135	砂岩	敲石	欠損
12	439	131	砂岩	石鍬	欠損、半分ほどか
13	442	136	砂岩	敲石	
14	481	-	頁岩	剥片	
15	488	140	董青石ホルンフェルス	扁平片刃石斧	破片、基部1/3ほど

掛川層群の上位に、礫、砂および泥から構成される前期-中期更新世の小笠層群が分布している。合わせて、水洗遺跡が立地する旧稻荷部川の流路に沿って、泥、砂および礫からなる完新世の沖積層が分布している。

以上の地質背景を考慮すると、本遺跡より出土した石材は、掛川層群や小笠層群に含まれる礫や稻荷部川から採取されたものとみられる。

砂岩および頁岩は、堅硬緻密質の岩相を示し、古期堆積岩類の地質に由来する。菊川・大井川水系の上流域には、古期堆積岩類の地質が分布されており、これらに由来するものと考えられる。

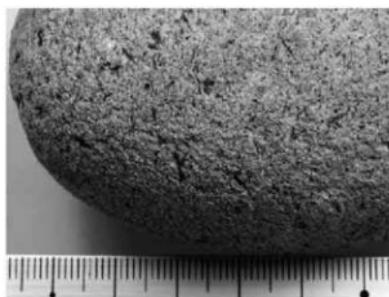
深成岩類の細粒黒雲母花崗岩および半深成岩類の石英斑岩は、敲石に使用されている。小笠層群の礫層には、花崗岩類の礫が含まれる(杉山ほか1988)。火山岩類の流紋岩は、砥石に使用されている。これらの岩石は10cm程度の径を示す。小笠山丘陵に位置する小笠ダム東方約1kmの風吹トンネル北口東側の砂利採取跡において、小笠層群の含礫泥中より、砂岩、チャート、頁岩、流紋岩、花崗岩、アプライト、脈石英などの礫が認められており、これらの礫について、天童川流域の河川礫が小笠層群の堆積時にもたらされたと考えられている(石田ほか1980)。したがって、本遺跡より出土した花崗岩、石英斑岩、流紋岩は小笠層群中の礫を利用したものと考えられる。藍青石ホルンフェルスは、一般に、泥質岩を源岩とし、花崗岩類の貫入に伴って生じた接触変成作用により形成された岩石で、花崗岩体の周縁部に分布する。花崗岩類の分布域に伴うことから、小笠層群の礫として僅かに含まれていたものを利用した可能性が考えられる。

引用文献

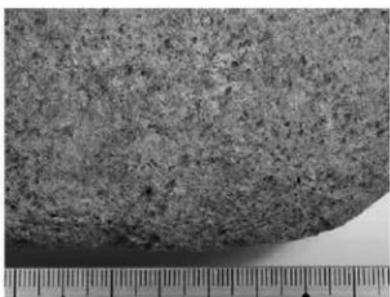
- 五十嵐俊雄, 2006, 考古資料の岩石学, パリノ・サーヴェイ株式会社, 194p.
- 石田志朗・牧野内猛・西村 昭・竹村恵二・櫻原 徹・西山幸治・林田 明, 1980, 掛川地域の中部更新統. 第四紀研究, 19, 3, 133-147.
- 杉山雄一・水野清秀・狩野謙一・村松 武・松田時彦・石塚 治・及川輝樹・高田 亮・荒井晃作・岡村行信・実松健造・高橋正明・尾山洋一・駒澤正夫, 2010, 20万分の1地質図幅「静岡及び御前崎(第2版)」, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 杉山雄一・寒川 旭・下川浩一・水野清秀, 1988, 地域地質研究報告 5万万分の1地質図幅「御前崎」, 地質調査所, 153p.

第9表 器種別石質組成一覧表

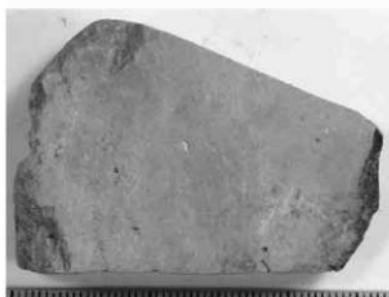
器種 石質	剥片	扁平片刃石斧	石錐	砥石	敲石	台石?	有孔石製品	石皿?	合計
深成岩類									
細粒黒雲母花崗岩					1				1
半深成岩類									
石英斑岩					1				1
火山岩類									
流紋岩				1					1
堆積岩類									
砂岩			1		6	1		1	9
頁岩	1						1		2
変成岩類									
藍青石ホルンフェルス		1							1
合計	1	1	1	1	8	1	1	1	15



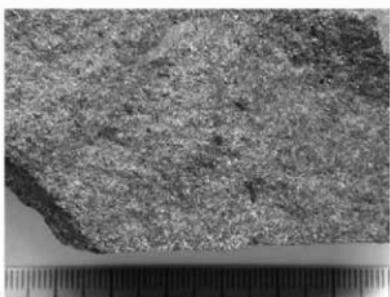
1. №.8 敲石 細粒黒雲母花崗岩



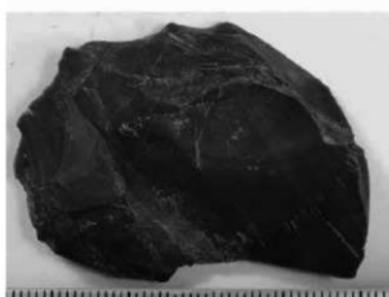
2. №.9 敲石 石英斑岩



3. №.1 逃石 流紋岩



4. №.7 台石? 砂岩



5. №.14 剥片 貝岩



6. №.15 縱平片刃石斧 墓青石ホルンフェルス

写真6 石材

第4節 水洗遺跡出土動物骨の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1はじめに

静岡県菊川市中内田に所在する水洗遺跡は、稻荷部川が開削した小谷底部に位置し、発掘調査では弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多く出土した、溝と流路跡が計5条検出された。

本分析調査では、遺構から出土した動物骨について同定を行い、動物利用について検討する。

2 試料

試料は、弥生時代後期から古墳時代前期の自然流路等から出土した取上No.80・98・109・308・311・353・427の7試料である。この内、取上No.80は2点みられ、また取上No.427は複数点の破片が存在する。いずれも乾いた状態にある。

第10表 骨同定結果一覧表

No.	取上 No.	種類	部位	左 右	状態等	数量		備考
1	80	イノシシ属	下顎第2門歯	右	破片	1		未出歯牙
			下顎骨		破片	1	P4植立、ビビアナイト沈着	
2	98	イノシシ属?	歯牙		破片	1		
3	109	哺乳綱	不明		破片	1		
4	308	イノシシ属	下顎大歯	右	破片	1		未出歯牙
5	311	イノシシ属	上顎第3後臼歯	右	破片	1		未出歯牙、歯根未形成
6	353	哺乳綱	肋骨		破片	1		
7	427	イノシシ属	肩甲骨	右	破片	1	+	ビビアナイト沈着、SLC2L54 第26回144

3 分析方法

アクリル製樹脂であるプライマルMV-1を3倍に希釈した液体を骨に含浸させて強化・補強を行う。自然乾燥後、一部の試料に関しては、一般作用接着剤等で接合・復元する。

これらの骨を肉眼および実体顕微鏡で観察し、形態的特徴から種類・部位等を同定する。また、必要に応じてDriehaus(1976)にしたがって計測する。

4 結果

確認された種類は、脊椎動物門(Vertebrata)哺乳綱(Mammalia)ウシ目(Artiodactyla)イノシシ科(Suidae)イノシシ属(Sus)である。同定結果を第10表に示す。以下、試料ごとに結果を記す。

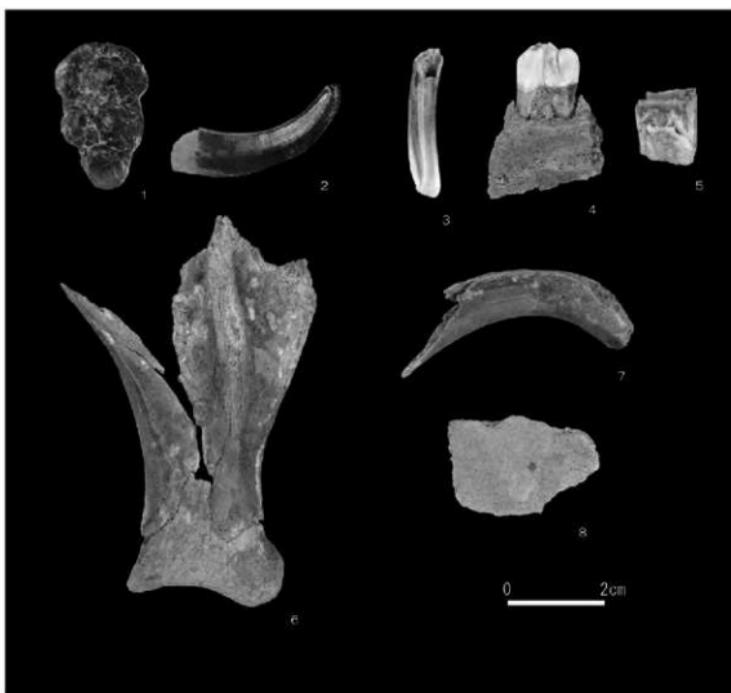
- ・取上No.80 イノシシ属の右下顎第2門歯と左下顎骨である。右下顎第2門歯は未出歯牙で、左下顎骨は第4前臼歯が植立する。なお、左下顎骨は、ビビアナイトが沈着する。
- ・取上No.98 イノシシ属の可能性がある歯牙の破片である。
- ・取上No.109 哺乳綱の部位不明破片である。比較的扁平な骨であり、頭蓋等の可能性もある。
- ・取上No.308 イノシシ属の右下顎犬歯である。未出歯牙である。
- ・取上No.311 イノシシ属の右上顎第3後臼歯である。歯根が形成されておらず、未出歯牙である。
- ・取上No.353 哺乳綱の肋骨片である。
- ・取上No.427 イノシシ属の右肩甲骨である。ビビアナイトが沈着する。

5 考察

本分析調査で対象とした動物骨は、イノシシ属であった。なお、対象とした骨は部分的であり、ブタとイノシシの区別がつかず、そのためにイノシシ属で止めている。骨の一部が青色に変色するが、これは骨の主成分であるリン酸と水溶性の鉄分が結合してビビアナイトが沈着したためであり、骨が還元条件下にあったことが伺える。出土した骨は、重複する部位がみられず、おそらくは同一個体に由来する可能性が高い。右下顎第2門歯、右大歯、右上顎第3後臼歯が未出状態であり、左下顎第4前臼歯が植立することから、小池・林(1984)を参考とすると1.5歳齢よりも若干若い個体であったと思われる。おそらくは食料資源として持ち込まれ、不必要的部位が廃棄されたのであろう。

引用文献

- Angela von den Driehaus, 1976, A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites, Peabody Museum Bulletins 1, i-ix, 1-137.
小池裕子・林 良博, 1984, 遺跡出土ニホンイノシシの齢査定について, 古文化財の自然科学的研究 古文化財編集委員編, 同朋舎, 519-524.



- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| 1. イノシシ属右上顎第3後臼歯(取上No.311) | 2. イノシシ属右下顎犬歯(取上No.306) |
| 3. イノシシ属右下顎第2門歯(取上No.80) | 4. イノシシ属左下顎骨(取上No.80) |
| 5. イノシシ属?歯牙(取上No.98) | 6. イノシシ属右肩甲骨(取上No.427) |
| 7. 哺乳綱肋骨(取上No.353) | 8. 哺乳綱不明(取上No.109) |

写真7 出土骨

第6章　まとめ

今回の調査により検出された遺構は溝1条と自然流路4条のみであった。

そのうち溝としたSD01は古墳時代前期の土器が比較的まとまって出土し、の中でも高壙が多いことから、古墳時代前期に水辺で行われた祭祀の痕跡であると推測される。

4条の自然流路からは、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が大量に出土した。付近に当該期の集落が存在したことを見ていよう。

自然流路は土層の切り合いから、前後関係が推測されるものもあるが、いずれの自然流路内においても、弥生時代後期の土器と古墳時代前期の土器は混在して包含されており、明確に時期を決定することはできない。古墳時代前期ごろにおおかた埋没したのであろう。ただし、SR05では上層からではあるが、7世紀前半と認められる須恵器が出土しており、最終的な埋没はそれ以後と考えられる。ちなみに7世紀前半は平尾野添横穴群など、付近に横穴群が築かれた時期にあたる。

出土した弥生土器、土師器の中には搬入品と思われるものもある程度あり、当時、他地域との交流があったことを示している。古墳時代前期の土器では、駿河湾地域の大席式土器、濃尾平野にルーツを持つS字状口縁台付甕が出土しており、東西双方の地域とも流通網の中でつながっていた様相がわかる。

木製品は7点出土している。器種が判明したものは農工具で、イチイガシ、ウバメガシ、マツなどが利用されており、木材の利用状況は、静岡県内の同時期の遺跡と整合する。この点においても、孤立していない様子を示していくよう。

溝と自然流路からは大量の土器とともに、種子、獸骨が出土し、分析により種を同定した。

種子に関しては、栽培種のモモの核が多く出土し、食料に利用されていたことがわかる。オニグルミには人為による打撲痕と考えられる欠損が多く確認され、ヤマモモ、コナラ属アカガシ亜属の種子などとともに、これらの果実が食用に利用されたと考えられる。また、クヌキ、エゴノキも確認されていることから、遺跡周辺の照葉樹林や河畔林に生育していたと考えられる。

動物の骨の同定で判明したのは、すべてイノシシ属であった。重複する部位がないことから同一個体と推定された。歯から1.5歳より若干若い個体と考えられる。また、肩甲骨はト骨として利用されている。

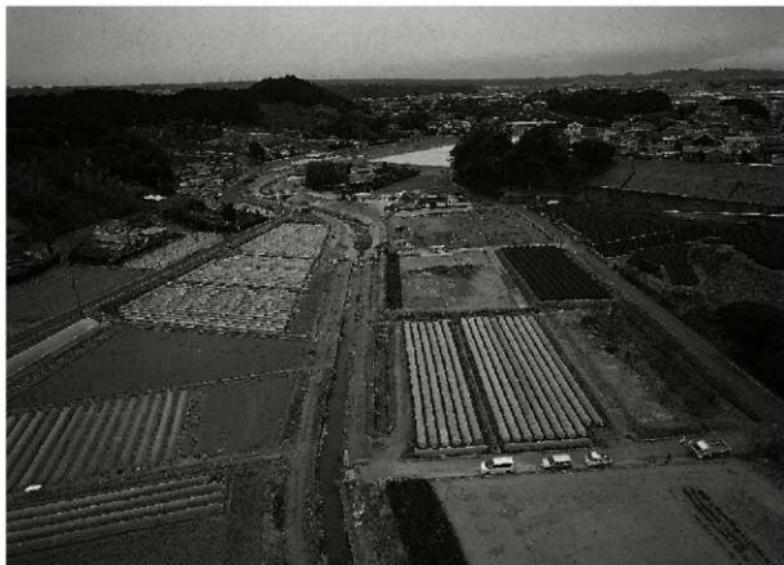
水洗遺跡の近辺に弥生時代後期から古墳時代前期に営まれていた集落では、農耕を行ない、栽培種であるモモ及び周辺で採集した木の実、イノシシなど、様々な食糧を利用して生活したことがわかる。石器の石材利用では、周辺の丘陵や菊川・大井川水系と周辺から石材入手しており、周辺の資源を有効に利用した集落であったと想像できる。一方、出土した土器からは他地域とのとの交流をもっていたようである。また、高壙などの土器を用いた水辺の祭祀のほか、大量のモモやト骨を使用した祭祀も集落またはその周辺で行われたことも想像される。

今回の調査は、集落そのものの調査ではなかつたが、当時の人々の活動を推測するには十分な結果であった。しかし、周辺の遺跡の分布状況および事前の確認調査の結果からは集落の位置を特定することはできず、現段階での埋蔵文化財包蔵地の範囲外に存在する可能性が高いであろう。決して開発の多い地区ではないのだが、今後の開発等には十分注意が必要であることを最後に記しておく。

参考文献

- 菊川市教育委員会 2016 『宮ノ西遺跡発掘調査報告書－第4次調査－』
- 菊川町教育委員会 1985 『三沢西原遺跡発掘調査報告書』
- 菊川町教育委員会 2004 『長池古墳群4号墳発掘調査報告書』
- 菊川町教育委員会 2004 『高田大屋敷遺跡発掘調査報告書（第1次～第7次・第9次調査）』
- 郷土誌編纂委員会 1975 『一郷土誌－内田のさと』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『平尾野添横穴群』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001 『御領所遺跡』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 『白岩下遺跡』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『菊川市下平川の遺跡群』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『白岩遺跡・白岩下遺跡』
- 静岡県 1992 『静岡県史 資料編3 考古三』
- 静岡県教育委員会 1983 『遠江の横穴群』
- 静岡県教育委員会 2003 『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』
- 加納俊介・石黒立人編 2002 『弥生土器の様式と編年－東海編－』
- 川江秀孝 1979 「静岡県下の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジウム2』
- 鈴木敏則 2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅 第5分冊 捕遺・論考編』

写真図版



1 調査区遠景（北西から）



2 調査区全景

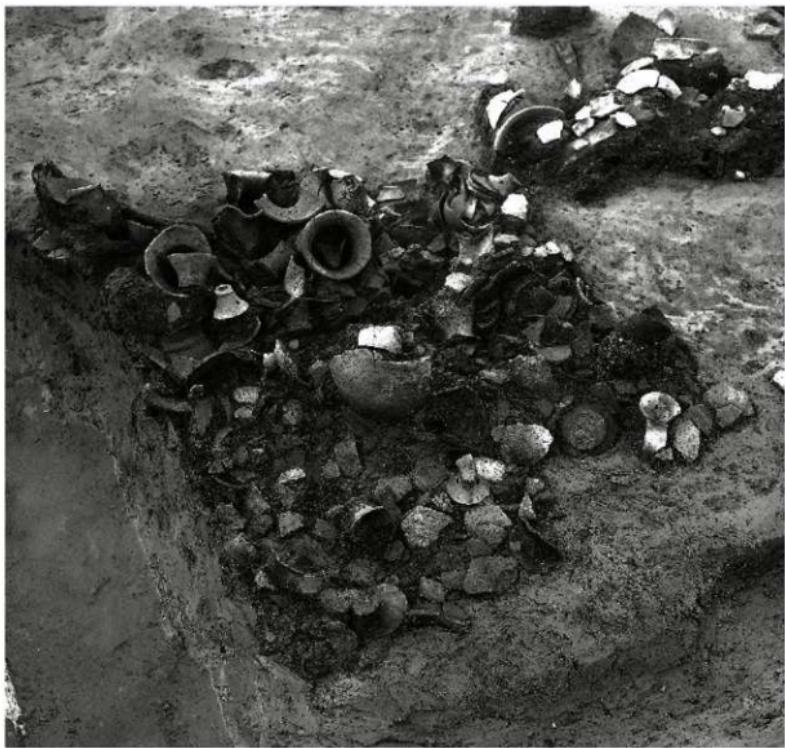
図版 2



1 調査区完掘状況（北西から）



2 SD01 完掘状況（西から）



1 S001 造物出土状況（東から）



2 SR02 木製品出土状況（南から）



3 SR02 実掘状況（南から）

図版 4



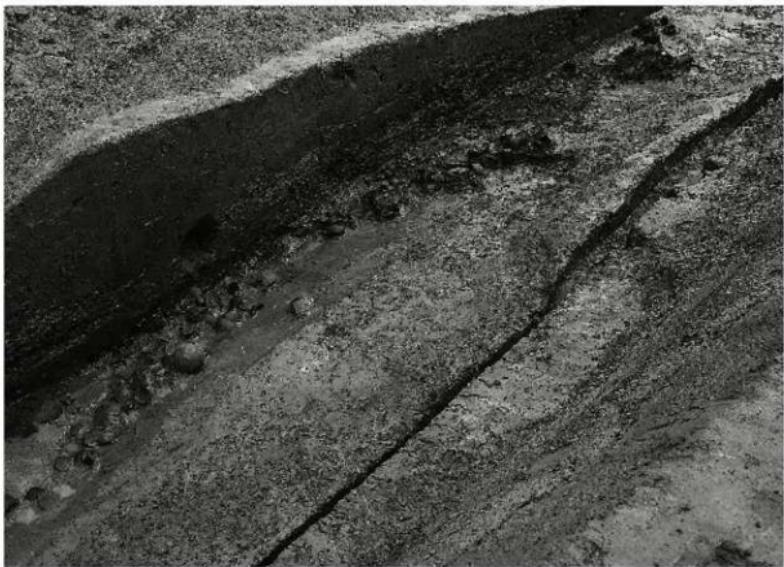
1 SR03 完掘状況（南から）



2 SR04 完掘状況（北西から）

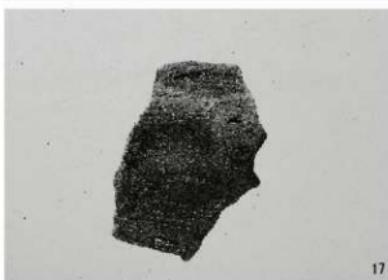
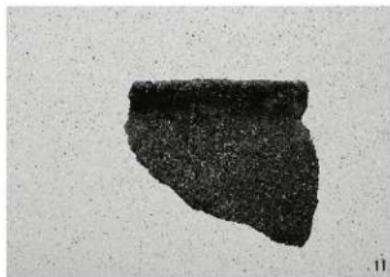


1 SR05 完掘状況（北西から）



2 SR05 遺物出土状況（西から）

図版 6



SD01 出土土器

図版 7



24



26



27



28



29



30



34



35

S001・SR02 出土土器

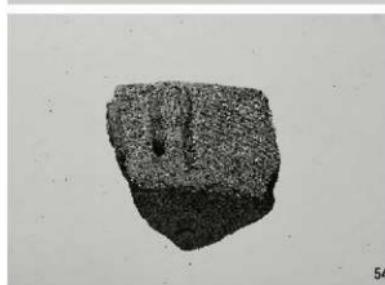
図版 8



33



37



43



57



63



65



74



66

SR03・SR04 出土土器

図版9



68



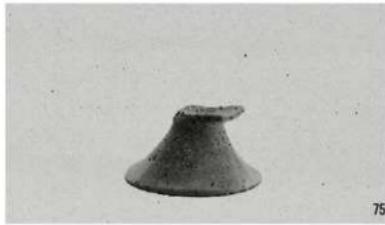
71



70



69



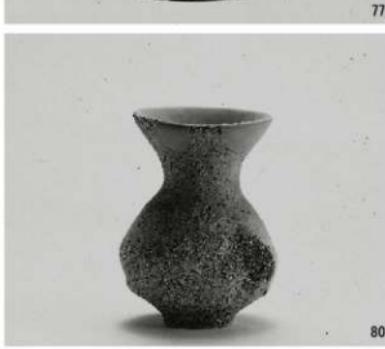
75



77



79



80

SR04・SR05 出土土器

図版 10



81



82



83



84



85



86



88



87

SR05 出土土器



89



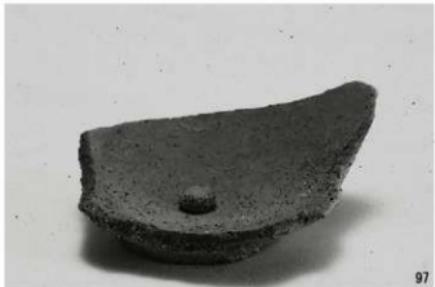
91



95



92



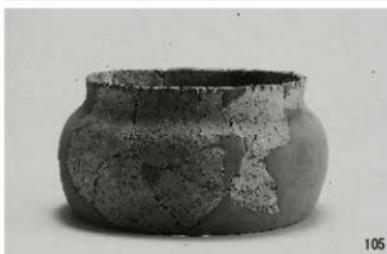
97

図版 12



SR05 出土土器

図版 13



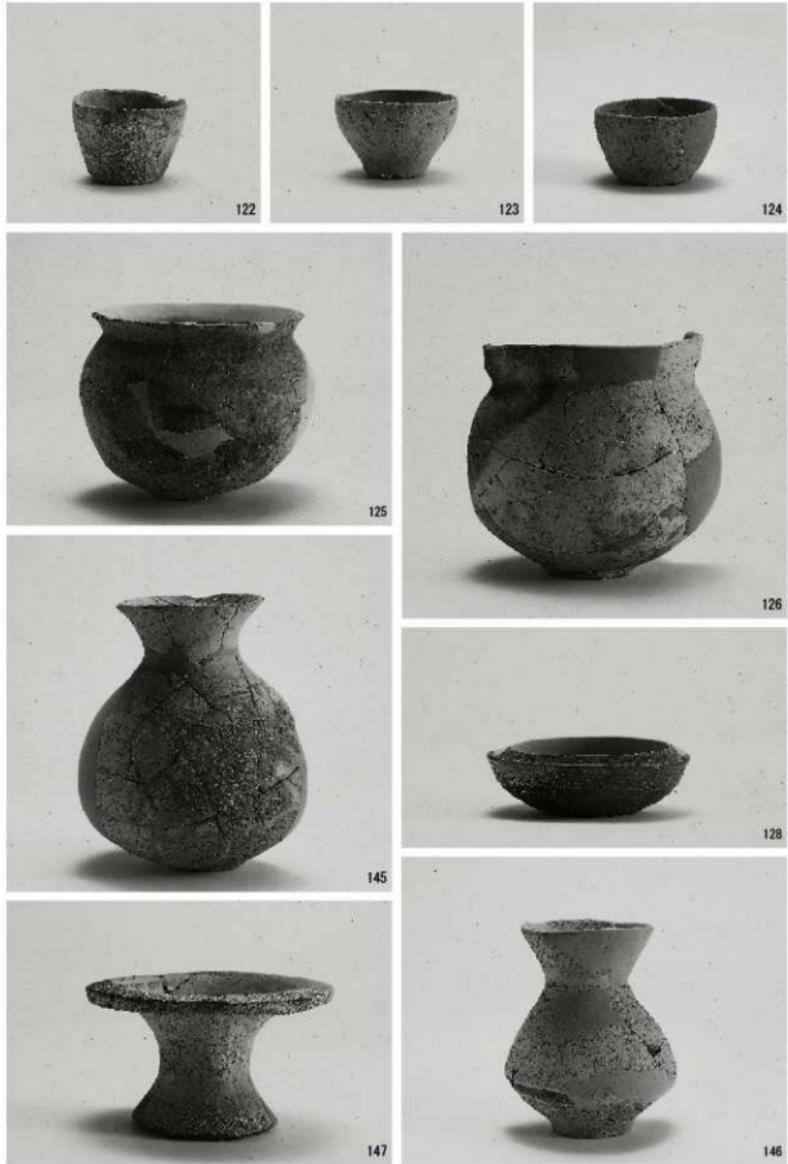
SR05 出土土器

図版 14



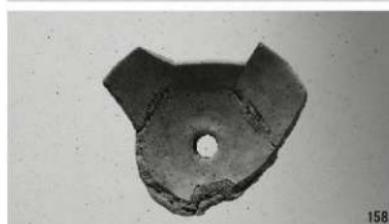
SR05 出土土器

図版 15

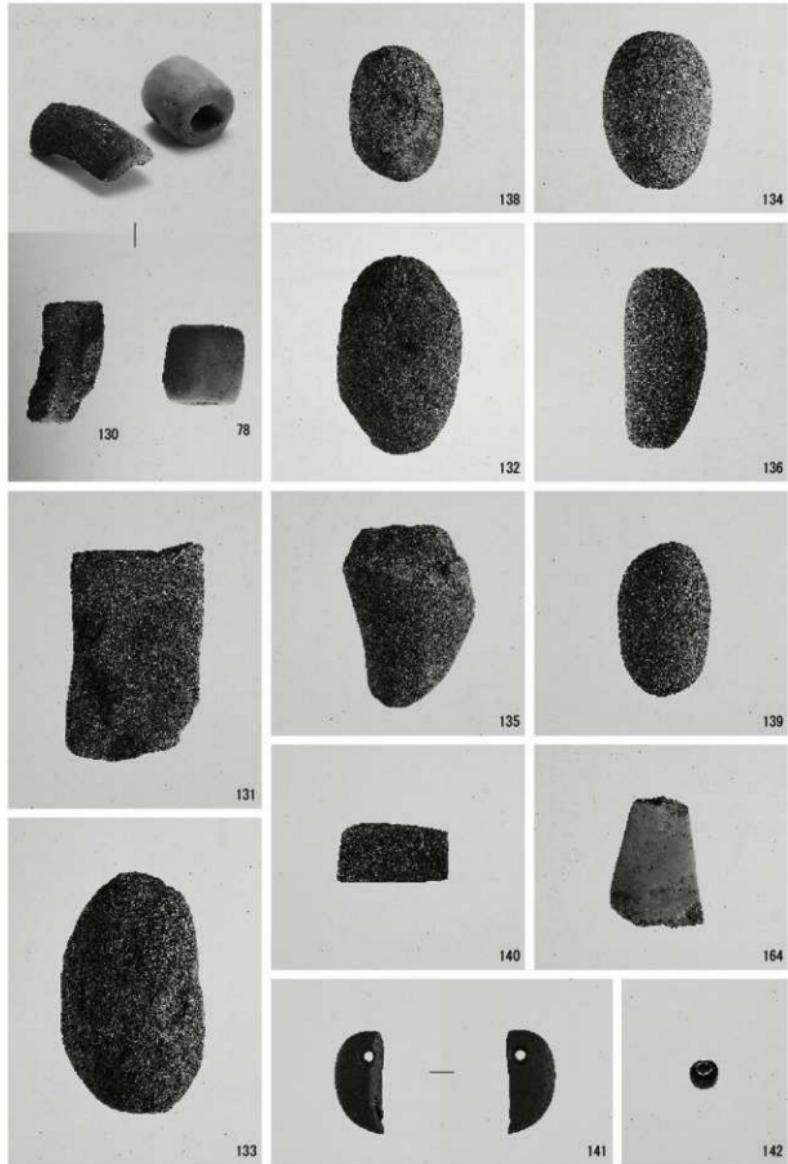


SR05・造横外出土土器

図版 16

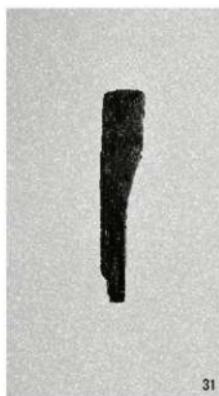


造模外出土土器



出土土製品・石器・ガラス製品

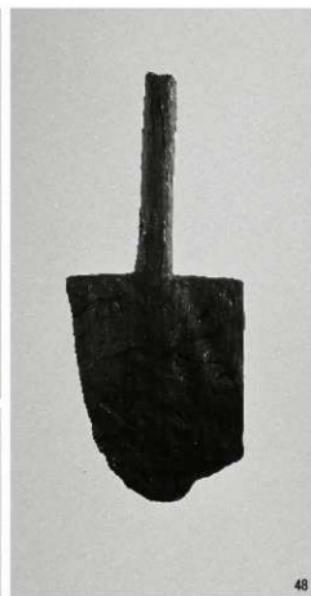
図版 18



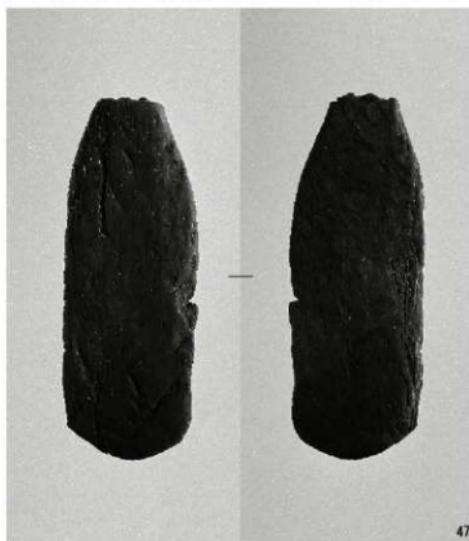
31



32



48



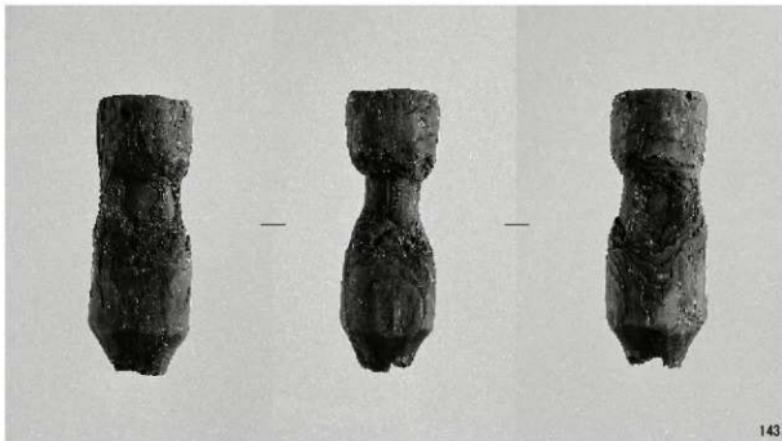
47



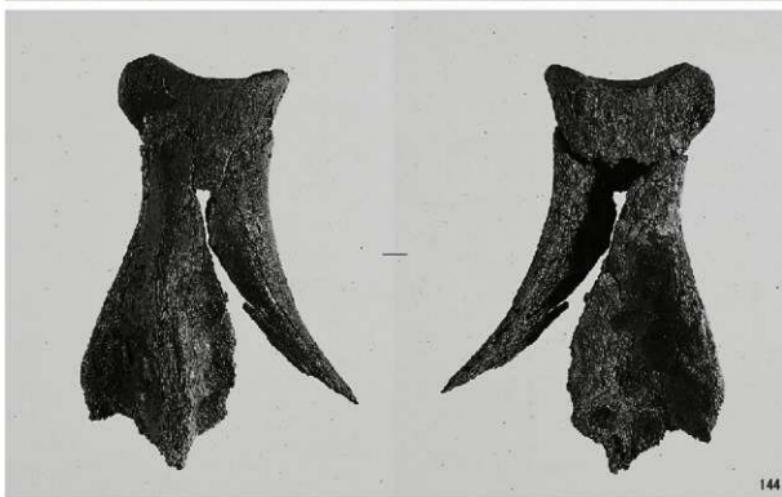
49

50

出土木製品



143



144



曲・骨

出土木製品・卜骨・動物骨

報告書抄録

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第60集

水洗遺跡

菊川市

平成29・30年度 一級河川稲荷部川豪雨災害等緊急対策事業及び

平成31年度 一級河川稲荷部川緊急自然災害防止対策事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

令和2年3月31日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター

〒421-3203 静岡県静岡市清水区蒲原5300-5

TEL 054-385-5500 (代)

FAX 054-385-5506

印 刷 所 株式会社 三創

〒422-8047 静岡県静岡市中村町166-1

TEL 054-282-4031 (代)

FAX 054-283-3984